山村美紗

ミステリー傑作集

愛人旅行殺人事件



KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

著者のことば

世の中には、さまざまな旅がある。肉親の通夜に海外から帰国する旅もあれば、堅くるしい研修旅行もある。誰と出会い、誰と結ばれるかという希望に胸おどらせる旅行もあるし、愛する男の子供を生みたいと願う受胎旅行もある。が、やっぱり一番楽しいのは、愛する人と一緒の旅である。好事魔多しのたとえの通り、その楽しかるべき旅に死の影がさしたら……。



ヤB-06

愛人旅行殺人事件

三村美紗

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝深井国

目次

愛人旅行殺人事件——7
京都受胎旅行殺人事件——61
京都見合旅行殺人事件——113
京都婚前旅行殺人事件——169

愛人旅行殺人事件

1

沖邦彦は、日本でも有数のビル業者である。テレビの豪邸拝見でも、彼の住まいが公開されて、その贅を凝らした邸に、視聴者は、ため息を洩らしたものだが、彼が有名なのは、その資産だけではない。

彼の美貌と、彼が独身であるということが、彼がマスコミの話題をよんだ理由である。

三十七歳で、独身、長身で端整な顔、大金持、そして、更に、彼を有名にしたのは、その彼が、花嫁を募集しているということだった。

彼は、本気なのかというテレビ局のインタビューに答えて、

「本当です。女遊びは二十年近くしてきましたが、そろそろ身を固めたいのです。でも、個人でつき合う範囲というのは知れています。ですから、私でいいという方には応募していただいて、ゆっくりと、おつき合いしてみつけたいと思っています」

と、いった。

そこで、あるテレビ局が仲介役となって、彼の花嫁募集が行われた。

書類と写真で三十人を残し、その三十人には、本人が一人一人会って、十人をえらび、少し交際するという。

最終的には、三人にしぼって、その中から必ず、花嫁をえらぶということだった。

「三十人に残った方からあとは、僅かですが、お礼を差しあげたいと思います。私のようなものと、結婚してもいいと云って下さったことに対する感謝の意味です」

沖は、あくまでも真面目に、謙虚に話していた。

さあ、それからが大変だった。全国から二千人以上の応募があり、それを三十人にしぼるまでに日数がかかった。

沖の配慮で、最後の十人以外は、名前を公表しないということだったので、タレントなどの応募も多かった。

中山美佳は、思いがけず三十人に選ばれ、幸福感に酔っていた。

彼女は、大学を卒業して三年間、平凡なOL生活を送っていたが、結婚相手もきまらず、何かをフッ切りたくて応募してみたのである。

まさか、三十人に残るとは思ってもいなかったのだが、通知を受けとると、どうしても、最後まで残りたいと思うようになった。

〈十人に残れたら、五十万円相当のダイヤの指輪を記念にくれるということだったわ。それに名前や顔も発表されるから、結婚を申し込んでくれる人もいるかもしれない〉

平凡な毎日に、急に光がさした感じだった。

不思議なもので、三十人に残ったときから、彼女は、沖邦彦が好きになってきていた。

最初は、結婚相手としての条件が備わっているという計算からだったが、次第に彼のことが気になってきた。テレビなどで、彼のことが出ると、自分のことのように、どきっとしたり、うろたえてしまうのだ。

〈愛人でもいい。彼のそばにずっといたい〉

とまで思うようになった。

やがて、彼と会う日がやって来た。

美佳は、指定されたホテルへ出かけた。一人ずつ会うのだと思っていた彼女は、そこに、三十人の女性全部が集っているのを見て、がっかりした。みんな美しい。

やがて、時間が来て、三十人の女性は、大広間に集められた。

沖の秘書という男が説明をする。
「番号と名前を書いたプレートをお渡ししますから、それを胸につけて下さい。そして、順番に五人ずつ別室へお入り下さい。中に、沖邦彦が待っております。それぞれお話をしていただいて、全員が終りましたら、次には、呼び出された人だけ、一人ずつ中へ入って下さい。以上です」
美佳がもらった番号は、十五番だった。

2

いよいよ、美佳たちのグループが入ることになった。
番号は、十一番から十五番までなので、美佳は、一番最後に部屋に入った。
何人かの男のまん中に、目ざす沖がいた。
彼は、入って来た五人をさっと見た。
「椅子に座って下さい」
そばにいた人がいった。
腰をかけると、沖が、もし、今、僕が百万円あげたらどう使うかと、一人ずつにきいた。
「全部貯金します」
と十一番が答えた。
沖が、若いとき苦労して金をためたことは、みんな知っていたから、それを考えて答えたのだろう。
「私は、半分貯金して、半分で買いたいものをゆっくり考えます」
と、答えたのは、モデルのようなスタイルのいい十二番の女性だった。
「君は？」
沖は、一きわ美しい十三番の女性を指した。
「私は、今交通の不便なところにいるので、車を買いたいと思います」
その女性は、にっこりした。
十四番の和服の女性は、
「両親にあげます」

と、しとやかにいった。
沖は、うなずきながら、次の美佳を見た。
最後なので、みんなが一通り言ってしまって、これという答えがない。仕方なく、美佳は、
「百万円全部持って百貨店に行って、欲しいものを片っぱしから買います」
と、いってしまった。
沖が唇をゆがめて、かすかに笑った。
〈失格ということだわ。一番最後なのに、もっと考えて答えればよかった〉
美佳は、すっかりしょげてしまった。
次に、彼は、十二番と十三番と、美佳に、
「君の夢は何？」
と、きいた。
「いい奥さんになることです」
と、ファッションモデルのような女性はこたえた。
「沖さんの妻になるのが夢です」
美しい女性は、また、にっこりした。
美佳は、とまどった。
彼女も、沖さんの奥さんになりたいといいたかったが、先を越されてしまったのだ。
「君はどう？」
沖が、催促した。
「はい、今の会社の課長に、辞表を出すのが夢です」
「アハハ、どうして？」
沖は、はじめて笑った。
「課長が嫌いで、今はやめたくてもやめるわけにいかないからです」
そのあと、二、三質問されたが、美佳は、何と答えたか覚えていないくらいだった。
外へ出て待っている間に、美佳は、よけい自信を失ってしまった。
いくら金持でも、奥さんが浪費家では困るのだ。手あたり次第に百万円も使われたのでは、問題外だろう。それに、どんな開けた男性でも、妻にするに

は、おとなしく、従順な女性がいいにきまっている。

勤め先の課長に、辞表を叩きつけるような女性では、まっ先に落すのはあたりまえだ。待っている間みんなは、不安そうに、ひそひそ話している。

どの女性も、美佳よりきれいにみえるし、話の内容も、どれをとっても模範答案のように思えた。

〈三十人に残ったのも、なにかの間違いなんだわ。そう思えば、あきらめもつくわ〉

一時間以上待たされるだろうと思ったのに、二十分ほどで選考結果が発表された。

「番号を呼んだ人だけ、前へ来て下さい」

秘書がそういって読みあげた番号の中に、美佳の番号はなかった。

予想はしていても、やはりがっくりとした。しかし、意外なことに、呼ばれたのは、落選した人たちで、前に集められた人は、記念品を貰って、ぞろぞろと出て行った。

「あとに残った人、集って下さい」

の声に、夢のような気分で、美佳は、前へ行った。どの顔も、喜びにあふれている。

結局十人が、残った人数だった。

「おめでとうございます。この十人の方は、今から、一人ずつ、部屋に入って、社長と話をして下さい」

みまわすと、美佳のグループで残ったのは、あのとびきり美人で、車を買うといった女性と、美佳だけだった。

「よかったわね」

その女性は、美佳のところへ来て、手を握った。

名前は、深尾涼子（りょうこ）といった。

誰にでも好かれそうな女性である。

「中山美佳です」

美佳も名乗った。

次の面接では、家庭のことや、仕事のことなどきかれ、その日は、帰ることになった。

あとの通知は、明日、電話でするということだった。
「電話のかからなかった方は、残念ながら失格です。その方には、速達で連絡します」
秘書がいった。
美佳は、涼子と、もう一人、ハーフのような顔をしたナオミという女性と三人で連れだって外に出て、喫茶店に入った。

3

「よかったわ。残れて」
ナオミがいった。
「本当に夢みたい」
涼子が、華やかな笑顔でいった。
「私も」
美佳は、何故(なぜ)自分が残れたのか不思議で、まだ、信じられなかった。
ジュースを注文すると、ナオミは、
「でも、今度の三人には残れないと思うわ。だって、三人は、もうきまってるんですって」
と、いった。
「どうして？」
美佳は、ワケがわからなかった。
「社長さんには、彼女が三人いるんだって。でも、社長さんにはお母さんがいて、その愛人の誰かを、すぐ奥さんにするわけにはいかないので、こういう形をとったということよ。待ってる間に、話をしていた人がいたの。本当だったら、応募した私たちって、馬鹿みたいね」
と、ナオミがいった。
「じゃあ、今日の三十人の中にいたのね？　その三人が……。いや、最後の十人の中にいたんだわ」
美佳は、ため息をついた。
「らしいわよ。そのお母さんは、今、入院しているみたいだけど、社長には、兄夫婦がいて、社長さん

の結婚に反対しているともいってたわ」
ナオミは、運ばれてきたコーヒーを、ブラックで飲みながらいった。
「どうして？　財産が減るから？」
美佳がきいた。
「そうよ。だって、社長がずっと独身だったら、社長が死んだら、財産は、自分たちのものになるわ。もちろん、お母さまが生きていらしたら、お母さまのものになると思うけど」
「お母さんというのも、もう長くないときいたわ」
涼子がいった。
「でも、社長が一人で築いた財産でしょう？」
美佳がいった。
「でも、そのもとになったのは、わずかだけど、お父さんのやっていた不動産業の財産だったらしいわ」
「ナオミさんよく知っているのね」
涼子が、じっとナオミの顔をみつめていった。
「あら、週刊誌にも出てたわ。家族構成も」
ナオミは、あわてていった。
「面接の時だけど、社長のそばに、その兄さんもいたのかしら？」
と、涼子。
「多分ね。でも、いいわ。駄目でも何かくださるんでしょう？」
「でも、やっぱり残りたかったわ」
涼子は、まだ、あきらめ切れないようにいった。
「でも、きまっている三人て、どの人かしら？　私たち三人をのけたら、あと七人ね」
三人は、残りの七人のうちに、社長の愛人がいるとしたら、どの人だろうかと、色々推理した。しかし、どれも、そうみたいに見えて、わからずじまいだった。
三人は、電話番号を教え合って、その日は、別れた。
家に帰ってくると、美佳は、急に、現実に引き戻

された。

〈今日は、マスコミの人もたくさん来ていたわ。私が、課長に辞表をたたきつけるのが夢だといったことが公表されたら、どうしよう?〉

会社にいられなくなるだろうと心配になって来た。そうでなくとも、イヤ味な課長なのである。

翌日は、日曜日だった。

美佳は、朝からじっと待った。

〈万一ということがあるわ。それに、最初の発表では、十人には、しばらくつきあってから三人にしぼるといってたから、まさか、今日、三人がきまってしまう筈はないわ〉

しかし、いつまで待っても電話はかからなかった。

スーパーへ食べるものを買いに行こうと思ったが、その間にかかったらと考えて、美佳は、朝から何も食べていなかった。

やっと、五時になったとき、電話のベルが鳴った。

とびついて出てみると、それは、涼子だった。その声ははずんでいた。

「どうでした? 私は、昼頃、電話があったわ。社長宅へ明日来るようにって」

「えっ、本当? 私には、かかって来なかったわ」

美佳は、沈んだ声でいった。

「あら、そう。ごめんなさい。じゃあまた」

電話を切ると、また、かかって来た。

〈ナオミかしら? 彼女も合格したんだわ〉

4

力なく立ち上って受話器をとると、思いがけずそれは、沖自身だった。

「沖邦彦です。昨日はどうも」

といわれ、美佳は、すっかり上ってしまった。

「はい。美佳です」

「今、電話したけど、話し中だったね？」
「はい、昨日一緒だった深尾涼子という人が、自分は受かったといって電話がかかって来たんです」
「深尾涼子さん……ね」
沖は、手帳かなにか見ているようだったが、
「それで、よかったら、明日、うちに来て頂けませんか？　お食事でもしたいと思いますが」
と、いった。
「はい。よろこんで。でもみんな一緒ですか？」
「みんな？　ああ、そうです。六人の方におねがいしました。四人の方には、速達でおことわりの手紙を出しましたが」
美佳は、場所と時間をきいたあと、まだ、彼と喋っていたくて、つい、
「あの……社長さんには、三人恋人がいらっしゃるって本当ですか？　昨日、みんながいってましたけど」
と、きいてしまった。
「えっ、恋人がですか？　いませんよ。変なうわさが立つんですね」
沖は、軽くいうと、「では」と、電話を切った。
〈気分を害したみたいだわ。どうして、変なことをいってしまったのかしら？〉
美佳は、電話のそばに、座り込んでしまった。
しかし、すぐに、気をとり直した。
〈とにかく、明日行ってみよう。あんな豪邸に招待されるだけでも、素晴らしいことだわ〉
と、思った。
しかし、やっと解放されて近所の喫茶店へ行ってピラフを注文したあと、また、気になって来た。
〈あの涼子さんは、昼頃電話がかかって来たというのに、私は、夕方の五時だったわ。私は、補欠のようなものかもしれない〉
招待されたのは、翌日の三時からだったので、美佳は、会社を休んで、出かける準備をした。
髪をセットし、着物を着て、手土産には、銀のス

プーンセットを買って持って行った。
お花はみんな持って行くだろうし、すぐに枯れてしまう。銀のスプーンだったら、自分が選ばれなくても、彼にずっと使って貰えるだろうと思ったのだった。
行ってみると、花を持って来た人が二人いた。一人は手づくりの造花である。
一人は、キャビアを、一人は、ブランドのネクタイを持って来た。
キャビアを持って来たのは、落合しのぶという女性だった。
涼子は、白い胡蝶蘭ばかり十本持ってきて、すぐに、ワインレッドの花瓶にいけたが、素晴らしく華やかで部屋によくマッチした。
邸は、テレビで見たのとはまた別で、二千坪の敷地に、四百坪の建坪だという豪邸だった。
外国映画に出てくるような大理石の玄関ホール、シャンデリア、螺旋階段、そして、大きな壺や、彫刻がおかれ、天井の高い応接間には、イタリー製らしいソファや家具がおかれ、美佳は、外国にいるような錯覚を覚えた。
やがて、食堂に通され、食事になった。彼の兄も、秘書も同席している。使用人は全部男性だった。女性を使うと、色々、うわさされたり、トラブルがおこると困るからだと、彼が何かに書いていたのを、美佳は思い出した。
一流ホテルのようなフランス料理が出て、みんなは食事をはじめた。
沖は、にこやかな顔で食事をしながら、それとなく、みんなを見ている。
〈食事のマナーに気をつけなければ。彼は、そういうのを見てるんだわ〉
食事のあとは、みんなで雑談になった。それぞれが、少しでも、自分を印象づけよう、気に入られようとして、火花が散った。
しかし、美佳は、あとの五人が、それぞれ美し

く、才気があるのに次第に圧倒されていった。
〈どうせ、この中に、彼の愛人がいるんだわ。争っても仕方がないわ〉
そう思うと、急に、気分が楽になってきた。それで、そのあとは、ただ、きく方にまわり、沖邦彦と、五人の女性の観察をすることにした。
六人の中に、ナオミの姿はなかった。
美佳と、涼子の他は、
ユミ
鮎子（あゆこ）
しのぶ
加代子
の四人だった。
〈この中で、三人の愛人は、一体、誰なのかしら？〉
話が一しきりはずんで、疲れると、沖が、ユミに話しかけた。
「確かピアノが得意ということでしたね。一曲ひいてくれませんか？」
ユミは、うれしそうに立ち上り、
「なにがいいでしょうか？」
と、いった。
「何でもいい。僕は、クラシックが好きだけど」
「わかりました」
ユミは、ショパンのワルツをひきはじめた。他の四人は、うっとりとしてききいっているように見えたが、眼はねたましさで、きらきら光っていた。
美佳も中学校のとき、少しだけピアノをならったことがあるので、ユミのピアノが上手なのがわかり、とてもかなわないと、ぼんやりしていた。

5

ユミが終ると、次は、涼子が、日本舞踊を踊った。名取りだということで、その踊りは、優雅だった。

〈公平に見たら、彼女が三人に残って当然だわ。美しいし、やさしくて華やかで〉

美佳は、そう思って、眺め、彼女が踊り終ると、心から、拍手を送った。

しかし、同時に、やはり、羨やましさ、ねたましさを覚えたのも事実だった。

そのあと、ダンス音楽をかけて、一人ずつ、沖と踊ることになった。

美佳は、胸がどきどきしてきた。彼女は、ディスコダンスなら自信があったが、社交ダンスは、あまり踊れない。

とび抜けて上手だったのは、鮎子だった。彼女は、洋服だったし、まるでダンスのエキジビションのように、沖と華麗に踊った。

〈わかったわ。彼の愛人というのは、涼子と、ユミと、鮎子なんだわ。彼は、その三人を最後に残したくて、今日みんなを食事に呼んだのだわ。誰が見ても、三人が残るのが適任だと納得するように〉

そういえば、涼子が、白い胡蝶蘭を持って来ていたのも、彼の好みや花瓶の色を知っていたのかもしれないと思えて来た。

五人が沖と踊ったあと、美佳の番になった。美佳は、ただ、軀をかたくして、足を踏まないように一生懸命気をつかっていた。

沖がやさしく話しかけてきた。

「君は、何が得意なの？」

「私は、何も出来ません。申しわけありません」

美佳は、消え入るようにいった。普通のサラリーマンの妻になったら、家計をうまくやりくったり、料理を作ったりすることは出来そうだが、彼には、そんなことは必要ではない。ここへ来て、改めて、自分が、場ちがいなところへ来たことがわかったところだった。

「でも君は可愛いし、頭もいい」

沖は、なぐさめるようにいった。

その途端に、とうとう美佳は、彼の足を踏んづけ

てしまった。
「ごめんなさい」
美佳は、どうしていいかわからず、その場に立ちすくんでしまった。
「いいよ。さあ、みんな見てるよ。踊ろう」
沖は、美佳をはげまして、踊りを続けた。
席にかえると、みんなは、笑いをかみ殺していた。しかし、美佳に対して、ライバル意識はなくなったらしく、やさしくなった。
その日の帰りぎわ、沖は、六人にプレゼントをしてくれた。
一人一人箱の上に名前が書いてあることを見ると、中の品物が違うようだった。
帰り道、美佳は、しのぶと同じ方向だったので、同じ車で帰った。
しのぶは、沈み込んでいた。
「私たちは、失格したみたいね。残るのは、涼子、ユミ、鮎子の三人だと思うわ」
それは、美佳の考えと一致した。
「でも、楽しかったわ。いい思い出にして、会社づとめをするより仕方がないわ」
美佳は、自分にいいきかせるようにいった。
「あなた、何貰ったの？」
しばらく沈黙したあとで、しのぶがいった。
「さあ、家に帰ってあけてみようと思っているの」
「今、あけてみない？　私もあけるわ」
そういうとしのぶは、包み紙をあけた。
中から、美しいダイヤの指輪と、金のブレスレットが出て来た。
「わあ、すごいわ」
美佳は、そういうと、自分の包みをあけた。出て来たのは、金のブレスレットだけだった。
その時、しのぶの顔色が変った。
「ねえ。確か、十人に残った人には、ダイヤの指輪を渡すといったでしょう？　私は、アウトになったのかしら？」

そういわれれば、そんな気もした。しかし、それなら、一応、全員にダイヤの指輪が渡されるだろうという気がした。

ブレスレットも、デザインが違っていて、しのぶの方が、やや、高価にみえた。

「そんなことないと思うわ。今日の贈り物が、私たちに対する評価のような気がするわ」

「そうかしら？」

しのぶは、じっと、二つのブレスレットをみつめた。

結局、どういう意味なのかわからぬままに、二人は、別れて家に帰った。

6

玄関を入ると、電話のベルが鳴っていた。あわてて出てみると、それはナオミだった。彼女が失格して今日出席してなかったことを思うと、何といっていいかわからなかった。彼女は、勢い込んで、詰問するように、

「あなた、今日どこへ行ってたの？　何度かけてもお留守だったわ」

と、いった。

「はい。あの……社長さんのところへ」

美佳が小さい声でいうと、ナオミが、黙り込んだ。しばらくたって、

「そうなの。あなたは選ばれたのね。あの涼子さんは？」

と、きいた。

「彼女も来てたわ」

「やっぱり……で、どんな様子だったのォ？」

美佳は、仕方なく、今日の様子を話し、でも私は、失格したらしいと、プレゼントの話をした。

「それは、違うと思うわ。失格したのは、しのぶという女性の方だわ。あなたは残ったのよ。帰り道に、きっと、プレゼントの話が出ると思って、負け

た人がみじめにならないように、そういう配慮をしたんだわ。そういう心づかいをする人なのよ、彼は」

「彼はって、あなたあの人知ってるんですか？」

美佳は驚いてきいた。

「ええ。今だからいうけど、私、あの人とつき合ってたことがあるわ」

「えっ、本当ですか……。だから、色々知ってたんですね」

「そうよ。でも、彼は、はじめから遊びだといってたし、三ヵ月で関係は切れたわ。私も、はじめは遊びでいいといってたけど、そのうち彼を愛していることに気がついたの。だから、今度、彼が花嫁を募集しているのに気がついて、応募せずにはいられなかったの。彼はやさしい人だわ。三ヵ月のつき合いだったけど、充分なことをしてくれたし、今度も十人には残してくれたわ。でも、その次には残してくれなかったわ。そこまでやると、私も本気で期待するようになるし、ほかの人たちに何を云い出すかわからないからだわ」

「そうだったんですか……」

美佳は、考え込んだ。そして、

「あの時、三人の愛人がいるっていったでしょう？その三人は、誰なんですか？　あとに残った五人の名前をいいますわ」

美佳は、鮎子、ユミ、涼子、しのぶ、加代子の名前をいった。

「わからないわ。でも、今回失格したしのぶさんじゃないわ。あなたをのけると、鮎子、ユミ、涼子、加代子の四人ね。その中に、彼の愛人がいるはずよ」

「本当かしら？　彼は、あなたと同じように、愛人も、途中で失格させたんじゃない？　この際に」

美佳は、四人の中に三人も愛人がいるというのが信じられなかった。

「絶対本当よ。私、彼の女秘書で、やっぱり、彼と

特別の関係にあった人と仲良くしてるの。その人が、社長が、彼女たちに電話してるのを立ちぎきしたといってたもの」

「そうですか。私のカンでは、涼子さん、ユミさん、鮎子さんの三人だと思うのですけど」

美佳は、自分の推理を話した。

「そうね。今考えると、涼子さんは、三人の一人だったのね。私、知らないから、あの時、つまらない話しちゃって、彼女の口から、社長にきこえて、私、落とされたのかもしれない」

ナオミは、口惜しそうにいった。

「もし、最初からきまっていたのなら、本当に馬鹿みたいだわ。でも、いいの。私、ここまで残れて幸せだったわ」

美佳がいうと、ナオミは、「ちょっと待って」といった。

「でも、あなたは、三人に残ったのだわ。すると、愛人の三人のうち一人は、落したことになるわ。最後に三人になって、誰を選ぶかでもめないように、私みたいに、少しずつふり落して行ったのかもしれないわ」

「涼子さんは、何をプレゼントされたのかしら？」

美佳は、急に気になって来た。

「きいてみたら？　あなたと同じブレスレットだけだったら、のぞみがあるわ」

ナオミは、せき込んでいった。

「でも、私、何をプレゼントされたかってきけないわ。はしたなくて。それに、みじめになるのも嫌だし……」

美佳は、涼子が、社長の愛人の一人なら、自分がきいたことが、筒抜けになるのが嫌だった。

〈やっぱり、社長のことが気になるんだわ。私、あきらめたようなことをいいながら、心の底では、三人に残るのを秘かに待っているのかしら？〉

美佳が黙っていると、ナオミが、

「私がきいてみるわ」

と、いって電話を切った。

7

ナオミが何といって涼子にきくのか心配だったが、やはり、涼子が、何をプレゼントされたかは気になった。

しばらくして、ナオミから電話がかかって来た。

「わかったわ。彼女は、やっぱり、あなたと同じで、金のペンダントだけだって。それから、帰りの車が同じだったので、加代子という人と見せ合ったけど、加代子さんは、ダイヤの指輪とペンダントだったらしいわよ。バッチリね。あなたと、涼子さんは、残ったのだわ。まさか、あなた、彼の愛人の一人だったんじゃないでしょうね？」

ナオミは、激しくいった。

「違うわ。私は、社長さんと会ったのは、今回がはじめてですわ。嘘だと思ったら、その秘書の人にきいてみて下さい」

「わかったわ。じゃあね」

電話は切れた。

美佳は、考え込んだ。

同じブレスレットなら、どっちになっても、涼子と同じだが、ペンダントというのが気にかかる。あんまり同じではと、ブレスレットをペンダントにしただけだろうか？

こうなると、残りの二人も何をプレゼントされたのか知りたくなった。

鮎子とユミ、この二人は、どちらも本命のような気がしたが、すると、どうしても、自分がはみ出したようで、落着けない。

翌日は、早くから勤めに出た。

会社では、美佳のことが、すでにマスコミによって知れ渡っていた。

「最後の十人に残ったって素敵ね」

という同僚もいれば、今までと違ったまぶしそう

な目で見る男性社員もいた。
会社へ女性週刊誌の記者や、レポーターがやって来て、写真をとらせて欲しいといったり、その日は、仕事にならなかった。
美佳は、自分の考えが甘かったと思った。
こういうことになれば、職場の男性も、二千人のうち、最後の何人に残るほどの美人だったのかと気がついてくれるだろうし、マスコミでさわがれれば、会社以外の人も注目して、結婚の申し込みがあるだろうと思ったのに、むしろマイナスだったのだ。
男性社員は、美佳が、そんな大金持しか眼中にないのだと知って、興ざめた顔をしているし、女性社員は、やっかみで、みんなきびしい顔をしていた。
普段好意的な部長でさえ、会社にはマスコミのものを来させないようにと、秘書を通じて云ってこさせたりした。
〈これで、最後まで残れなかったら、みんなの笑いものになる〉
美佳は、唇をかみしめた。
帰り道にも、マスコミは待っていた。
ただ一つ、よかったのは、他の二人が、何をプレゼントされたかを知ることが出来たことだった。
「ユミさんは、ブレスレットとペンダント。鮎子さんは、ダイヤの指輪とブレスレットとペンダントをプレゼントされたらしいですよ。あなたはどうでした？」
女性週刊誌の記者が、しつこくきいた。
「私は、ブレスレットだけです。でも、男性から頂いたはじめてのプレゼントですから、大切にします」
と、美佳はいった。
小さなプレゼントはいくつかもらったが、こうした形になるものは、はじめてだという意味だった。
「どんなブレスレットですか？」
ときかれ、美佳は、右手首を見せた。

記者の何人かは、美佳がブレスレットだけだといった瞬間に、興味を失ったような顔をして、去って行った。

8

それから約十日で、美佳の運命は、刻々と変っていった。

十日の間に、二回ほど彼に呼び出されてドライブしたり、食事に行ったりしたあと、四人に残ることが出来たのだ。

あとの三人は、涼子とユミと鮎子だった。

ユミは女子大生で、家庭は、大学教授の父親と、母親、そして銀行へつとめる兄の四人ぐらしで、どこへ出してもはずかしくないファミリーである。

普通のサラリーマンの娘である美佳とは、大きな違いだった。

涼子は、京都祇園の舞妓をしていた女性で、その頃から、沖とは、顔見知りだったという。しかし、もともとは、東京の料亭の娘で、今は実家を手伝っているという。

鮎子は、ミス・花の女王に選ばれたことがある新人女優で、将来が有望視されているということだった。

結局、失格したのは、加代子としのぶだった。

ある日、沖は、四人を、自分の別荘に呼び、話をした。

「選考の結果、あなたたち四人の方に残って貰うことにしました。どの人と結婚してもいいと思う最高の女性です。本当は、三人にするはずでしたが、迷った末、しぼり切れずに四人になりました。選考前に、私には愛人がいて、その人たちが最後に残るのだといったうわさもあったようですが、これで、そうでないことがわかったでしょう？」

彼は、特に、美佳の顔を見たようだったので、美佳は、大きくうなずいた。

しかし、内心では、自分以外の三人は、前から知っている女性で、自分だけが、うわさを打ち消すために、つけ加えられたのではないかと、まだ、ひがんでいた。

「そこで、いよいよ、本すじに入りますが、この四人の方に、私と一緒に京都に旅行して頂きたいと思うんですが、いかがでしょうか？　今までお会いして、大体の性格や感じはわかりましたが、やはり、もう少し長い時間、一緒にいてきめたいと思うのです。出来れば、お一人ずつと旅行するか、家に一週間ほど来て生活していただければいいのですが、そうすると、お断りするときに申しわけないので、みんな一緒にと思います。私も、結婚は一生のことなので、慎重に考えたいと思うのです。参加していただけますか？」

沖は、みんなを見まわした。

まず、鮎子が承知した。

「いいですわ、私は」

次に、涼子がいった。

「私も、よろこんで」

ユミは考えてから、

「家族に相談してからでいいでしょうか？　私が最後に残ったのなら、父母が何といっても行きますけど……」

と、いった。

沖は、うなずいた。さて、美佳の番だった。美佳には、会社がある。一週間近くも旅行のために休みがとれるかどうか心配だった。

「申しわけありません。私も行きたいと思いますが、会社づとめをしているので、なんとか休ませて貰えるように、交渉してきます」

沖は、今度は、すぐにはうなずかなかった。

「もし、会社が駄目だといったら？」

「仕方がありません。棄権します」

美佳は、眼に涙をためていった。

会社をやめる覚悟で行って選ばれなかったら、よ

けい自分がみじめになる。それに、やっと就職した一流企業をやめて家で遊んでいることは美佳の家庭では出来ないことだった。

しばらく黙っていた彼は、顔をあげると、秘書の方を見た。

秘書が、日程表と、百万円入った封筒を一人ずつに配った。

「旅行の小遣いにして下さい」

美佳は、百万円を受けとることが出来ないと思った。

「あの、私は、棄権するかも知れないので……」

「その場合は、ここまでということで、受け取って頂いていいのです」

沖は、封筒を押し返した。

9

一週間後、四人の女性は、東京駅に集合した。

旅行について来たのは、沖と、秘書と、沖の兄の太郎の三人だった。

旅行のことは、極秘にしたのに、やはり、マスコミ関係者がかぎつけて、一緒に新幹線に乗り込んできた。

美佳は、結局、強引に会社を休んで来た。課長が、

「君、選ばれるかどうかわからないのに、どうして行くんだ？　会社より男の方が大事なのか」

と、詰め寄ったが、きかなかった。折角、ここまで来たのだから、このチャンスにかけてみたいと思うようになったからだった。

新幹線では、美佳とユミ、涼子と鮎子が並んで座り、通路をへだてた席に、邦彦と兄、そのうしろに、秘書が座った。

すぐに、女たちは、背もたれをひっくり返して四人が向き合いになった。

しかし、お互いに、ライバルなので、なかなか、

話がはずまなかった。
涼子は、着物で、あとの三人は、洋服だった。
名古屋に近くなったとき、鮎子が、
「ねえ、社長は、旅行中に、私たち、一人一人に、躯を求めてくるのかしら？」
と、小声でいった。
「当然でしょうね。百万円も貰ったのだし」
といったのは、涼子である。
「私は困るわ」
と、いったのは、ユミである。
「だって、結婚してくれないのに、もてあそばれるのは嫌だわ」
「でも、そういう点での相性だってあるからこそ、旅行に誘ったんだと思うわ」
鮎子は、沖の方をちらっとみながらいった。
「美佳さんはどうする？」
涼子がきいた。
「私は、まだ、決心がつかないわ。でもそんなとき断ったら、失格になることはわかっているわ」
美佳は、うつむいて答えた。
美佳も、そのことが一番気になっていた。
まだ、一度も経験がなく、お金だけでなら、百万貰っても嫌だった。
しかし、今回は、結婚がかかっているし、彼を好きになっていたから、彼と一夜を過したいという気もある。それに、他の女性との競争に、どうしても勝ちたいという気持にもなっていた。
京都に着くと、一行は、三条河原町にある新京都ホテルにチェックインした。
秘書が、五階のツインの部屋を一人ずつにとってくれた。501、503、505、507である。
部屋は、はしが美佳、となりが涼子、鮎子、ユミの順だった。
「僕の部屋は、一階上の階の603号です。秘書の部屋は、607号、兄は、605号です。用事があるときは、電話して下さい」

一旦、自分の部屋に入ってから、みんなはロビーに集り、観光に出かけることになった。
あらかじめ手配されていたらしく、マイクロバスが来て、みんなを乗せた。
秘書が、全員に、ジュースを配り、なんとなく、修学旅行のようなムードになって来た。バスの中では、沖や、その兄もはじめて打ちとけて喋った。
美佳に最初話しかけて来たのは、兄の方だった。
「会社の方は休んで来たの？」
「はい」
「それは大変だったね。……京都ははじめて？」
「はい、はじめてです。修学旅行も北海道だったし、一度来て見たかったんです」
「君が一番素直で、無邪気だと弟がいっていたよ」
「そうですか。有難うございます。でも、私が、ここまで残れたの不思議なんです」
「僕が強力におしたからね」
太郎は、ちょっと恩にきせるようにいった。
「有難うございます」
美佳は、にっこり笑っていたが、内心ではイヤな人だと思った。やっぱり、弟に、コンプレックスを感じているのだろうか。
そういえば、彼は、弟と仲が悪いということを、週刊誌が報じていた。彼は、一体、どういうつもりで、この旅行について来ているのだろうと、美佳は思った。
バスは、西へ西へと走って嵯峨野についた。嵐山で、保津川の流れを見ていると、邦彦がそばにやって来た。
「夏は、川下りの船が出るし、春と秋には竜の頭をつけた船に、平安時代の衣裳を着けた男女が乗り込んで、扇を流したり、それはきれいですよ」
と、彼は、説明してくれた。
そのあと、すぐ近くの天竜寺に行き、夢窓国師の庭園を見たあと、いよいよ、竹林の続く道を、野々宮神社、大河内山荘とまわった。彼は、一人ずつ自

分のカメラで写したり、自分と女性一人を入れて、秘書に写真をとらせたりした。

彼が、一番たくさん写真をとったのは、涼子だった。

誰の目にも、彼女が本命にみえた。

10

向井去来で有名な落柿舎で、美佳は、柿の形の土鈴と絵はがきを土産に買った。

二尊院、常寂光寺にまわり、最後は、祇王寺に寄って帰ると、説明があった。

常寂光寺の境内を歩いているとき、ユミがそばに来た。

「つまらないわ。ほら、もうきまったようなものだから」

ユミは、一番前を歩いて行く二人を指した。それは、沖邦彦と涼子だった。そのあとを、鮎子と、沖太郎が何か話しながら歩いている。

「私たちは、付録なのね。鮎子さんは、兄さんの方に的をしぼったみたいだし……」

「兄さんには、奥さんがいるでしょう?」

美佳は驚いていった。

「学生結婚した人で離婚寸前だって、さっき本人からきいたわ。だから、彼もこうしてついて来てるんだわ。弟が選んだ以外の女性で、自分の気に入った人がいたら、声をかけるつもりなのよ」

「そう、知らなかったわ」

宝くじを買った人は、一等に当籤しなくても、せめて、前後賞でも当たればと思うだろう。兄の方から声をかけられれば、応じる人がいても当然だと美佳は思った。

〈でも、私は、兄さんの方は嫌いだわ。あの人に申し込まれても拒否するわ〉

祇王寺は、平清盛の愛が、仏御前に移ったのをなげいて尼になった祇王と祇女をまつった寺である。

まん中に、清盛の像もある。
「恋の寺というと、何となく、胸がどきどきするわ」
鮎子が、そばへ来ていった。
帰り道、みんなは、今日一日、寺をまわって引いたおみくじを見せ合った。
美佳は、一度しか引かず、それは、中吉だった。
「私、二回も凶が出たのよ。あんなの迷信やと思ってもイヤな気分やわ」
涼子が、はじめて関西弁のアクセントでいった。京都に来ると、自然に京都弁になるようだった。
「僕も一度凶が出たよ。だから大丈夫だよ」
沖が、笑いながら、みんなに凶のおみくじをみせた。
「私は大吉。でも、大吉が出るまでひき続けて、外のは捨てたから当然だけど」
ユミが、大吉のおみくじをみんなに見せた。
「それはいいな。あとで、平安神宮へ行って、もう一度引き直そう」
沖が気を遣っていった。
「お兄さまは何でしたの？」
鮎子が黙っている太郎にいった。
「僕？　僕はひかなかったよ。気にする方だから」
彼は、そういうと、秘書に、平安神宮にまわるようにと、いった。
バスに乗ってから、ユミが、美佳のそばにやってきていった。
「お兄さんの方も、おみくじ引いていたのよ。黙って木に結びつけていたから、凶だったのじゃないかしら？」
「私、おみくじで、凶というのは、出ないものだと漠然と考えていたわ。こんなに出るなんて気味が悪い」
美佳は、なんとなく不吉な気分におそわれながらいった。
「あら、凶なんてたくさんあるのよ。だから、お宮

やお寺の木には一杯おみくじが結んであるでしょう？」

ユミは、平気な顔でいった。

いいところのお嬢さんで、カマトトぶってるけど、意外に、したたかなところのある女だと、美佳は思った。

平安神宮で、美佳は、外人から話しかけられた。

中年の夫婦で、夫人の方が京都でどこが拝観停止になっていないのかときいてきたのだ。

美佳は、英語だけは得意だったので、自分は東京から来たのでよくわからないがと、前おきして、持っていた地図に、○印と×印をつけ、○印のところは、大丈夫だが、×印の寺は、多分入れないと説明した。

夫婦は美佳が英語が出来るのを知って喜び、自分たちは、フランス人で、パリに住んでいることなどを話した。

美佳は、フランス語はあまり得意でない。しかし、そうきくと、下手ながらフランス語にきりかえて、学生時代、ヨーロッパ旅行をしたことを少しだけ話した。

いつのまにか、そばに、みんなが集ってきていた。

美佳は、それに気づくと、急に恥ずかしくなって黙り込んだ。夫妻は、なおも話してくる。すると、意外にも、沖が、流暢（りゅうちょう）なフランス語で、相手をしてくれ、やがて、夫婦は機嫌よく去って行った。

「すっごいわ」

と、鮎子が沖にいった。

沖はただ笑っていたが、そのあと、バスに乗ってから、急に、美佳に親しく話しかけて来た。

そのときになって、美佳は、はじめて、彼が、自分を最後まで候補に残してくれた理由がわかったような気がした。

涼子には、美しさと色っぽさを、ユミには、良家の子女というところを、美佳には、知性を求めたの

だ。

鮎子は？　鮎子は多分、現代的なナウい美人というところが気に入ったのだろう。

彼は、美佳に、自分は、フランスに何年かいたことがあるといい、ルーブル美術館の話や、郊外の古城の話をした。美佳は、絵が好きだったので、彼とは話があった。

その様子を、三人の女性が、ねたましそうな顔でみつめていた。

11

京都市内の料亭で京料理の食事をすましたあと、ホテルに戻ると、あとは、自由時間だった。

美佳は、自分に割りあてられた部屋で、ぼんやりしていた。

〈一体、彼は、この中で、誰を選ぶのだろう？　夜になると、みんなが彼の来るのを待ち、選ばれるのを待っているなんて、まるで、ハーレムか、愛人みたいだわ〉

しかし、時間がたつにつれて、不安になってきた。みんなは、一体、何をしているのだろう？　沖は、誰と一緒にいるのかと、イライラしてくる。

テレビをつけても、いつものように、その中に入り込むことが出来なかった。

それは、他の女性も同じとみえて、ユミから電話がかかってきた。

「もしもし、ユミです。今、いい？　誰かそばにいるようだったら切るわ」

彼女は、遠慮がちにいった。

「いいえ、誰も。退屈してたの。みんなどうしてるのかしら？」

「今、鮎子さんの部屋に電話したけど、出なかったわ。それから、涼子さんのところも」

「どこかに出かけたのかしら？　それだったら、誘ってくれればよかったのに」

美佳がいうと、ユミは、フフと笑った。
「社長とお兄さんのところに、それぞれ行ってるんじゃない？　秘書の人は、社長から許しが出たといって、さっき喜んで外へ遊びに行ったわ。ねえ、社長のところに電話してみようか？」
「えっ、まずいんじゃない」
「面白いわ。今から、そっちの部屋へいっていい？」
「いいけど」
やがて、ユミがやって来た。
「社長のところへ電話してみるわ」
「私はできないわ」
それでもかまわず、ユミは、館内電話をかけた。すぐに、応答があった。
「あの……、ユミです。社長さんは何をしてらっしゃるんですか？」
美佳は、そばへ行って耳をすませた。
「今、テレビを見ていたところだけど」
「涼子さんと鮎子さんがいないんですけど、どこへ行ったか知りませんか？」
「さあ、知らないね」
「今、美佳さんの部屋にいるんです。代ります」
突然受話器を渡され、美佳は困ってしまった。
「あの、美佳です」
「ああ、どうも」
「では、失礼します」
美佳は、電話を切ってしまった。
「何よ。もっと話せばいいのに」
ユミは、がっかりしたようにいった。
ルームサービスで紅茶をとって飲んだあと、ユミは、自分の部屋に帰っていった。
ねむれそうもなかったが、ベッドに入ってテレビを見ているうちに、うとうとしたらしい。
突然の電話で、美佳は、目を覚ました。

12

「あの僕だけど、ドアをあけておいてくれない？」
それは、沖だった。
「えっ、でも……」
美佳が困惑しているうちに、電話は切れた。それでもあわてて化粧をし、服に着がえて、ドアをあけ、ベッドをととのえているところへ、人が入って来た。
それは、兄の太郎だった。
「あっ、どうして？」
美佳の顔色が変った。
「アハハ、弟が来ると思った？　僕だよ電話かけたのは」
「イヤです。帰って下さい。お願いします」
美佳は、必死で、彼を押し戻した。
「いいじゃないか。どうせ、弟の彼女はきまってるんだから。君は、選ばれてないんだよ」
「でも、イヤです。やめてください」
押し問答をしているところへ誰かがとび込んでくるなり、シャッターを切る音がした。
鮎子だった。
「何やってるのぅ、いやらしいわ」
鮎子は、続けてシャッターを押すと、激しい声で叫んだ。
「社長に見せに行ってくるわ」
彼女はそういうなり、駈け出して行った。
彼が手を離したすきに、美佳は、そばにあった雨傘で、彼を叩き、とうとう外に追い出した。
「馬鹿だなあ。これで、もうあんたは失格だよ」
彼は、捨てゼリフを残して立ち去った。
興奮からさめてみると、大変なことになってしまったということがわかった。
鮎子が今の写真を社長にみせ、兄の太郎が、美佳の悪口をいえば、男なら誰だってイヤになるにき

まっていた。

〈そうだわ。これは彼の兄さんと鮎子さんが組んだ罠かもしれないわ。鮎子さんは、どうしても、社長一家に入り込みたがっていた。社長が駄目なら、兄の夫人か愛人にでもと思って、それで、候補の女性を、一人ずつ失格させて行くことをたくらんだんだわ〉

美佳は、ため息をついた。

来がけの新幹線の中でも、秘書が、何度も、東京へ電話をかけて、社長の母親の容態をきいていたが、ガンの末期症状で、あと二週間位しか持たないという話だった。

唯一の身内である太郎としては、ここで、弟の花嫁がきまるのを、一生懸命阻止しようとしているのだろう。

〈社長の兄さんは、涼子のところにも行くのではないだろうか？〉

一番有望なのは、彼女である。

彼女の場合は、無理に犯してでも、失格させてしまうのではないかと気になった。

〈明日になったら、東京へ帰ろう。やっぱり、身分不相応なことを望んだのが間違いだったのだわ〉

彼女が今勤めているのは、一流の貿易会社である。そこをやめるようなことになるかもしれないが、その時は、英語の家庭教師でもして時間をかせぎ、その間に、通訳の国家試験を受けようと思った。

やっと、そうきめてねむりについた美佳はドアをノックする音で、眼をさました。

〈誰だろう？　また、あの男が来たのだろうか？〉

美佳は、ガウンを羽織り、そっと、ドアのところへ行って、カギ穴から、外をのぞいた。

「あっ」

美佳は、驚いてドアをあけた。それは、沖だった。

〈失格したことをいい渡しに来たのかしら？〉

しかし、彼は中に入ると、ソファに座り、何事もなかったように、黙って煙草を吸った。
「私、明日帰ります」
美佳は、耐え切れなくなっていった。
「どうして？」
「でも、社長のお兄さまが強引に入って来られて……」
美佳は、一生懸命説明した。たとえ信じてくれなくても、一応釈明はしておきたかった。
沖はきき終ると、
「それで、結局何もなかったの？」
といった。
「あたり前ですわ。でも、お兄さまを傘で叩き出した以上は、その方の弟さんのお嫁さんになるわけにはいかないでしょう？　ですから帰ります」
「まあ、待ちなさい。それだけ僕のために身を守ってくれたことは、うれしいと思う。帰る必要はないよ」
「本当ですか？　わかって下さったんですか」
美佳は、うれしくて涙が出てきた。
その美佳を、彼がしっかり抱きしめ、不意にキスをした。
「君が好きだ」
彼は、そういって、美佳を抱きあげ、ベッドへ運んだ。
美佳が、あわてて起き上ろうとすると、沖は、
「大丈夫だ。何もしない。寝ころがって話そう」
といった。
彼は、靴をぬいでベッドに入り、毛布をかけると、天井をむいて話しはじめた。
「君は、僕に愛人がいるかときいただろう？」
「ええ」
「それは本当だ。涼子と、鮎子と、加代子の三人は、僕と、知り合って、深い関係があった。正直に話そう。しかし、遊びだとはじめからいっておいた。ところが、今度、こういう話がおこった時、三

人は、どうしても結婚したいといい出したんだ。僕は、真剣に、はじめて会う人の中から結婚相手を探したかったが、彼女たちはきかない。少くとも、最後の三人に選んでくれなければ、自分とのことをマスコミの人に話すというんだ。仕方なく、僕は、承知した。しかし、最後に、君たちより好きな女性がみつかったら、その時は、相当のことをするからあきらめて欲しいといった。彼女たちは、承知した。最後の六人になったとき、もう一度三人に、一千万円で、おりてくれないかとたのんだ。今なら一千万出すが、最後まで残って落ちた場合は、一円も払わないといった。それぞれには今までに、マンションを買ったり、相当のことをしているからね。そこで、加代子は、おりた。三人の中では、彼女は、一番利口な女だった。しかし、二人は、どうしてもおりないという。そこで、最後を四人にしぼったんだ。僕は、最初から君とユミさんがいいと思っていた。それは、今もかわらない。あとの二人には、時間をかけて説得するつもりだ。……こういうことをきいても、まだ、僕と結婚したいと思う？」

彼の声は静かだった。美佳は、彼が、何もかも打ちあけてくれたのがうれしかった。

それで、大きくうなずいた。

彼は、しっかりと美佳を抱きしめ、キスをした。

彼の手が、ネグリジェにかかり、あっという間に、それがはぎとられた。

13

彼は、美佳の胸に顔をうずめ、喉や、乳房に口づけをし、手を下半身に這わせた。

「可愛いね。きれいだ」

彼は、かすれた声でいった。そして、美佳を抱きしめて、首のうしろや、背すじにも、キスの雨をふらせた。

「ああっ」

美佳は、はじめての経験に軀をこわばらせながら、それでも期待に胸をおどらせていた。

彼は巧みに、美佳の下着をはぎとり、自分も素早くすべてを脱ぎすてて、美佳の軀に抱きついてきた。

〈もう、どうなってもいい。悔いはないわ〉

目をつぶったまま、美佳は心の中で呟いた。彼の指が、しなやかに、美佳の一番敏感なところを這う。

自分でも何かわからない快い感情に包まれ、美佳の軀は、小きざみにふるえ出した。足の先から頭から、すべての血が下半身の一点をめがけておし寄せてくるのがわかる。

「あー」

美佳が、思わず声を出した。

それをきくと、突然、彼が、美佳を押し開いてのしかかって来た。反射的に、彼を押しのけようと、美佳は、腕を突っぱった。

びっくりしたように、彼は、一旦、中止したが、そのあと、狂暴ともいえる勢いで、押しいって来た。

「いやっ、やめて」

美佳は、夢中で叫び、ベッドの上へ上へと尺とり虫のように、上っていった。彼が、手をかけてひき戻し、美佳が逃げ、その繰りかえしが何回か続いたあと、遂に彼が目的を達した。美佳が、

「ぎゃっ！」

というような声をあげて、のけぞり、彼がその上におしかぶさったまま、静かになった。やっとベッドから軀をおこした彼は、シーツを見て感動したようにいった。

「君、はじめてだったんだね」

沖は、強く美佳を抱きしめた。

そして、飲み物をとって飲み、美佳にも、のませてくれ、朝まで抱いて眠ってくれた。

二人がおきたのは、明方の五時だった。

彼は、シャワーを浴び、やさしくキスをしてから部屋に戻って行った。
美佳は、しばらく目を覚ましていたが、いつの間にかまた眠ってしまった。
遠くの方で、ベルが鳴っているような気がして目が覚めると、それは、電話だった。
「もしもし」
美佳は、まだ、ぼんやりとした声でいった。
「早くおきて！　涼子さんが死んだのよ」
ユミの声に、美佳は、すっかり目が覚めてしまった。
「えっ、誰が死んだの？」
「涼子さん。すぐおきて」
美佳は、あわてて水で顔を洗い、服をかぶって、ドアからとび出した。
涼子の部屋には、すでに、全員が集っていた。
ベッドで、涼子が身動きもせず横たわっていた。
「心配したわ。いくらドアを叩いても起きないので、あなたも死んじゃったのかと思ったワ」
ユミがそばへ来ていった。
「一体どうしたの？」
美佳は、わけがわからずいった。
「涼子さんは、朝の七時半にモーニングコールをたのんでいたんだって。でも、いくら電話をかけても起きないので、八時になって、ルーム係が、念のために、鍵であけてみたら死んでいたというの」
「どうやって死んだの？」
「胸を刺して死んだらしいわ。毛布がかけてあるからわからないけど、すごい血だったって」
ユミが恐ろしそうにいった。
その時、入口から、ばらばらと、刑事たちが、とび込んで来た。
美佳たちは、すぐに、部屋から追い出され、一階上の沖の秘書の部屋に集められた。
「涼子さんは自殺したんですか？」
ユミが、沖にきいた。

「さあ、わからない。部屋が閉っていてカギはテーブルの上にあったというから、そうかもしれないし、誰かに殺されたのかも知れない」
沖は、ちらっと、兄と鮎子の方を見た。
そこへ、京都府警の狩矢という警部がやって来て、みんなに話をきいた。

14

「死亡推定時刻は、夜中の三時前後です。誰か、彼女が死ぬ理由について心あたりはありませんか？」
狩矢は、みんなの顔を見まわした。
「自殺なんてしないと思います。だって、涼子さんは、社長さんに気に入られていて、多分、花嫁に選ばれるだろうとみんな思っていたんですもの」
ユミがいった。そして、みんなの旅行のことを話した。
「すると、それをねたんだ誰かに殺されたということですか？」
狩矢は、急に興味を持ったようにいった。
「私は、自殺だと思うわ。だって、社長さんが、涼子さんを選ばないことがわかったからだと思うわ」
鮎子が、静かにいった。
「それは、本当ですか？」
狩矢にみつめられて邦彦は、
「それは、まだはっきりきめていませんし、彼女にもいっていませんでした。でも、彼女は、本能的に、悟ったのかもしれません」
と、答えた。
「この際ですから、はっきりいってくれませんか？あなたは、結局、誰をえらぶつもりだったんですか？」
狩矢につめ寄られて、考え込んでいた沖は、
「今の時点で私の順位は、一位が美佳くん、二位がユミさんでした。鮎子は、兄と仲が良かったようだし……」

と、きっぱりいった。
美佳は、うれしくて、涙がこぼれそうだった。
鮎子は、唇をかんでいる。ユミも口惜しそうに、
「信じられないわ。私は、涼子さんだとばかり思っていたのに。この人に負けるなんて……」
と、美佳をにらみつけた。
「随分、みなさんの心は、複雑なようですね。これはやっぱり殺人かもしれないな」
狩矢は、呟くようにいった。
「しかし、ドアは閉っていたわけでしょう？　オート錠でも、セミオート錠でもないのに、誰かが殺したとしても、ドアを閉めることは出来ないんじゃないですか？」
兄の太郎がいった。
「密室殺人というのもありますからね」
狩矢は、軽くいうと、昨夜、それぞれが、どうしていたかをきいた。
「私は、自分の部屋で寝てました。もちろん一人です」
ユミが、一番先に答えた。
「私は、太郎さんと一緒でした」
と、鮎子が答え、太郎がうなずいた。
「僕は、……寝ていました」
沖が、いった。美佳も、あわてていった。
「私もです」
「嘘だわ。私が、三時ごろ社長の部屋に電話したとき、社長さんはいませんでした」
と、鮎子がいい、ユミも、うなずいた。
「私も、電話しました。二時頃。でも、お出になりませんでしたワ。私は、涼子さんの部屋に行かれたのだと思いました」
「どこに行っていたんですか？」
狩矢が、沖に迫った。
「私と一緒でした。一時から五時まで」
耐えきれなくなって、美佳がいった。
「本当ですか？　沖さん」

「はい」
邦彦は、はっきりとうなずいた。
「まあ、いいでしょう。まだ、殺人ときまったわけじゃないし……」
狩矢はしばらくみんなの顔をみまわしてから、現場に戻って行った。
ユミが、美佳のところに来た。
「もう、東京に帰りたいわ。私は、次点だったわけだし」
「でも、私がえらばれたかどうかわからないわ。彼は、今回は私のところへ来たけど、次には、あなたのところへ行って、ゆっくり考えて結論を出すつもりだったように思うわ。彼は、私にきめたとはいわなかったし……」
「でも、私、なんだか、これは殺人事件のような気がしてきたの。もし、そうだったら、一体誰が犯人かしら？」
ユミは、小声でささやいた。
「社長は、私といたし、あなたではないとしたら……」
美佳は、そっと、鮎子の方を見た。
視線を感じて鮎子がやって来た。
「私じゃないわ。私は、社長の奥さんになることをあきらめて、太郎さんと結婚することにきめたのよ。涼子さんを殺しても、何にもならないわ」
「でも、社長が涼子さんと結婚すると思っていたので、やめさせたかったんじゃないの？　私だって、涼子さんと、社長が結婚するのだと思った位だもの」
ユミが、負けずにいった。
「わかったわ。あなたよ、犯人は。今いったでしょう？　社長は、涼子さんと結婚すると思ったって。そして、次点は、自分だと思ったのよ。だから、涼子さんを殺せば、自分が花嫁になれると思ったのだわ。美佳さん気をつけた方がいいわよ」
美佳は、はっとした。

〈それが本当なら、次は、私が殺されるのではないだろうか？〉

しかし、ユミも負けていなかった。

「美佳さん、本当に気をつけた方がいいわ。あなたが、社長の花嫁に選ばれたら、狙われるわよ」

二人は、にらみ合った。

「やめなさい。マスコミがききつけたら、まずい」

太郎がいい、二人は、離れた椅子に座った。

15

太郎が心配したように、すぐにマスコミは、みんなのいる部屋に殺到して来た。

沖が、みんなに沈黙を守るようにといったので、誰も、その場では喋らなかったのだが、不思議なことに、昼のテレビのワイドショーでは、前後の事情がかなり詳しく報道されていた。

花嫁の第一候補が急死！

というテロップで、四人の写真が映され、自分こそは花嫁に選ばれようと、あの手この手で迫り、一番本命だと思われた女性が死んだという興味をそそるような報道をしている。残りの誰かが殺したのだというニュアンスが、言外にみえみえだった。

驚いたことに、レポーターの話では、この旅行には、ナオミがついて来て同じホテルに泊っていたという。彼女は、レポーターにきかれて、社長と深い関係があったことをいい、他の愛人は最後まで残して連れて来ているのに、自分は途中ではずされ、納得がいかず、ついて来たのだといっていた。

もう一つの驚きは、やはり、社長と関係のあった女秘書が、この旅行の直前に、退職届けを出して会社をやめ、ナオミと同行していたことである。

レポーターの口ぶりでは、この二人も、社長と、花嫁になる女性に恨みを抱いていたので、犯人にな

る可能性があると思っているように見えた。
昼前に、自分の部屋へ戻るようにいわれ、一人で、テレビを見ていた美佳は、次第に不安になって来た。
〈もし、最初から私が本命だと思われていたら、私が死んでいたかもしれないのだ〉
そのとき、電話のベルが鳴った。緊張した顔で受話器をとると、それは、ユミだった。
「テレビ見た？」
「ええ」
「びっくりしたわ。それに、まだニュースがあるのよ。レポーターの人の話では、今、私たちについて来た秘書の中村さんが、警察に調べられてるんだって」
「それは、今回のことで、色々事情をききたいからでしょう？」
美佳は、それがどうしたのだというふうにいった。
「違うのよ。あの秘書は、会社のお金を使い込んでいて、この旅行のあとクビになるはずだったらしいわ。それで、社長を殺すと、すぐわかるので、社長の花嫁になると思った涼子さんを殺したんじゃないかって疑われているらしいの」
「本当？　怖いわ」
美佳は、そういったが、内心では、もし、秘書が犯人なら、花嫁えらびに関係がないし、自分が殺されることもないのでいいのにと思っていた。
ユミの電話のあと、美佳は、昨夜の邦彦との初体験を思い出していた。
〈私は、やっぱり、彼が好きだわ。どんなことをしても彼と結婚したい！〉
それぞれ、ルームサービスで食事をしたあと、沖は、全員を自分の部屋に呼んだ。
ルームサービスで、コーヒーが運ばれて来て、女たちが、それをカップに注いだ。
「これからのことだけど、予定では、今日は昼間、

市内観光して、夜は、祇園のお茶屋とクラブにみんなを招待したかったんだけど、事件で駄目になってしまった。かといって、東京に帰ることも出来ない。警察の方でここに留まってくれといってるからね。どうするかな？」

美佳は、黙ってコーヒーに砂糖とミルクを入れ口に運んだ。まずいコーヒーだった。

突然、鮎子が、「あっ」というなり、体を折って苦しみ出した。

同時に、美佳も気分が悪くなり、吐気がして気が遠くなった。

がやがやという声が遠くでしているのがわかっていた。やがて気がつくと、それは、病院のベッドの上で、看護婦や、医者、それに、制服の警官がのぞき込んでいた。

「あの……私、どうしたのでしょうか？」

ベッドにおき上ろうとしたが、急にくらくらとして倒れてしまった。

「コーヒーの中に、農薬が入ってたんですよ。でも、飲んだ量が少いから、大丈夫でしょう」

医者がいった。

「鮎子さんは？」

美佳は驚きながら、鮎子のことが気になった。

「ここに入院しています。大分重いようですが……」

「二人だけですか？」

医者は、警官と顔を見合わせてから、

「沖邦彦さんも、やはり入院しています。兄さんともう一人の女性は無事でした」

と、いった。

「社長さんは、重いんですか？」

「まだ、気がつかないようです」

「そんな……。一体誰が？」

美佳は、もう一度起きようとしたが、体がいうことをきかなかった。

「誰かが、コーヒーの中に、農薬を入れたんです」

医者が聴診器をしまいながらいい、警官が、心あたりはないかときいた。
「わかりません。でも……」
「でも何ですか？」
「助かった人があやしいんじゃないですか？」
美佳は、いきどおりを感じながらいった。

16

美佳は、比較的軽い症状だということだったが、それでも、三、四日は絶対安静にしないと保証できないといわれた。
一日中、病室で、彼女は、たえずおそってくる吐気とたたかいながら、色々と考えた。
一番怪しいのは、社長の兄の太郎だった。彼は、社長を殺せば、その莫大な遺産が自分のものになる。もし、社長が、命をとりとめたとしても、美佳を殺せば、花嫁候補が、また一人消える。
鮎子は仲間なのにおかしいと思ったが、彼には、鮎子と結婚する意志はなくて、利用するだけ利用して殺してしまいたかったのかもしれない。
次に考えられるのは、ユミである。
彼女は、自分と社長以外は、全部いなくなればと思って、コーヒーに毒物を入れた。
それは、社長が、コーヒーを飲まないという自信があったからではないか。
ここまで考えてから、美佳は、はっとした。
〈ひょっとしたら、社長の兄さんとユミは、グルなのではないだろうか？〉
と、思ったからである。
ユミは、社長と結婚したくて、涼子を殺した。しかし、彼は、涼子ではなく、美佳を結婚相手に選びそうなことがわかった。
それで、美佳を殺そうと思ったが、その場合、果して、彼が、自分と結婚してくれるかどうか不安だった。

その時、太郎の方が、僕と結婚してくれと誘ったのではないか。

太郎としても、すれっからしの鮎子よりは、良家の子女であるユミの方に心がかたむいていた。それで、前々から、ユミに目をつけていたのかも知れない。

二人は、意気投合し、邪魔な鮎子と美佳、そして社長を殺すことを計画したのではないだろうか？

今は、良家の子女といっても、どこで、何をしているかわからない時代である。

美佳は、ユミに心を許していただけに恐ろしくなった。

美佳が、気がついたことをきいて、狩矢警部が、話をききに来た。美佳は、思い切って、自分の推理を話してみた。今は、彼が、たよりだった。

腕ぐみをしてきいていた狩矢は、大きくうなずいて、

「そういうことも考えられますね。あの二人は、コーヒー好きだというのに、あの時点で一滴もコーヒーを飲んでいないし、砂糖も、フレッシュミルクにも手をつけてないのですから」

と、美佳の意見に一応賛成してくれた。

「しかし、飲んでない二人にいわせると、もし、自分が犯人なら、飲まないであやしまれるようなことはせず、ほんの少しだけ飲んで、被害者にみせかけるというんです。これも、尤もな意見だと思いましたね」

「すると、たとえば、少しだけ飲んだ私があやしいとでもいうんですか？」

美佳は、むっとしてきいた。

「いや、そういう見方も出来るということです。気にしないで下さい。とにかく、最初の事件は、部屋のドアが施錠されていたことから、まだ、殺人とははっきりきまっていないんですが、今回の事件は、明らかに、殺人未遂事件です。慎重に調べたいと思っています」

狩矢は、そのあと少し話をして部屋を出て行った。

彼が出て行ったあと、美佳は、今、彼の言った言葉を考えて見た。今までは、毒入りコーヒーを飲まなかったものの中に、犯人がいると思っていたが、飲んだものの中に犯人がいるのかもしれない。

美佳は、自分がそんなことをしてないことは知っているから、残るのは、社長と鮎子である。

〈でも、社長が……〉

美佳は信じられなかった。睡眠薬ならとにかく、農薬では、下手をすると、命にかかわる。これだけ事業に成功していて資産もあるのに、命をかけてまで、他人を殺すという理由がわからない。

では、鮎子はどうだろう？

〈彼女は、社長と心中し、同時に、美佳まで道づれにしたいと思ったのだろうか？〉

と考えたが、どうもよくわからない。むしろ、兄の太郎と組んで、社長を殺したいのだが、二人が一滴もコーヒーを飲んでいないと疑われるので、鮎子が少し飲んだのかもしれないという気がして来た。

自分以外は、みんな信じられなくて、美佳は、天井を見上げた。それは白くて、ホテルの天井と不思議によく似ていた。

美佳の部屋は、501号で、503号の涼子の死んだ部屋とは、同じつくりだったことを思い出した。

〈彼女は、本当に自殺なのだろうか？　殺されたとしたら誰に？　そしてどんな方法で、密室にしたのだろう？〉

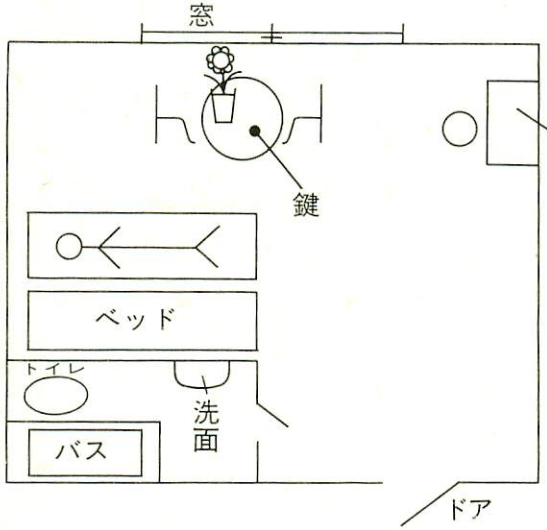
美佳は、ホテルの部屋の見取り図を書いてみた。

カギは、テーブルの上にあったという。

ドアは、オート錠でもセミオート錠でもなく、カギをかけないと閉まらない普通のマンションのようなシステムである。

窓はサッシュ枠にガラスの入ったもので、閉め寄せると、カチンとカギがはまるようになっている。

ドアも、窓も、しっかりしまっていたということ



だった。

美佳は、部屋のカギを思い出してみた。

ホテルによっては、なくしてはいけないので、大きなプレートのついているところもあるが、あのホテルでは、ホテルニューオータニなどと同じく、小さなカギである。

〈合カギは出来ない電子錠だときいたけど……〉

美佳は、密室の謎を解くことに専念した。

17

密室殺人だとしたら、よくあるのは、被害者が、刺されたあと、犯人を外に出して、ドアを閉めて、中で死ぬという場合である。

しかし、ドアの入口からベッドまで、一滴の血も落ちてないということなので、これはあてはまらない。

また、犯人が出たあと、機械的なしかけで、刃物

がベッドに落下して刺さり、彼女を殺すということも考えられるが、それなら、ベッドの上の毛布に突きささっている筈である。

彼女は殺されたあと毛布をかけられたという形なので、これもあてはまらない。

やっぱり、誰かが、彼女を刺し殺し、毛布をかけて、カギを持って出て、外から掛け、あとで、テーブルの上にカギを返したとしか考えられない。

〈でも、涼子さんの死んでいた部屋は、ここと同じ五階だわ。どんなにしても、窓から入れることは出来ない〉

美佳は、病室の窓をあけて下を見た。ここも五階だが、目まいしそうな高さである。ヴェランダのようなものもなく、地面に垂直に立っている壁に、窓の四角い穴があいているだけのあのホテル新館では、隣室のものが伝わって行くことも出来ない。

それに、窓もしまっていた。

美佳は、とうとう投げ出してしまった。

相変らず、部屋には、マスコミからの電話が、ひっきりなしにかかってくる。

中には、沖社長の花嫁にきまったそうですねといってくるレポーターもいる。

それらを適当にあしらいながら、美佳は、沖がどの部屋にいるのかと気になった。美佳と違って相当重い症状だというから、面会は出来ないのだろう。

美佳は、夕食のとき、看護婦に、沖は、どこにいるのかきいてみた。

「丁度、この下ですよ。鮎子という人は、その隣りです」

夕食後、美佳は、そっと病室を抜け出し、沖の部屋へ行った。軀がまだよくないので、ふらふらする。部屋へ入って行くと、ベッドにねていた沖が、目をあけた。

「あっ、君、大丈夫だった？」

「はい。社長はどうですか？」

「大丈夫だ。でもよかった」

彼は、美佳の手をとろうとしたが、その手は、だらんとしたままだった。
一生懸命、話そうとするのだが、いつのまにか眼をつぶって眠ってしまっている。
〈大分わるいみたいだわ。助かるのかしら？〉
美佳が、立ち去る気配に、彼は、眼を開いたが、焦点が定まらない様子だった。
隣りの部屋には、太郎がいて、ベッドの上に起き上った鮎子と、仲よく喋っていた。
〈彼女は、大したことないみたいだわ〉
美佳は、病室に戻った。
その夜、沖の母親が東京の病院で亡くなったことを、美佳はテレビで見て知った。
〈ここで、社長が死ねば、財産は、すべて、社長の兄の太郎という人のものになるわ〉
美佳は、病室に、夜誰か入って来るのではないかと思って、心配で、なかなか眠れなかった。
朝起きたとき、やって来た看護婦が、
「お友だちの鮎子という方が、亡くなりましたよ。元気だったんですけど、急変してね。あなたは大丈夫ですけど」
と、いった。
「えっ、亡くなった……」
美佳は、絶句した。
しばらくして、ユミが、部屋に入って来た。
「鮎子さんが死んだのよ」
「知ってるわ。昨日元気だったのに。私も死ぬのかしら？」
美佳は、心配そうにいった。
「あなたが死んだら、私が、社長と結婚するわよ。いい？　口惜しいと思ったら、早く元気になって」
ユミは、笑いながらいったが、美佳は、ぞっとした。
「涼子さんが死んだ事件、やっぱり、殺人ですって。解剖の結果、傷の工合からみて、自分で刺したのではないことがわかったんだって」

ユミは、美佳の顔をのぞき込んだ。
「でも、密室だったんでしょう？　どうして、犯人が出てから、部屋をしめることができたのかしら？」
「警察も、それがわからないので困っているみたいよ」
ユミは、ぶっきら棒にいった。美佳は、彼女が、コーヒーの毒入り事件以後、急に、優位にいるものの余裕と自信をみせはじめたことに驚いていた。
〈彼女は、最終的には、社長と結婚できると思っているのだわ〉
美佳は、急に、ユミという女性が、巨大にみえてきた。

18

夜があけた。
美佳は、起き上って窓をあけた。新鮮な空気が快い。しばらく、病院の中庭をみているうちに、下の窓があいて、看護婦が、上を見上げた。
その瞬間、美佳は、密室の謎が解けたと思った。真上の部屋からは、下の部屋の窓の中へ、カギは戻せるのだ。
犯人は、あの夜、真上にある自分の部屋から、針金のようなものを垂らしておいてから涼子の部屋へ行き、彼女の油断をみすまして、ベッドで刺し殺した。そして、窓の外に垂れている針金を部屋の中にとり込み、灰皿で、テーブルの上に固定する。
そのあと、カギを持って外に出て、部屋を閉め、自分の部屋に戻ったのだ。それから、窓のところへ行って、針金の先から、カギについた輪を通し、下の部屋の中まで滑らせ、針金を引きあげる。窓は、おせば閉まるしかけになっているから、上から、長い棒で、押し、ぴしゃっと閉めれば、密室ができる。
美佳の顔は青ざめていた。

この密室は、涼子の部屋の真上の人物しか出来ない。

〈つまり、犯人は、603号の沖邦彦になるのだ〉

彼なら、涼子の部屋のドアをノックすれば、涼子は喜んで中に迎え入れるだろう。ベッドへも裸で入ることが出来るから、刺し殺したとき、返り血は、裸の軀にしかつかない。彼は、その軀を、バスルームで洗い、何くわぬ顔で、針金を窓から入れカギをかけて、自分の部屋に帰ってくる。そして、カギを戻したのだ。

だが、その時間、彼は、美佳と一緒に寝ていたのだ。彼が来たのが夜中の一時で、帰って行ったのが、五時だった。

〈彼は、その間に、部屋を出て、涼子を殺したことになるけど……〉

考えてみると、その朝、美佳は、不思議に眠かった。あれは、彼が、セックスのあと、渡してくれた飲みものの中に、睡眠薬が入っていたのではないだろうか？

美佳が、ぐっすりと寝込んだあと、彼は、部屋を抜け出し、一旦、自分の部屋に帰って、針金を垂らしたあと、涼子の部屋に行き、彼女を殺し、自分の部屋から、カギをおとし込んでから、もう一度、美佳の部屋に入り、朝まで、一緒にいたふりをしたのだ。

犯行は、真上の部屋の沖以外には、出来なかったのだ。

美佳は窓をしめ、ベッドに腰をおろした。

〈彼は、あの夜、アリバイのためにだけ、私を抱いたのだろうか？〉

コーヒー毒入り事件は、自分も被害者であるように見せたくてやったことに違いない。

彼は、前からの愛人である涼子と鮎子、加代子から逃げ出したくて、お金で話をつけようとしたが、加代子以外は、承知しなかった。

それで、みんなで旅行することを提案し、二人を

始末しようと考えたのだ。しかし、旅行しているうちに、利口な鮎子は、あきらめて、彼の兄の方に乗りかえたが、涼子は、どうしても、別れないといい張ったのだろう。

彼は、涼子を殺す決心をし、彼女の部屋の真上の部屋をとった。

〈彼は、多分、ユミが一番好きだったのだ〉

だから、彼女は、アリバイに利用せず、コーヒーを飲むときも、何か合図して、飲まないように指示したのだ。

〈もし、彼が、私を愛していたら、死ぬかもしれないコーヒーを飲ませる筈がない〉

美佳は、ユミが、毒入りコーヒー事件後、美佳に優越感を持っていた理由がわかったと思った。

彼女は、社長が、自分を選んだことをはっきりと知ったのだ。

美佳は、看護婦に、警察によばれているから出て来ると嘘をいって、部屋を出て、街へ出て、柔らかい銅線を買ってきた。彼女は、いけ花を習っているので、木の根本をくくったり巻いたりするのに、銅線が使いやすいことを知っていた。

そして、それを、自分の部屋の窓からたらしてから、沖の部屋に行った。

「如何ですか？」

「ああ、今日はだいぶよくなった。死なないですんでよかったよ」

「私も」

そのとき、看護婦が検温に来た。

美佳は、窓ぎわにいき、銅線を中にとりこんで、カーテンの中へかくした。

「お母さまがおなくなりになったんですってね」

美佳は、戻ってきていった。

「ああ、まだ無理だけど、明日にでも、東京へ帰らなくてはいけない。兄が、一足先に帰っているけど、やはり僕が喪主になっているからね」

「結婚は、ユミさんとなさるんですか？」

美佳は、彼の顔をみつめた。
「いや、そのことだけど、母も亡くなったし、今回の旅行で、涼子や鮎子も死んだので、このさい、結婚のことは、一年ほど、棚上げにしたいと思うんだ。君にはそれだけのことをしたいと思っている」
「そうですか……」
美佳は、静かにうなずいた。
そして、彼の部屋を出た。
自室に帰ると、腕から、彼に貰ったブレスレットをはずし、それに、「さようなら。愛していましたから、誰にもいいません」と書いた紙をむすびつけ、銅線に通して、おとした。
ブレスレットは、確実に彼の部屋に入り、美佳は銅線を引きあげて窓を閉めた。
〈すべてが終わったわ。東京に帰ろう〉

19

数時間後、美佳は、ホテルで、狩矢警部とむかい合っていた。
美佳が、ブレスレットをすべり込ませたとき、狩矢警部は、沖の部屋にいたのだという。
「ガシャンと音がして、ブレスレットが部屋におちたとき、拾いあげたのは僕です。手紙をよみ、銅線を見て、すべてを悟りました。沖は、まっ青な顔をしていましたよ。こちらでも、あの時、誰が、コーヒーに毒を入れることが出来たかを調べた末、彼しか出来ないと結論が出たので、彼のところへ出むいたのです」
狩矢は、みんながコーヒーを飲んだのが、沖の部屋であること、彼が、その少し前に、コーヒーのルームサービスをとっていることから調べたところ、毒の入っていたのは、その時のコーヒーポットであることがわかったという。
つまり、沖は、あらかじめ、自分の部屋に、コーヒーポットをとり、その中に、農薬を入れて、みん

なを呼び、もう一度、ルームサービスでコーヒーをとって、さっきのポットも、今来たもののようにテーブルの上に出したのだという。

「あのとき、みんなの目の前で、ポットの中に毒物を入れることは、不可能でしたから、毒は、その前に、ポットに入れたと考えました。それを出来るのは、彼だけでしたからね」

狩矢は、ゆっくりといい、煙草に火をつけた。

「どうして涼子さんを殺したんですか？」

美佳は、今さらどうでもいいと思いながらきいた。

「涼子さんは、彼とのセックスを、すべてビデオテープにとっていたんだそうです。彼女は、彼女なりに、彼を愛していて、どうしても結婚したかったんでしょうね。しかし、沖は、もう彼女の軀にあきていた。結婚は、はじめての新鮮な女性としたかった。しかし、そうすると、彼女が、二人のポルノ写真を、公開するという。そういわれて、よけい、彼女がうとましくなったといっていました」

美佳は、黙ってうなずいた。そして、

「ユミさんは、どうしてコーヒーを飲まなかったんですか？」

と、きいた。

「彼女は、胃がいたかったので、飲まなかったそうです」

「沖さんは、それを知っていたんですか？」

美佳は、ねたましさに、瞳をきらきらさせながらきいた。

「知っていたといいました。彼は、自分と、鮎子さんだけが飲むと思っていたようですよ。兄さんは、最近、コーヒーをやめていたからって」

「そうですか……」

美佳は唇をかみしめた。

〈私のことは、全然、考えに入れてなかったのだわ〉

「では、一旦、東京に帰ります。何かあったら電話

してください」
美佳が立ち上ると、狩矢が送るといった。
新幹線ホームには、新婚旅行に出かけるカップルを送って来た人たちが、賑やかにさわいでいた。
ホームに列車が入って来たとき、狩矢がいった。
「彼は、あなたが、最初の面接のとき、願いごとがかなうまで、コーヒーを断つといったのをはっきりと覚えていたのにといってましたよ」
美佳は、頭をがんとなぐられたような気がした。
確かに、そういったのを思い出したのだ。
「あなたは、願いごとがかなうなら、何を断ちますか？」
と、きかれたのに対して、とっさに何も思いつかず、コーヒーと答えたのだ。
〈もしかしたら……〉
しかし、もう、美佳は、ひかりに乗ってしまっていた。
狩矢が、手をふって、中へ入るように指示した。
ロボットのように、美佳は、中へ入り、座席についた。
〈もしかしたら、彼は、私を一番愛してくれていて、私と結婚するつもりではなかったのだろうか？〉
その彼を、私は、殺人犯人として、警察に告発してしまったのだ。
〈降りよう！〉
しかし、そのとき、ひかりは、静かに走り出した。
美佳は、ぼんやりと、窓外の京都の景色を眺めていた。

京都受胎旅行殺人事件

1

中山美和は、平凡なOLから、玉の輿といわれる大富豪の妻になって四年たつ。

夫の中山和也は、東京をはじめ、関東一円にビルを持っているビルオーナーである。

美和は、彼の所有である丸の内のビルの会社に勤めているとき、見染められ、結婚した。

彼は、三十七歳で、美和は二十三歳と、一まわり以上はなれた結婚だったが、美和は、幸せだった。

大きな邸に住み、ヨーロッパの家具、お手伝いと、考えてもみなかった生活だった。

毛皮のオーバーも何着も買い、指輪やネックレスも、本物の宝石の入ったものを中山は買ってくれた。

ただ、四年たっても、子供が出来ないのだけが、不満だった。

夫の中山も、折にふれて、

「子供が欲しいな。いくら働いて財産を残しても、子供がいないのではつまらないな」

と、いうようになっていた。

とうとうある日、中山は、病院へ出かけて行き、自分には、何の欠陥もないのだと、美和にいった。

「君も診て貰ってくれないか？　もし、子供が出来ないことがわかっても、離婚はしないから、大丈夫だよ。そういう時には、養子でも貰うようにするから」

中山は、真剣な顔でいった。

美和は、ショックだった。

夫が、そこまで思いつめているとは知らなかった。

産婦人科に行ったことのない美和にとって、診て貰いに行くのは、勇気がいったが、とうとう思い切って行くことにした。

医者も、看護婦も、服を着ていて、美和だけが、下半身をさらし、大きく開脚させられる診察台にのったときには、恥ずかしさで、気が遠くなりそうだった。

しかし、結果は、吉だった。

「あなたは、充分、赤ん坊を生むことが出来ますよ。どこも悪いところはありません」

医者にいわれて、美和は、ほっとした。

その旨、証明書に書いて貰って家に帰ると、それを、夜遅く帰って来た夫にみせた。

「そうか、それはよかった。じゃあ、我々は子供を持つことが出来るんだね」

中山は、上機嫌でいった。

「ええ。私、どうしても、赤ん坊を生むわ。でも、協力して下さらないと……」

美和は、色っぽい目で、夫を見た。

その日から二ヵ月、基礎体温を計り、一生懸命はげんでみたが、妊娠の徴候はなかった。美和は、次第にあせって来た。

そんなある日、同じ会社につとめていたときの友人、麻沙代が遊びに来た。彼女とは、結婚してからも、ずっとつき合っている。

彼女は、友だちの噂話や、自分の恋愛の話をしたあと、ふと、声をひそめていった。

「云わないでおこうかと思ったんだけど、中山さんと、クラブの女性が、一緒にお食事をしているのを二度も見たわ。そのあと同伴したみたいだけど、気をつけた方がいいわ」

美和は、驚いた。しかし、わざと平気な顔で、

「でも、浮気はしないと思うわ。彼、今、赤ん坊が欲しいって、一生懸命なんだもの」

といった。

「そうなの。でも、それだけ子供が欲しいと中山さんが思っているのだったら、早く生んだ方がいいわ。もし、あの女に、子供が出来たら、彼は、その人と、結婚したいと思うかもしれないわよ」

麻沙代は、真剣な顔でいった。

美和も、急に心配になって来た。それで、彼女に協力して貰って、その浮気の相手をつきとめることにした。

そのうち、彼が女と会うのは、金曜日で、女性は、クラブ「ジャガー」のホステス、田畑ルリ子であることがわかった。

その日、美和と麻沙代が尾けているとも知らず、中山は、夕方、喫茶店でルリ子と待ち合わせ、そこから出て、食事をし、同伴して、クラブに入って行った。その日は、ホテルへ入らなかったが、いつもは、ホテルで休憩してから、店へ同伴するのだろう。

「あなた、早く子供を生んだ方がいいわ。中山さんに話して、旅行にでも出たらどう？　受胎旅行っていうのがあるでしょう？　タレントさんたちがよくやってる……」

麻沙代にいわれ、美和は、うなずいた。

子供が出来ない理由の一つに、美和の軀のいい時に、中山が遅く帰って来たりして、タイミングが合わないことが多くあったからである。

その日、帰って来た夫に、美和は、一緒に一週間、旅行に行くことをねだった。

「私、どうしても、子供を生みたいんです。子供さえ出来たら、あなたが、少しぐらいは、浮気をしてもいいんです。どうか一緒に旅行して下さい」

中山は、大きくうなずいた。

「一週間というのは、無理かもしれないけど、四、五日だったら、何とかしてみよう。どこへ行く？　ハワイ？　グアム？」

結婚してから、外国には何度も行かせて貰ってい

る。ハワイやグアムにも行っている。
今さら、見物という気持もなかった。
「私、国内がいいわ。外国だと体調も狂うかもしれないし、見物に気分が散ってしまうでしょう？　京都か、東北に行ってみたいわ」
「北海道はどうだ？　今、六月だから、北海道は、一番いいんじゃないかな？」
「北海道？　いいわ。じゃあ、北海道にしましょう」
美和は、承知した。
北海道は、今まで行ったことがなかったし、是非行ってみたいところだった。

2

中山が、てきぱきと手配をしてくれて、夫婦は、六月のある日、北海道への旅に出た。
一日目は、札幌どまりだった。
ホテルにチェックインすると、美和は、見物などしないで、ずっと部屋にこもっていたかったが、中山は、
「まだ早いから、どこかで、北海道らしい食事をしよう」
と、美和を引っぱり出した。
六月の北海道には、まだ、桜が残り、色々な花が咲きみだれていて美しかった。
景色や、土産（みやげ）ものなど、みるものが珍らしく、美和は、久しぶりに晴々とした気分になった。夫と一緒に長時間行動するのも、最近にはなかったことだった。
二人は、すすきのに行って、郷土料理の店へ入った。
毛ガニや、ほたて、とうもろこし、じゃがいもなど、北海道らしい料理が一ぱいだった。毛ガニは、半分は刺身にし、半分は、焼いて貰って食べた。
「おいしいわ。北海道に来て本当によかったわ」

美和は、にっこりと中山の顔を見上げた。
「四泊五日だけど、襟裳岬、知床ぐらいまではまわれるから、もっと楽しくなるよ。あんまり、見物にエネルギーを使っていては困るけどね」
中山は、夫婦だけにわかる笑みを浮かべた。美和も、はにかみながら笑った。
「さあ。土産ものを見ようか？　木彫りの熊やレリーフ、それから、白樺の苗なども買って帰るといいね」
二人は、土産もの店をまわって、たくさんの買物をした。
「一日目で、これだけ買ったら、旅のおわりには、荷造りして送らないと持って歩けなくなるね」
中山が楽しそうにいった。
ホテルへ帰ると、すぐに彼が、風呂の湯を入れるようにいった。
湯が一杯になると、彼が、
「一緒に入ろうか？」
と、ささやいた。
美和は、新婚旅行のときのように、胸がときめいた。
考えてみると、一緒に入っていたのは、新婚の数ヵ月だけだった。そのあとは、中山の仕事が不規則で、いつしか別々に入るようになっていたのだ。
〈旅行に来てよかったわ〉
美和は、旅行をすすめてくれた麻沙代に感謝した。
「じゃあ、先に入っているからね」
中山が、美和の首すじにキスをしてから、バスルームに消えた。
美和は、服を床に滑り落した。そして、それを、片付けると、壁にはめ込まれた鏡の前で、軀を写した。
細くしまったウエスト、張りつめてピンク色のみずみずしい乳房、蜜蜂のようなヒップ、中山が見染めたときと、少しも変っていない。

美和は満足して、バスルームに入って行った。
「きれいだ！　美和」
中山が、立ち上がり、彼女を抱きあげるようにして浴槽の中に入れた。
軀と軀がふれ合う。
中山は、美和を膝に乗せ、うしろから、首すじにキスをした。
「あっ」
美和は軀に電流が走ったようになり、軀から力が抜けていった。
中山の手が、乳房を撫(な)で、花びらのような乳首を揉(も)みしだく。
やがて手は、繁みに入って行く。
美和は、目をつぶって、神経を一点に集中させた。いつもと違って、うしろからというのが興奮を呼びおこす。
美和の軀が溶け、下半身から、熱い液体が流れ出して行くのがわかった。
風呂から上がると、二人は、裸のまま、ベッドにもつれ込んだ。
美和の長い髪がほどけ、上気した白い肌が、ベッドの上に花のように乱れる。
激しいキスと愛撫。プレイボーイだけあって、中山は、美和の敏感なところをよく知っていた。
首すじから、背すじ、喉(のど)から乳房の横と、キスをつづけながら、手は休まずに、花芯を刺激する。
美和は、耐え切れなくなったように、うっすらと眼をあけて、中山を見上げた。中山がうなずくのと、押し入ってくるのが同時だった。激しい動きがとまった時、美和は、記憶がとだえた。

3

朝まで、美和は、夫の腕の中で眠った。
快い眠りだった。
朝おきた時、中山はすでに目覚めて、新聞を読ん

でいた。食事にホテルの食堂に行ったとき、美和は、はっとした。

一つのテーブルに、野上二郎がついているのが見えたからだった。

野上二郎は、美和が結婚前につきあっていた男である。

同じ会社につとめていて、二人は、結婚するだろうとみんなが思っていたのである。

背が高く、ハンサムで、清潔な感じのする彼を、美和も愛していたが、当時、彼の母親は、病気で入院、退院を繰りかえしていて、結婚どころの話ではなかった。デートの約束をしていても、母親が悪くなったから病院へ行かなくてはといって、たびたびすっぽかされた。

そういう状態が半年も続くうちに、美和も、いらだって来た。そこへ中山からの話が持ちこまれたのである。

思いもかけない玉の輿である。その上、中山は、熱心だった。最初は、食事だけといって誘い、そのあと飲みに連れて行き、プレゼントをする。電話が毎日かかり、高価なプレゼントを、次々贈られているうちに、美和の気持も、次第に中山に移っていった。

決定的だったのは、美和の誕生日だった。

その日は、野上と二人で誕生日を祝うことになっていたのに、野上は母親が危篤だからと、断って来た。母親が危篤というのは、たびたびのことで、美和は、またかとうんざりした。

そこへ、中山から電話がかかり、お誕生日だから食事をしたいといわれた。

野上へのあてつけもあって出かけた彼女に、中山は、豪華なルビーの指輪をプレゼントした。

「あら、指輪なんかいけませんわ」

驚いて美和が返そうとするのを、中山は笑って押し返した。

「大丈夫だよ、婚約指輪じゃないんだから。婚約な

らダイヤを贈るよ。はめてごらん。中指にはめるようにしてあるから」

といわれ、指にはめた。それは、指にぴったりだった。白く細い指に、赤いルビーは、あやしい程、美しく光った。

「貰ってくれるね」

中山がいい、美和はうなずいた。

そして、とんとん拍子に結婚の話がすすんでいった。

あとでわかったのだが、野上の母親は、その日から昏睡状態になり、二週間後に亡くなったのだった。

結婚式の前日、彼は、美和のところにとんで来て、男泣きに泣いて、結婚をやめてほしいといったが、もう遅かった。

「ごめんなさい。今さらどうにもならないの。あなたもお元気で」

美和も泣いて彼と別れた。

それ以来、彼と会ったのははじめてだった。

夫の中山は、何も気づかず、まっすぐにすすみ、彼のテーブルの隣りの席についた。

野上は、何げなく隣りを見て、はっとしたような顔をした。

しかし、横に彼女の夫がいるのに気がつくと、うつむいて黙々と食事を続けた。

そのうち、手帳を開いて考えていた中山が、

「ちょっと会社に電話してくる」

と、いって中座した。

中山がいなくなると、はじめて野上が、美和の方をむいた。

「ご無沙汰しています」

相変らず、男らしいハンサムな彼を見て、美和の方から声をかけた。

「お幸せそうで、何よりです」

野上は、まだ堅い表情でいった。

「北海道へは？」

「出張です。あと三日間います。あなたは？」
「私は今日を入れて四泊五日です。同じ会社ですか」
「今は、京都支店に勤めています」
「結婚なさったの？」
美和は、やはりそのことが気になった。
「いいえ。独身です。多分、一生結婚はしません」
「そうですか……」
そこまで話すと、野上は食事を終って立ち上がった。
「では、お元気で」
その後姿を見送りながら、美和は、なんとなく、胸が痛んだ。
やがて戻って来た中山は、
「困ったよ。仕事で、急に東京へ行かないといけなくなったんだ。一泊して明日には戻ってくる。今日一日だけ、一人で観光してくれないか」
と、いった。
「え？　そんな……」
といったが、内心では、それほどがっかりしてない自分に、美和は驚いていた。
なんとなく、野上の顔がうかんだ。
「とにかく、食事をすませたら、すぐに、空港に行く。旅行は、一日のばせば同じだよ。今日は一人でゆっくりしなさい」
中山は、美和に充分すぎる小遣いをわたして、東京へ行ってしまった。
美和は、タクシーを見送ってから、ロビーに戻った。

4

すると、エレベーターから、野上がおりて来るのに出会った。
「あ、野上さん」
「どうしたんですか？　ご主人は？」

野上は、中山の姿を探した。
「今、東京へ行ってしまったの。これから、一人で観光するんですけど、野上さんは？」
「僕は、今から札幌支店へ顔を出して、夜は、宴会があるんです」
「じゃあ、いっていらっしゃい」
美和は、ほっとした思いと、がっかりしたのとのごっちゃになった気持でいった。
〈私は、人妻なんだわ。たとえ、一緒に歩くだけでも、昔の恋人となんていけないわ〉
と、思った。
しかし、野上は、ちょっと考えてから、
「一時から五時まで、あいてますから、市内観光しますか？　もし構わなければ」
と、いった。
〈観光するくらいなら、かまわないのじゃないかしら？〉
美和は、うなずいた。
「では、一時にこのロビーで」
野上は怒ったようにいうと、さっさと出て行った。
美和は、お昼まで、ホテルの土産もの売場を見たり、軽い食事をすることで過ごした。
そして、シャワーを浴び、化粧を念入りにして、一番気に入った絹のワンピースを着た。
四年間、ろくに外にも出ず、家でじっと夫の帰りを待ってばかりいたので、着飾って外に出るだけでも胸がはずんだ。
一時きっちりにロビーに行くと、野上は、もう来て待っていた。
「やあ、本当に来てくれたんですね」
野上は、はじめてほほ笑んだ。
「どうして？　約束したら来ますわ」
「よかった。じゃあ」
野上は、先に立って歩き出した。あの頃のデートの時と同じだった。

二人は、タクシーで、時計台や、植物園、大通公園などを見て歩いた。
「鈴蘭がありますね」
野上は、鈴蘭の小さな束を買ってくれた。
サッポロビール園でジンギスカン料理とビールを飲んで、二人は、ホテルへ帰って来た。
「あら、もう五時半ですわ」
「いいんですよ。遅れても」
野上は、なにか云いたそうな顔をしたが、
「では、お元気で」
と、車に乗って行ってしまった。
そのあと、美和は、どこへも行かず、ホテルで過ごし、昼間、野上と行った場所を、色々と思い出した。
楽しい一日だった。
夜になると、夫から電話がかかって来た。
「あれ？　ホテルにいるの？　どこかへ遊びに行けばいいのに」
中山は、意外そうにいった。
「お昼、観光して来たので、もういいんです。お仕事はすんだんですか？」
「それが、残念なことに、どうしてもうまく行かなくてね。君も知ってるだろう？　大阪の梅田でビルを建てる話。はじめて関西へ進出しての仕事だけに成功させたいんだよ。あと二日ほどかかるから、今回は、君一人で北海道をまわるか、やめて帰って来て欲しいんだけど……」
「……」
美和は、がっかりした。折角の受胎旅行なのにと思った。
「その代り、もう一度、今度は、京都にでも行こう。受胎旅行のやりなおしだ。でも、ひょっとしたら出来てるかもしれないよ」
「え？　何が？」
「昨日随分熱く燃えてたじゃないか」
「まあ、あなたって」

美和は、すっかり機嫌が直った。
「じゃあ、駄目だったら、今度は、京都に連れて行って下さいね」
「いいよ。じゃあ、おやすみ」
美和は、電話を切ってから、ベッドに腰をおろした。
夫が戻って来ないのは淋しかったが、もう一度旅行できるのはうれしかった。
しかも、京都というのが胸をときめかせる。前から、美和は、京都に行ってみたかったのだ。
〈それに、京都には、野上さんもいる〉
今さら、彼とどうしようという気はないが、彼と、京都の寺を歩けたらなどと考えると楽しくなってくる。
〈今頃、彼は、ホテルに戻ったかしら？　それとも、宴会でさわいでいるのだろうか？〉
八時になったとき、美和は、テレビを切ってルームサービスをたのむことにした。

5

コーヒーと果物を注文してから、美和は、昔の旅行を思い出した。独身で友だちと一緒に旅行したときなどは、ルームサービスで果物をとるのがもったいなくて、ホテルの外で、果物を買って来て食べたものである。
コーヒーと果物が来ると、美和は、部屋の空気調節がうまく行かないので直して欲しいとたのんだ。
六月だが、その日は肌寒く、暖房を入れようとしたが、冷たい空気しか出て来ないのだ。
ボーイは、自分の係ではないので、フロントに言っておきますといった。
夫にいわれた通り、チップをはずんだので、ボーイも親切だった。
コーヒーを飲み終ったところに、ホテルの係員が来て、空調をみてくれた。

「申しわけありません。直すのに一時間ほどかかりますので、別の部屋をご用意しましょうか？　それとも、お待ちいただけますか？」

美和は、考えた末、部屋をかわらず直してもらうことにした。もし、夫が電話をかけて来たら、困ると思ったのだ。

一時間といったが、修理は、二時間近くかかった。

美和は、テレビを見ながら、待っていた。

やっと直ったときには、十時をすぎていた。

〈明日は、東京に帰ろう。もし、昨日、妊娠していたのなら、あとは安静にした方がいいわ〉

そう思いながら、美和は、眠りについた。

野上は、翌日もその翌日も忙しくて、手があかないといっていたので、北海道にいても仕方がなかった。

翌朝、予約しておいたルームサービスを食べていると、ドアの外がさわがしくなった。

〈団体客が発つのかしら？〉

と思っていると、急に、ドアがノックされた。

「どなたですか？」

美和は、注意深くチェーンをかけたままで、ドアをあけた。

「警察のものですが、おとなりで事故がおこりましたので、お話を伺いたいのですが」

ドアの外には、何人もの男が立っていた。

〈本物の警官らしい〉

美和は、ドアをあけた。

入って来たのは、二人の男だった。

「北海道警の南と申します。実は、昨夜、おとなりの部屋で、女性が急死されまして……」

「えっ、本当ですか？」

美和は、驚いて南の顔を見た。

「今朝、七時にモーニングコールを頼んでいたらしいのですが、応答がないので、ホテルの方が、起こしに来て発見したそうです。死亡したのは、昨夜で

す」
南は、一気にいった。
「どんな人なんですか亡くなった人というのは？」
美和は、怖さよりも好奇心が先だってきいた。
「田畑ルリ子という東京の方です」
「えっ、田畑ルリ子？　ホステスの方ですか？」
美和は、びっくりした。
「ご存知ですか？」
南の目が光った。
「いえ。主人がよく飲みに行っているクラブのホステスさんだと友だちにききました」
「会ったことは？」
「ありません」
美和は、嘘をいった。
その様子を見ていた南は、
「ご主人のお名前は？　それから、そのお友だちというのは？」
と、やつぎ早やにきいてきた。
「主人は、中山和也で、お友だちは、水木麻沙代さんです。でも、二人とも、東京にいます」
南は、じっと、美和の顔をみつめた。
「そのホステスさんと、ご主人の間に、愛人関係があったということはありませんか？」
「いいえ」
だが、眼を伏せた美和の様子から、それが嘘であることを刑事は見破ったようだった。
「すみませんが、隣りの部屋まで来て下さい」
美和は、黙って、刑事のあとに続いた。

6

部屋の中は、刑事や、鑑識員で一杯だった。ルリ子の死体は、ベッドの下に、長くのびた姿勢で横たわっていた。
〈やっぱり、彼女だわ。どうして彼女が、隣りの部屋に……〉

美和は、ツインのベッドを見て思った。
〈ひょっとして、夫が、彼女を呼びよせたのではないだろうか？〉
夫は、東京に帰らず、この部屋で泊ったのではないかという疑惑が頭をかすめた。
〈昨夜の電話も、この部屋からかけたのではないだろうか？〉
検死官らしい男が、南のそばに来て、
「死因は、青酸性毒物による中毒死で、コーヒーカップの中に、毒物が入っていたものとみられます」
と、いった。
「すぐに、指紋の検出をしてくれ」
南が、鑑識員に命令した。
毒死ときいて、思わず美和は、みぶるいした。
「この方、殺されたんですか？」
「どうしてそう思うんですか？」
「でも、自殺だったら、こんなに調べたりなさらないんじゃありませんか？」
美和は、自分がわりと冷静だと思った。
「一応、自殺と他殺の線で調べています。しかし、彼女は、今日は、定山渓の方へ行くといって、タクシーを契約していますし、モーニングコールと、モーニングサービスもたのんでいます。それに、死ぬときに、電話機の方へ手を伸ばしていますので、やはり、覚悟の自殺とは思えませんね」
南は、死体を運ぶように指示をしてから、美和に自分の部屋に戻るようにいった。
美和は、部屋に戻ると、夫に電話をかけた。彼は、家にいた。美和はほっとした。
「やあ、どうする？　今日帰ってくるの」
中山は、のんびりといった。
「それが、帰れなくなりましたの。実は、私の隣りの部屋で、女の人が死んだんです。
田畑ルリ子さんという東京のホステスさんです」
「えっ、本当か？」

中山は、驚いた様子でいった。
「それが、殺されたらしいんです。昨日の夜」
「夜の何時ごろ？」
「さあわかりません。それで、私も疑われているし、あなたも疑われるかもしれませんわ」
「どうして？」
「でも、あの人は、あなたの彼女でしょう？　私、麻沙代さんからきいたわ。一緒に食事したりしてるの見たって」
「それは違うよ。あの店には行くので、同伴をたのまれて、二、三度食事をしたりしたけど、それだけだよ。そのくらいだったら、どこのクラブにもいるよ。客をつれていったとき、うまくもてなして欲しいと思うからね。それに、僕は疑われないよ。昨日は、東京で大勢と飲んでいたから」
中山は、落着いていた。
「そんならよかったわ。とにかく、警察で許可が出たら帰ります」
電話を終ったとき、南が入って来た。隣りの部屋に行ったとき、他の刑事が「警部」と呼んでいたので、彼は警部なのだろう。
「どこへ電話してたんですか？」
彼は、きびしい目でいった。
「主人にですわ。今朝帰るつもりだったのですけど、こんなことになったから遅れると連絡したんです。いけませんか？」
美和は、南をにらみつけた。
「それで、ご主人は、東京におられましたか？」
「ええ。昨晩は、大勢と飲んでいたといいましたわ」
「そうですか？　それで、あなたは、昨夜、どうしておられましたか？」
「この部屋にいましたわ」
「ずっとですか？」
「ええ。でも、お隣りの方が亡くなったのは何時なんですか？」

美和は、きいてみた。
「九時前後です」
「ああ、それなら」
美和は、にっこりした。それなら、アリバイはある。彼女が、ルームサービスをとったのが八時で、そのあと十時ごろまで、空調を直しにホテルの人が来ていたことを云うと、南の顔に、たちまち失望の色が浮んだ。
「そうですか……。では、また」
「あの、東京に帰ってはいけないんでしょうか？」
「ちょっと待って下さい。十分ほどしたら電話します」
その十分間で、美和のアリバイを確かめたらしく、やがて南から、東京に帰ってもいいという連絡があった。

7

千歳で連絡しておいたので、空港まで、中山が迎えに来てくれていた。
「大変だったね。実は、こっちにも刑事が来てね。僕のアリバイを調べていったよ」
「あら、そうでしたの」
美和は、びっくりした。
「幸い、昨夜は、大勢、一緒に銀座のクラブで飲んでたからよかったけど、一人で家に帰ってたらと思うと、ぞっとするね。あ、それから、昨夜は、銀座で君の友だちの麻沙代という女性に会ったよ。君が見張るように頼んだんじゃないだろうね？」
中山は、ちょっと眉をしかめた。
「違いますわ」
美和は、あわてて否定した。
「つまらないことを君に告げ口するような友だちとは、つき合わない方がいいな」
中山は、強い口調でいった。
結局、北海道の事件は、解決しないままに、日が

過ぎて行った。
　警察では、彼女の部屋がツインなのに、ベッドを使用した様子がないことから、彼女は恋人と北海道で会う約束をしたのに、相手が来なかったため、やけになって衝動的に自殺したのではないかという意見も強くなっていった。
　七月一杯、美和は、妊娠の徴候がないかと、心待ちしていた。
　彼と交ったのは、たった一日だったが、中味が濃かっただけに、ひょっとしたらという期待があった。
　七月の終りになって、それが、期待はずれに終ったことがわかり、美和は、がっかりした。
「あなた、駄目でしたわ」
　美和が中山に告げると、彼も残念そうに、
「仕方がないよ。あの時は、たった一日だったからね。秋になったら、京都へ行こう。夏の京都は暑いから、秋の方がいいよ」
と、なぐさめた。
　美和も、京都へ行けると思うと、元気をとり戻した。
「今度こそはね」
「ああ、大丈夫だよ」
　二人は、ほほ笑み合った。
　美和は、ルリ子が死んで、今は、ほっとしていた。夫は、深い関係はなかったといっているが、やはり、そういう女性がいない方がいい。夫が、東京で、あの日、大勢一緒に飲んでいたのは証明されたので、夫婦は、それ以上調べられることはなかった。
　結局、九月のおわりになって、二人は、再度の受胎旅行に出かけることになった。
　京都駅に近づくと、京都タワーや、東寺の塔が見えはじめた。
　黒い瓦屋根も多い。
　東京駅の近くに、高層ビルが多いのとは、対照的

である。
「やっぱり京都らしいわ」
美和は、うきうきとしていった。
「気候もいいね。暑くも涼しくもない」
二人はホームをおりて、タクシーに乗った。
「観光客が多いね。明日は、大覚寺で月見の宴があるらしいよ。竜頭船が出て、とても情緒があるということなので、見に行こうか？」
「ええ」
二人は、河原町のホテルに着いて、チェックインした。
スイートルームなので、ベッドがあるのは、別室になっている。広い応接室があり、和室もついている。
「豪華だわ。うれしい」
美和は、部屋を見まわした。カーテンまで、華やかな感じだった。
「今日は、市内を散歩して、外で夕食をしようか？あまり観光して疲れるとまずいから」
中山が、笑いながらいった。彼の関西のビル建設がうまくいっているらしく上機嫌だった。
美和は、急いで服を着かえ、化粧を直して、中山と、ホテルの外へ出た。
河原町通りを南にゆっくりと歩く。
やがて、右へまがって、新京極に入った。
修学旅行の生徒がたくさん歩いている。
土産もの店が、ずっと並んでいる。
舞妓のハンカチ、匂袋、西陣織のネクタイやバッグ、食べるものでは、八つ橋や五色豆がある。
美和は、西陣織のネクタイを夫に買った。
中山も、可愛い京人形をプレゼントしてくれた。
二人は、そのあと、京料理の店へ行き、ゆっくりと食事をして、ホテルに帰って来た。

8

バスにお湯を入れ、美和は、甘えた声を出した。
「あなた、お湯が入りましたわ」
当然一緒に入るものと思っていたが、中山は、先に入ってくれという。
あとから入って来るのかとゆっくりして待っていたが、彼は入って来ない。
「あなたァ、そろそろ上りますわ」
美和は、声をかけた。
「ああ、バスタオルあるかな。僕は、ちょっと髪を洗いたいんだ」
仕方なく、美和は、バスタオルで、胸から下を包んで出て行った。
中山は、代りに入っていく。
中山の風呂は長かった。
ベッドで待っていた美和は、次第にじれて来た。
バスタオル一つでいるのも、いかにも待っているという感じで嫌だった。
「あなた、髪洗うのお手伝いしましょうか？」
声をかけて、ドアをあけようとしたが、中からカギがかかっていてあかない。
「あ、今、あがるから」
彼は、そういってから五分ほどして、やっと、あがって来た。
彼は、ジュースを飲みベッドに横たわったが、肌がふれても積極的にならなかった。
「湯あたりしたのか貧血をおこしたんだ。すぐなおると思うけどね」
「あ、そうですか……」
美和は、離れてねそべり、天井をみつめた。なんとなく、腹が立って来た。
〈今日こそは、受胎したいのに。どうしたのかしら？〉
そのうち、中山は、すやすやと眠ってしまった。
〈疲れているんだわ。眠らせてあげよう〉
美和は、手洗いに立った。
ドアをあけると、ふっと変な匂いがした。

それは、栗の花に似た匂いだった。
〈まさか、彼はここで……〉
美和は信じられなかった。
〈私のことを考えながら軀を洗っているうちに、耐え切れなくなったのだろうか？〉
とにかく男性の体調には、色々あるのだろうと考えて、美和はあせらないことにきめた。翌朝、ふと目をあけると、中山が、美和を裸にむいて、浴衣の紐で、後手にしばっているところだった。
「イヤッ、どうして？」
美和がびっくりして軀を亀のようにばたばたさせると、中山は、怖い顔をして、もう一本の浴衣の紐で、美和のお尻を、ひっぱたいた。
「痛っ！　痛いわ。やめてっ」
美和は、うつ伏せになったまま、必死で叫んだ。
中山が荒い息で迫り、うしろからのしかかって来た。
〈犯される！〉
と、眼をつぶった途端に、思いがけなく、はげしい快感を覚えて、美和の下半身が波打った。中山は、手で、美和の頭をおさえつけ、激しく動いた。美和も中山を強く捕え、何度もふりまわした。自分の意志ではなく、軀が勝手に動くのに美和は、自分で驚いていた。しかし、それは、今まで感じたことのないしびれるほどの快さだった。
とうとう、中山が、耐え切れなくなったように「うっ」と呻き、ピクピクと動いたと思うと、ぐったりとなった。
そのままの姿勢で、美和は、余韻を味わっていた。
〈今度こそ、子供が出来たわ〉
やがて、中山は我に返り、
「ごめん、ごめん」
といって、手の紐をほどいてくれた。
「どうしたんですか？」
美和は、母親のような寛大な口調できいた。

「いや、仕事のことをふっと考えたら、不能になってね。雑誌で見たことをやってみたくなったんだ、痛かった？」
　中山は、美和の手をやさしくさすってくれた。
「いいえ。すっごく……」
「え？　すごくどうしたの？」
「イヤーン。わかってるくせに」
　美和は、中山の胸に顔をうずめた。幸せだと思った。
「じっとしておく方がいいよ。飲物持って来てあげる」
　中山が、ジュースを運んで来てくれた。
「今日は、昼までねむった方がいいよ。安静にしないとね」
　中山がいい、別の部屋にとったルームサービスを、ベッドのところまで運んで来た。
「でも、あなたは？」
「僕がいるとゆっくり休めないだろうから、出てくるよ。京都にもビルを建てたいので、予定地を見てくる」
「え？　京都にもビルを建てるんですか？　どのへんに」
「四条烏丸だ。あのあたりは、ほとんどビル街だけど、昔からの京都の家もあるんだ。そういうところは、今までにもビルの交渉があっても、たち退かないでがんばっているんだけど、交渉次第ではなんとかなりそうなんだ。いくらがんばっていても家はどんどん老朽化していくからね。京都にビルを作るのは夢なんだ」
「いいわ。あなた、がんばってね」
「ああ。そのビルの最上階には、我々のルームも持ちたいと思っているんだ」
「わァ、すてき！」
「では行ってくるよ」
　中山は、出かけて行った。
　四条烏丸といえば、野上の会社のある場所であ

る。
〈ビルが出来て、別荘のように、その部屋を利用できたらいいなあ〉
美和は、うきうきした。

9

すぐに眠ろうとしたがなかなか眠れない。
一時間ほどしたとき、麻沙代から電話がかかって来た。
「電話したら、留守番電話になっていて、びっくりしたわ。本当に京都にいるのね」
「ええ。受胎旅行のやりなおしなの」
「それで？」
「え？」
「うまくいった？」
「ウフフ。まあね」
「私も京都に旅行しようかな。彼と」
彼女には、同じビルに彼がいることを美和も知っていた。
「それで結婚をきめたの？」
「それが、彼、なかなか踏み切ってくれないの。京都へ婚約旅行に誘ってみようかな」
「それがいいわよ。京都ってムードがあるもの」
「でも妊娠して、結婚してくれなかったら困るわ。私の場合は、美和と違って妊娠しないように気をつけなくては」
「オホホ」
途中で、二度ほど、ビーという音がした。公衆電話でかけているらしい。
「十円玉がなくなったから切るわ。お幸せにね」
麻沙代が電話を切ったあと、眠ろうとしたが、どうしても眠れなかった。
ホテルの一室にいると、テレビを見るくらいしかすることはない。
中山の行方はわからず、美和は退屈してしまっ

た。
〈そうだわ。野上さんに電話をしよう。電話ぐらいしたってかまわないわ〉
美和は、いそいそと電話した。
野上は、会社にいた。
「あ、君なの。どうしてるの？」
「今、京都よ」
「えっ、嘘だろう？」
野上は、びっくりしたように、大きな声を出した。
「今ホテルにいるの」
「一人？」
「今は一人。でも主人と一緒に来たの」
「あ、そう」
急に、野上の声のトーンがおちた。
「でも、主人は、四条烏丸にビルを建てるのでとびまわっているの。時間があいたら、どこかのお寺へ連れて行って下さらない？」
「いいよ。でも、ご主人に悪いんじゃないの」
野上は、心配そうにいった。
「お寺に行くぐらい何ともないわ。もう京都には詳しくなったんでしょう？」
「少しはね。あ、そうだ、今晩は、大覚寺で、月見の船遊びがあるよ」
「ああ、それ、主人と見に行くことになっているの」
「じゃあ、僕は、遠慮するよ。見に行くつもりだったんだけど」
「ごめんなさい。でも、京都には、あと何日かいるので、一度くらいお会いしたいわ」
「……」
野上は、何故か返事をしなかった。いくらもとの恋人でも、夫のある女とは、つき合いたくないのだろう。それに、彼にも、結婚相手の女性が、いるのかもしれない。もう四年もたっているのである。
とうとう眠れないままに、ぼんやりしていると、

中山が帰って来た。
「よく眠れた？」
「いえ、あまり。早く帰って来て下さらないかと待っていたの」
「それは悪かったね。実は、夜、土地を持っている人と食事をすることになったんだけど、夜は、大覚寺に君といくことになってたから断ったんだ」
中山は、ちょっと残念そうだった。
「あら、そんなことなら行って下さい。私一人でお月見して来ますわ。私、京都に、是非ビルを建てて欲しいの」
「本当？」
中山の顔が輝いた。
「本当ですわ。何もしないでホテルにいるのは、退屈ですけど、行事をみるのだったら、一人でもなんとかなりますわ。でも、夜は、帰って下さるんでしょう？」
「ああ、もちろんだ。祇園の方で食事をして飲むだけだ。十時には戻れると思う」
「じゃあ、行っていらっしゃい。私、がまんしますわ」
「そうか。それは有難う。本当は断るのまずかったんだ」
中山は、美和を引き寄せてキスをした。
二人は、夕方までを市内観光にあてた。
途中で、美和は、手洗いに立った。そして野上に電話をかけて、今夜、大覚寺へ行くことを約束した。

10

北嵯峨野の大覚寺には、大沢池という広大な池がある。
王朝時代から観月の名所で、池は、中国の洞庭湖を模して作られたという。
待ちあわせの場所に行くと、野上が落着かぬ様子で待っていた。

「本当に大丈夫？」
「ええ。十時までホテルに戻れないって」
「じゃあ、行こうか」
二人は、大覚寺の庭に入って行った。すでに大勢の観光客が集っている。
琴の音がひびく中に、大きな海のような池があった。小雨が降りかかっていて、池の上は、まっ黒である。その暗やみの中に、ぬっと、竜の首があらわれた。妙になまなましい。
「きゃっ」
思わず、美和は、野上にしがみついた。
それは、竜頭船だった。券を買って、順番に中に乗り込む。中では、お茶とお菓子が出るのだ。
船は、静かに水の上を滑り出した。
「怖いわ」
美和は、かき曇った暗黒の空を見上げていった。
今にも、本ものの竜が出て来そうな感じだった。船が近づいて来た。
「あ、あれっ！」
それは、鶏首船といって、鶏のような鳥の首のついた船だと、野上がいった。
「竜より、あの方が怖いみたい」
美和は、平安時代にタイムスリップしたような気分になった。
船が一まわりして岸に戻ると、美和はいそいで船からとびおりた。
「月なんか見なかったわ」
「僕も」
二人は、寺の中に入り、今度は、つき出した縁から月を眺めた。
野上といると、娘時代にかえったようで心がはずむ。
「案外早くすんでしまったのね。まだ、七時すぎだわ」
「お腹すきませんか？」
「す・い・た」

「アハハ」
二人は、どこかで食事をすることになった。嵐山の近くまで来ると、ビルの一階に食事どころがあった。
「あそこに入りますか」
「嫌だわ。隣りにラブホテルがあるから」
「じゃあ、この少し先に、いつも行く店がありますから、そこにしましょう」
二人は、松花堂弁当を食べて、ちょっとビールを飲んだ。
「きれいなお店ね。よくこの店にいらっしゃるの？」
美和は、外へ出てから、いった。
「ええ。隣りが僕の住んでいるマンションですから」
「えっ、そうなんですか。どこ？」
「あそこです」
美和は、白いマンションを見上げた。
「何階？」
「一階です。一階のはしです」
「へえ……」
「ちょっと寄りますか？」
「どうしよう」
美和は、さすがに躊躇した。
昔の恋人の家へ行ったら疑われても仕方がないのだ。
しかし、いっているうちに、一階の一番はしなので、すぐにその前へ行ってしまった。
「中をのぞいてみるわ」
野上が、カギをあけた。
〈女がいれば、ちょっと見ればわかるわ〉
美和は、のぞいてみたい好奇心をおさえることが出来なかった。
「ちらかってますけど」
中へ入ってみると、白いきれいなベッドがあり、壁には、車の写真が貼ってあった。

「レーサーライセンスを持ってたんでしょう？」
「ええ。今もやってますよ」
野上は、アルバムを持って来てみせた。
レースに出たときの写真がたくさんはってある。
女性が花束をささげているのもあった。
「この人は？」
「ああ、この近くにいる人で、ミス・着物になった人。僕のファンなんだ」
「きれいな人ね」
美和は、急に、胸があつくなってきた。
「そんなでもないよ」
野上が、アルバムをとろうとした。美和は、別のページにも、彼女が写っているかもしれないと思って、渡すのを拒否した。
アルバムをもぎとった野上のひじが、美和の頬にあたった。
「あっ」
「ごめん、大丈夫」
野上が、肩に手をかけて、顔をのぞき込んだ。
「なんともないわ」
顔をあげた美和のすぐそばに、野上の唇があった。
はっとしたときは遅く、キスをされてしまった。
甘いキスだった。
彼の手がいつのまにかファスナーをはずしてしまっている。ワンピースの上半身がぬげてしまったのに気づき、あわてて美和が、服をかきあわせようとしたとき、その場に押し倒されてしまった。

11

「ダメッ！」
と叫んだ唇が彼の唇でふさがれ、野上が伸しかかって来た。
そうなってみると、はじめての相手ではないので、あとは、あっという間だった。

彼は、美和の軀を知りつくしていた。
十分後に彼は、起き上った。
「ごめんね。でも、うれしかったよ」
野上は、美和の髪をやさしくなぜた。
美和は、黙って服を着た。
「まだ、時間があるよ。ゆっくりしない？」
それは、もう一度愛し合いたいという意味だった。
「いえ、帰るわ。でも、愛してくれてて有難う」
美和は、そこからタクシーで、ホテルに帰った。
九時前だった。
美和はシャワーを浴び、下着をきかえて化粧をした。
後悔はなかった。
〈子供が出来たら、夫の子だと思うことにしよう〉
その日、遅く帰って来た中山は、疲れたといって、美和を抱こうとしなかった。
その翌日は、彼が抱こうとしたとき、間違い電話がかかって来て、タイミングを失い、中山は、ふるい立たなかった。
その次の日は、中山の仕事が出来て、愛し合うことは出来なかった。
とうとう中山とは最初の一日しか愛をかわすことは出来なかったが、美和は満足だった。旅行中もはかっていた基礎体温から考えて、最初の一日が、一番いい条件だったから、きっと、子供が出来たような気がしていたからである。
帰りの新幹線で、中山は、やさしかった。
「いつも、仕事が入ってごめんね。でも、旅行は楽しいから、また行こうよ」
「本当？　うれしい！」
美和は、急にいきいきして来た。
「どこがいいかな？　やっぱり、外国がいいなあ。仕事で邪魔されないで」
「でも、子供が出来てたら行けないわ」
美和が、はずかしそうにいった。

「だったらいいけどね」
名古屋をすぎると、中山は、椅子をたおして眠りはじめた。
美和は、窓の外を眺めていたが、心の中では、野上のことを考えていた。
〈子供が生まれたとき、どっちの子供かわからなくて困るんじゃないかしら？　でも、野上も中山と同じA型だからバレることはないわ〉
野上と会って、やはり、好きなのは、野上の方だと美和は思った。
しかし、子供が出来たら、その子供が、中山の財産も仕事も引きつぐのだと思うと、やはり、結婚してよかったという気もしてくる。
旅行から帰って二ヵ月あまりが過ぎた。
ある日、美和は、産婦人科病院に出かけた。妊娠をたしかめるためである。
期待感から、恥ずかしさも、前ほどではなかった。
診察を終えた医者は、
「おめでたです」
と、にっこりした。
美和の顔に血がのぼった。
どうして家に帰ったか、覚えがないくらいだった。
夫が帰宅するのを待ち兼ねて、美和は、報告した。
「あなた、出来たみたい」
〈この言葉をいうのをどれだけ夢みたことだろう〉
しかし、中山の反応は意外だった。
「本当か？　自分で思ってるだけじゃないのか？」
ときき、産婦人科へ行ったことをいっても、黙っている。
「どうしたの？　喜んでくださらないの」
美和は、さすがに不満そうにいった。
「……僕には子供は出来ないことがわかったんだ

よ。最近、もう一度見て貰ったんだけど」
中山は、苦虫を噛みつぶしたような顔で、かばんから診断書を出した。
「嘘よ。そしたらどうして私が妊娠するのォ」
美和は、必死でいった。そして診断書をちらっと見た。そこには、無精子という字が書いてあった。
「妊娠が本当なら、君は浮気したことになるね。相手は誰なんだ？　野上か？」
「え？」
美和の顔が蒼ざめた。
「君は、京都で、彼に会ってたじゃないか。大覚寺へ行った帰りに彼のマンションに行っただろう？　カーテンがあいていたのがミスだったな。北海道でも会っている」
彼は、かばんから、証拠の写真を出した。
「卑怯だわ」
美和は、激しく泣き出した。北海道で野上と歩いている写真や、彼のマンションで裸でからみ合っている写真があった。
「離婚しないと仕方がないな」
中山は、冷たくいい放った。

12

その日から、中山は、帰って来なかった。
美和は、まる二日、食事もせずに泣きあかしたが、落着いて考えると、おかしいことが色々あるのに気がついた。
〈彼は、離婚の口実をみつけるために、私と野上を接近させたのではないだろうか？〉
まず、野上が、北海道に出張中に合わして北海道へ旅行したこと。そして、朝食の時、二人が出会ったあと、中山は、東京へ帰ってしまった。
そして、彼のいる京都への旅行である。
〈それよりも、北海道で、隣室の田畑ルリ子が殺されたのは、中山と関係ないのだろうか？〉

もし、あのとき、空調設備の故障で、二時間も直して貰ってなければ、美和にアリバイはなかったわけである。

ルリ子を、夫の愛人と知っていた隣室の美和が殺したと考えられても仕方がなかったのである。

〈夫は、北海道へ行ったとき、私を殺人容疑者にするか、野上と不倫させて、それを口実に離婚しようと思ったのではないだろうか？〉

しかし、殺人にはアリバイがあったし、妊娠はしなかった。

それで、京都旅行を企画したのだ。

ここまで考えて、美和は、はたと考え込んだ。

夫も、北海道のときにはアリバイがあるのである。

〈一体、誰があの女性を殺したのだろう？　それとも、彼女は、自殺したのだろうか？〉

どっちにしても、自分が野上と浮気したのは事実だし、その子をみごもったのなら、夫に離婚されても仕方がないことだと、最後には、美和は、納得した。

これから先、子供も生めず、愛もない結婚生活を続けても仕方がないし、第一、中山も続けようとしないだろう。

〈それなら、離婚して、野上と結婚しよう〉

やっと、心がきまったので、ある夜、美和は、野上に電話した。

しかし、野上は、なぜかよそよそしかった。

「あ、君か。元気？」

「あの、ご相談したいことがあるの。実は、私、今度、離婚することにしたの」

「えっ、どうして？」

「京都で、あなたと会ったことがわかってしまったの。私も、夫よりあなたを愛していることがわかったし……」

「困ったなあ。実は、僕は、結婚することがきまったんだ。あれから何の音沙汰もないし、君は、人妻だし……。年があけたら式をあげることにきまってる」

「えっ、本当？　相手はこの間云ってた人？」
美和には、ピンと来るものがあった。
「ああ。近所で、よく食事を作ってくれたりやさしくしてくれてね。だから、残念だけど、君とのことは終りにしたいんだ」
美和は、目の前がまっ暗になった。
確かに、夫に離婚されたからといって、すぐに彼と結婚したいというのは虫がよすぎる。最初裏切ったのは自分だし、それから四年もすぎている。この間からだって、二ヵ月もほっておいて、身勝手なことはわかっていたが、今は、彼しかなかった。
電話を切りそうになったので、美和は、あわてていった。
「あの、私、赤ん坊が出来たの。あの時の子供よ。あなたの子供なの」
「えっ、そんな……」
さすがに、彼は、びっくりして、絶句した。
「でも、あの時、といったって、君は旦那さんと一緒だったじゃないか。ご主人の子供じゃないのォ」
「それが、中山には、軀に欠陥があって、子供は出来ないことがわかったの」
「……」
野上の困惑している様子がわかった。
「でも、君も、大人なんだから、何とか始末してくれないかな。そんなややこしい子供じゃ僕だって信じられないし、第一、君とは結婚できないんだから」
おとなしい野上が、はっきりといった。
「イヤよ。あなたの彼女に云うわ。いいの」
自分でイヤな女だと思いながらも、美和は必死だった。
「ちょっと待ってくれよ。今から、彼女が来るんだ。長話は出来ない。こっちはもう、式場まできまってるんだから、あきらめてくれよ。じゃ、一旦、切るよ」
電話は、むこうから切れた。

美和は、電話の前で、ぼんやりとしていた。

13

どの位時間が経ったかわからなかったが、美和は、電話のベルで我にかえった。

〈野上さんだわ〉

と、受話器をとると、それは、麻沙代だった。

「どう、元気？　赤ちゃんはまだ？」

「出来たわ」

「えっ、本当？　それはおめでとう」

「でも、それがおめでたくないの。彼は、子供が出来ない軀だというの」

「えっ、じゃあ、あなた浮気したのね」

「……」

「その相手と結婚したらいいのに」

「そういうわけには……。私、離婚したくないの」

「でも、仕方がないんじゃない。子供の出来ない夫にとって、ただの浮気ならとにかく、子供が出来るなんて、これ以上ない裏切りじゃないの」

麻沙代の言葉は激しかった。

話しているうちに、美和は、なんとなく異和感を感じた。そして、電話を切ったとき、それが何かに気がついた。

〈まさか、夫と麻沙代が……〉

美和は、ショックを受けた。

麻沙代は、赤ん坊が出来たことに、それほど驚いた様子もなく、夫の軀に欠陥があるときいた時も平気だった。

普通なら、もう一度調べた方がいいとか、本当かどうかわからないじゃないのというはずである。

それに、美和が浮気したとも、きめ込んでいる。

ルリ子を殺したのは、麻沙代ではないかと疑惑がわいた。

〈そういえば、夫が浮気していると教えてくれたのも彼女だった。もし、彼女が教えてくれなければ、

北海道で隣りの部屋で死んだのも、自分に関係ない人だと思うところだったのだ〉

中山には、しっかりしたアリバイを作っておいて、麻沙代が隣室の女性を殺す。二人の考えでは、その夜、美和は、野上と一緒か、一人で部屋にいて、アリバイがたたないと思ったのではないだろうか？

二人は、中山の結婚後、愛人同士になり、結婚したいと思うようになった。しかし、美和に何の落度もなく離婚したら、莫大な財産の分与をしないといけない。

それで、美和に、浮気をさせて、それを口実に、離婚しようと考えたのだ。

それに、ダメ押しとして、ルリ子を殺し、殺人の罪まできせようとしたのだ。

北海道ではうまくいかなかったが、京都では、その罠に、うまうまとはまってしまったのだ。

そういえば、京都旅行中に麻沙代から電話がかかってきた。彼女は公衆電話から十円硬貨でかけているといったが、十円玉でかけられる時間があんなに長いはずがない。本当は東京からでなく、あの時も彼女は京都に来ていたのではないだろうか。

中山は、最初から子供が出来ない軀であることを知っていたのに違いない。

美和は、カーッと頭が熱くなった。

今回のことは、離婚されても仕方がないことだったが、罠にはめられたと思うとくやしかった。まして、親友の麻沙代と夫が共謀したのなら、よけい許せなかった。

〈本当に夫と彼女が恋人同士か調べてみよう〉

美和は、へそくりを出して興信所に、夫と麻沙代のことを調べてくれるようにたのんだ。夫の中山は、自分の持っているビルには、必ず、一つ自室を持っている。

その一つにいるはずだった。

最初の一週間、中山は、仕事以外は、飲みにも行

かず、女とも会ってなかった。
「女性の方にも、調査員をつけて、二本立てでやってみましょうか？　お金は高くつきますが」
といわれ、美和は承知した。
中山の方も、充分注意しているようだった。それから一週間後、やっと、二人が中山のビルの一つで朝まで一緒だったことが、わかった。
〈これを突きつけて、離婚をとり消すように云おうか〉
と、考えたが、裁判しても結局、離婚になると考え、美和は、考え込んだ。
〈子供を堕して、妊娠したというのは間違いだったと云おうか〉
と思ったが、野上との不倫の写真をとられている以上、妊娠してなくても、離婚はさけられそうになかった。
〈妊娠さえしてなければ、写真で不倫の証拠があっても、むこうも不倫してるのだから、離婚でも財産分与して貰えるのではないか〉
と考えたが、それだけでは空しい気がする。世間では、不倫の結果離婚された女として、軽蔑するに違いないし、お腹の子供も可哀そうだった。
長い間、赤ん坊が欲しいと思いこみすぎていただけに、折角出来た子供を殺してしまう決心がつかなかった。
〈いいわ。離婚を承知して、子供を生んで一人で育てよう〉
そう思ったが、なにもなしに放り出されて、子供を育てることを考えると、夜もねむれなかった。

14

そんなある日、興信所の方から、二人が、京都へ行く話をしていたという情報が入った。
〈よりにもよって、私たちが、受胎旅行に行った京都に行くなんて〉

美和は、口惜しくて涙が出た。
二人にとっては、婚約旅行か、婚前旅行のつもりで行くのだろうと思うと、おとなしく離婚に応じる気はなくなっていた。
〈二人を殺してやる！〉
美和は、ずっと一人で、マンションの部屋に閉じこもっていたので、精神的に思いつめていた。
京都で二人を心中のような形で殺し、自分はアリバイを作ろうと思った。
そうすれば、生まれる子供は、夫の子供として入籍することが出来る。
〈そうだわ。子供のためにも、そうするべきだわ〉
美和も、早速、京都へ行く用意をし、アリバイ工作のために、一旦、北海道へ行くことにした。
机の上には、

一人で留守番をしているのに耐えられなくなりました。
北海道へ旅行してきます。
美和

と、書き残した。
そして、留守番電話に、北海道へ一週間程行くと吹き込んだ。
最近、間違い電話や無言の電話がかかるようになっていた。多分、夫や麻沙代がさぐりの電話を入れているのだろう。だから、北海道へ行ったと知れば、安心して京都に行くだろうと思った。
美和は、興信所の調査を打ち切り、北海道へ発った。
多分、中山がたのんだ興信所が、美和を尾行していると思ったので、トランクの中には、たくさんの服と変装用の小道具を入れた。
そして、札幌へ着き、その足で、列車に乗った。襟裳岬へ行く方法を駅員にきいたので、多分、尾行者はそのつもりで列車に乗ってくるだろうと思った。

列車に乗ると、しばらく腰をおろしてから、手洗いに立ち、服装と髪と眼鏡で変装して、二つ目の駅でおりて、千歳へ引きかえし、飛行機に乗って、もう一度、変装してから、大阪空港へついた。そして、京都へむかった。

中山たちが泊っているのは、駅前のホテルだとわかっていたので、美和も偽名でホテルに泊った。もちろん、変装している。

ロビーで本を読みながら一時間ほど待っていると、二人が手をつないでエレベーターからおりて来た。

〈京都なので安心してるんだわ〉

麻沙代は、大きな黒いサングラスをかけ、ブランドの赤いスーツを着ていた。

二人を尾けていくと、中山は、京都市内でこの間、美和と入った京料理の店に彼女をつれて入った。

翌朝、美和は、百貨店で、麻沙代と同じ服と、黒いサングラスを買い求めた。

そして、中山と麻沙代がフロントで鍵をあずけて出たあと、しばらくして、フロントへ行って、部屋番号をいって鍵を受けとった。

〈うまくいったわ〉

フロント係は、同じ服装の若い娘なので、何とも思わず、鍵をわたしてくれた。

美和は、その鍵で、二人の部屋に入った。

掃除が終ったあととみえて、部屋の中は、整然としていたが、麻沙代の服や、かばんと一緒に、中山の服もあった。

美和は、胸がしめつけられるように痛んだ。いつもは、ここに自分がいたのだ。

テーブルの上には、ルームサービスでとったらしいコーヒーポットと、コーヒー茶碗があった。

美和は、コーヒーカップの口のあたる部分の外に青酸の粉末を塗った。

二人とも右ききなので、右で耳を持ち、口をあて

ると思われる場所はきまっていた。
それから、念のため、自分の部屋から持って来た毒入りの砂糖を、コーヒー皿にあるのと取りかえた。
そして、外へ出て、鍵をフロントに返すと、自分の部屋に戻り、服を着かえてチェックアウトした。
すぐに、大阪空港へ行き、東京まで乗った。羽田空港から、再び、北海道へとび、その夜、一泊して、東京へ、早朝に、本名で帰っていった。

15

京都で、中山が死んだのをきいたのは、帰ってすぐだった。
玄関に入ると、電話が鳴っていて、出ると、京都府警の狩矢という警部からだった。
「ご主人の中山さんが、京都市内のホテルで、亡くなりました。死亡されたのは、昨日の夕方です。奥さんですか？」
「はい。でも、主人は、東京にいるはずですが、間違いないんでしょうか？」
美和は、わざと怒ったようにいった。
「間違いないと思います。お持ちになっていた自動車の免許証と、顔が合っておりますから」
「そんな……」
美和は、激しく泣いてみせた。
相手は、困ったような様子だったが、とにかく、すぐ、京都へ来るようにといって、電話を切った。
美和は、中山の会社に電話をし、専務や取締役と一緒に京都にとんだ。
すでに死体は、所轄署にはこばれていて、美和は、白布でおおわれた夫の遺体と対面した。
美和の気になっていたのは、一緒だった麻沙代が死んだのかどうかということだった。
「あの、夫は、どうして京都のホテルに泊っていたのでしょうか。私には、京都に行くとはいわなかっ

たんですけど」
涙の対面がすんだあと、美和は、さぐりを入れてみた。
「奥さん、まことに云いにくいことですが、ご主人は、ある女性の方とご一緒にお泊りになっていたんですよ」
「えっ、女性というと愛人ですか？」
美和は驚いてみせた。
「そうです。水木麻沙代という人を知りませんか？」
「麻沙代さん？　私の親友ですわ。彼女と一緒だったんですか？」
「そうです。二人は愛人関係にあったようです。気がつきませんでしたか？」
「知りませんでした。彼女には、なんでも話し、信頼していました。……それで、二人は心中でもしたんですか？」
美和は、顔をあげた。
「いいえ、女性の方は助かっています」
「えっ」
思わず美和の顔色がかわった。
「じゃあ、彼女が殺したんですか？」
美和は、内心まずいことになったと思った。彼女にすべてを喋られたら、自分は破滅する。
「今、警察で色々調べています。丁度、その時間に、ルームサービスが果物を届けたのです。中山さんと、その女性は、コーヒーを飲もうとしていたところですが、女性の方が、サインする伝票を受けとったので、飲まなかったのです。ですから、中山さんは、そのまま、コーヒーを飲んで絶命し、女性は、呆然としていたそうです。毒物は、砂糖の中と、カップのふちに塗ってありました。自殺するなら、そういう方法はとらないだろうし、他殺の線で、女性をとり調べております」
「麻沙代さんが……」
美和は、呟やいた。本当は、そのあとに、——死

ななかったのは誤算だった——とつけたかったが、刑事は、「麻沙代さんが、犯人とは」という意味にとったようだった。

二日後、美和は、夫の遺体をのせた寝台車に同乗して東京の家に帰った。

遺体の検死と解剖が行われた二日間、美和も調べられたが、中山の亡くなった日、北海道の札幌のホテルに泊っていたことがわかり、翌日の朝の千歳発、東京行の飛行機に乗っていたことも証明されたので、容疑者にされずにすんだ。

葬儀は盛大だった。

今さらながら美和は、夫の事業の手広さと、顔の広さに驚き、妻の座を失わなくてよかったと思った。

遺産は、美和に子供が出来ていることもわかり、すべて、彼女のものになった。

美和は、信じられないような幸せに、夢うつつで過していた。

会社といっても、中山の個人会社のようなものだったから、みんなが彼女の機嫌をとり、彼女が絶対の権力を握るようになった。

時々かすめるのは、警察で調べられている麻沙代が、子供のことを云わないかということだった。

彼女が、美和が浮気をしていたことや、子供が、中山の子でないことを云ったら、たちまち、今の地位はなくなってしまうわけである。それだけでなく、夫婦の間が、それだけ険悪だったとわかったら、殺人の容疑もかけられるに違いなかった。

しかし、不思議に、彼女は、そのことを云わず、警察もたずねてこなかった。

やがて、彼女は、証拠不充分ということで、不起訴になったというのをきいた。

夫が死んだ翌年の七月、美和は、男の子を出産した。美和は、和彦と名前をつけて溺愛した。

16

子供が五ヵ月になったとき、突然、麻沙代が訪ねて来た。
夫が死んで約一年たっていた。
「お久しぶりね。美和さん」
玄関のドアをあけたとき、入って来た麻沙代は、にこやかにいった。
「あら、麻沙代」
美和は、どきっとしたが、さりげなくいった。
お手伝いの手前、変なことを云われたくなかったので、美和は、彼女を応接間に入れた。二人の女は、むかい合った。
「私、あなたが、夫の愛人だとは知らなかったわ」
美和は、精一杯の怒りをそう表現した。
「知ったのはいつ？」
麻沙代が、うす笑いを浮かべながらいった。
「中山が死んだときいて、京都へかけつけた時よ」
「嘘おっしゃい。あなたは、私と中山さんの二人を殺そうとしたのよ」
「ひどいこと云わないで。殺したのはあなたよ。あなたがそばにいたんでしょう？」
「でも、警察では、私とおなじ服装をした女性が、ホテルで鍵を受けとって、部屋にはいったことを確認したのよ。その時間に、私と中山は、ビルを建てる土地のことで人に会っていたから、私でないことは確かよ。百貨店で、その服を買った人がいることもわかっているわ。それから、警察が、私を起訴しなかった理由が、もう一つあるの」
麻沙代は、じっと美和をみつめた。
「毒の入った砂糖は、ホテルのルームサービスでついてくるもので、袋にホテル名が書いてあったけど、私たちのお砂糖とはちがってたわ。私たちは、シュガーレスのお砂糖を持ってくるように、ルームサービスにたのんだのよ」
美和は、あっと思った。
ルームサービスのメニューのところに、

シュガーレスのお砂糖を御希望の方は、注文のとき、そのようにお申しつけ下さい

と書いてあったのを思い出したのだ。

「だから、残っていたお砂糖と、中山が飲んだお砂糖を調べて、それが、シュガーレスでないことがわかったの。私が、細工するのなら、そんなことはしないし、カップのふちに毒を塗るようなこともしないわ。それに、ルームサービスの人が来たとき、目の前で殺すようなことはしないわ。知っていれば、彼がコーヒーを飲むのをとめることも出来たわ」

彼女は、勝ち誇ったようにいった。

「それから私、釈放されてから、航空会社を調べて、当日の偽名の搭乗者を調べたわ。だから、あなたが、一旦、東京から北海道へ行き、すぐに大阪空港へ戻って京都のホテルへ入り、翌日、また、北海道へ戻ったのだと確信したわ。それに、北海道で、あなたが泊ったホテルは、最後の札幌のホテルだけで、あとは、どこの宿にも、あなたの名前はないわ。これだけ調べるのに、私は何ヵ月もついやしたのよ。それにもう一つ」

美和は、不安で、麻沙代の顔をみつめることが出来なかった。麻沙代は続けた。

「あなたは、興信所を使って、私たちのこと調べていたでしょう？　だから、私たちが、京都へ行くことは、当然知っていたはずだわ。あなたは、自分が北海道へ行く前で、私たちの調査を打切るようにいったそうだけど、調査員は、すでに、京都にいってしまっていて連絡がつかず、そのあとも、私たちのこと見張っていたのよ。だから、色々なことがわかったわ」

「そのことを警察にいったんですか？」

美和がきいた。

「いいえ。いわないわ。それから、あなたの子供が、中山さんの子供でなくて、野上というあなたの昔の恋人の子供であることも、私は、警察ではいわ

なかったわ。中山に子供が出来ないことは、私も知っていたし、検査の時には、私もついて行ったんですもの」

「どうしていわなかったんですか？」

蒼ざめた顔で、美和がいった。それが、不思議でたまらなかったのだ。

「私は釈放される見込みがあったから、いわなかったのよ。私が釈放され、あなたが犯人として捕っても、私には、何の利益もないわ。それより、黙っていて、あなたと、あなたの子供に財産を相続させて、それを少しずつ頂きたいと思ったの」

「えっ」

「だって、あなたは、離婚され、私が、彼の正妻になる筈だったのよ。何もかもあなたが独り占めするなんて許せないわ。そうでしょう？」

麻沙代は、美和をみつめた。

押され気味だった美和は、そのとき、あることを思いついて反撃した。

「あなただって、そんなに強く出られない筈よ。私と中山が、北海道へ受胎旅行に出かけた時、隣りの部屋で、田畑ルリ子という女性が死んだわ。あれは、あなたが殺したんだわ。中山には、アリバイがあったけど、あなたにはなかった筈よ」

しかし、麻沙代は、蒼ざめるどころか、笑い出した。

「どこに証拠があるの。あの日、私のところに、警察から問い合わせがあったのは、午後二時だったわ。そのとき、私は、ちゃんと、電話口に出たし、私がアリバイのないようなことをすると思う？　私を訴えれば、私も、あなたのこと、今度こそ、洗いざらい云うわ。いいの？」

美和は沈黙した。

17

結局、美和は、麻沙代の言いなりになるしかな

かった。

麻沙代は、ワープロで打った紙を出した。

それは、中山の遺言状になっていて、自分の死後は麻沙代を、自分の会社の副社長にするという意味のことが書いてあった。サインもある。

「この通りにして欲しいの。でも、会社を乗っとろうというのじゃないわ。月給は百五十万円でいいわ。あなただって、内緒で私に百五十万円ものお金を月々渡すのはたいへんでしょう？　あなたは、こういう遺書が出て来たといって、私を副社長にするのよ。それだけでいいわ。私は、あなたの秘密を一生口にしないわ。そして、あなたの子供が二十歳になったら、息子さんに副社長をゆずるわ。一筆書いてもいいわ。どう？　いい条件でしょう。二十年間で、私は、合法的に三億六千万円頂くことになるけど、あなたの財産は、何百億いや、もっと多いのかしら？」

美和は、考え込んだ。

今は、彼女のいう通りにするより仕方がなかった。すべての財産をゆずれとか、ビルの半分をというのだったら、人も不審に思うし、税金もかかるだろう。

〈彼女らしい賢明な方法だわ〉

遺言というのは、中山が書いたものでないことは、すぐわかった。中山は、手紙をワープロで打たせるときなど、白紙に先にサインして渡していたから、その一枚に、あとから文字を打ったのだろう。印鑑も実印ではないから、裁判をしても勝てないだろうが、美和が承知すれば、通るのである。

「いいわ。条件をのむわ。どっちにしろあなたは、中山の愛人だったわけだから、財産の少しをお渡しても構わないわ」

美和は、頭の中でめまぐるしく計算してからいった。

「でも、名義だけの副社長よ。実印は渡さないわ。それでいい？」

「いいわ。私は、会社を乗っとろうと思わないし、月給だけ貰えればいいんだから」
二人の話合いは、スムーズにすんだ。
それから一年、美和は、彼女に、月給を払った。彼女は、おとなしく月給を受けとり、会社のために働いていた。
ある日、子供を連れて、百貨店に行った美和は、野上と再会した。
思わず、顔をそむけたが、彼の方は、じっと子供をみつめている。子供も、彼の顔を見て、にっこりした。
「抱かせてくれませんか？」
野上が、沈んだ声でいった。
「……」
「一度だけでいいのです」
美和はうなずいた。実の親子なのだから、彼が、子供に愛着を感じるのは当然だと思ったし、うれしい気持もあった。
子供は、喜んで抱かれた。
それがきっかけで、野上は、時々、子供に会いに来るようになった。
彼は、結婚したが半年で離婚したという。
「罰があたったみたいだね。彼女は、独身時代、何度も子供を堕していて、子供の出来ない軀になっていたんだ。子供が出来ないとなると、空しくてね。色々あって別れた」
と彼はいった。
次第に美和は、彼にひかれていった。変なうわさが立ったり、財産めあての男にだまされたりしてはいけないと思って、中山の死後、一度も男性と接触はなかった。まだ若く、子供を生んだあとの美和は、夜など狂おしいほど辛いときがあった。
〈彼は、この子の父親なんだわ。彼と結婚すれば、一番自然なんだわ〉
と思うようになった。
今は独身だし、財産もある。彼の子供もいる。だ

から、野上に云えば承知してくれるのではないかと思ったが、野上はなかなかそういう話はしなかった。彼の関心は、専ら子供のようだった。

しかし、ついに、彼が結婚を申し込んでくれる日が来た。

大よろこびで、結婚を承諾しながら、心のすみでは、麻沙代がどういうか心配だった。

〈彼女が反対したら、結婚できない〉

しかし、おそるおそる相談すると、彼女は、しばらく考えた末、賛成してくれた。

「私も、あなたが誰と結婚するか気になっていたの。何も関係のない男性があなたと結婚して、私を副社長の座からおろしたら困ると思って。野上さんだったらいいわ。彼には、子供が中山さんの子供でないことを、私が黙っている口どめ料だといって、今まで通りの給料をくれるようにいってね」

それをきいて、美和は、ほっとした。

18

野上と美和の結婚式は、盛大に行われた。

美和は、幸せの絶頂にいた。

本当の親子三人水いらずで生活でき、財産は使い切れない程あるのだ。

ビルの事業の方は、あまり拡張せず、堅実に経営しているので順調だった。

麻沙代も、よく協力してくれて、今では、美和の片腕となっていた。

「あなた、結婚はしないの？」

美和がきくと、麻沙代は、

「私、好きな人が出来たの。京都にいるんだけど、一度会ってくれる？」

と、珍しくはにかみながらいった。

子供が二歳の春、美和と野上は、子供を連れて京都に出かけた。麻沙代も一緒だった。ホテルに

チェックインし、部屋にはいったとき、
「それで本当に結婚するの？」
美和は鷹揚にきいた。
「ええ。私、妊娠もしたみたいだし」
麻沙代は、うれしそうにいった。
「では、結婚式の費用は、私が全部出すわ。それから、お給料もあげて二百万円にするわ」
「本当？　うれしいっ。お願い！　それ、念のため、書類にかいて下さいます？」
「いいわ。ねえ、あなた」
美和は、野上に甘えた声でいった。
子供の相手になっていた野上は、
「ああ」
と、だけいって、子供を抱き上げた。
最近、美和もワープロが得意になっていて、旅行先へも、ワープロを持って来ていた。
それで、気軽に、その場でワープロを打ちはじめた。
ルームサービスのボーイがコーヒーとジュースを持ってきて彼女にサインを求め、美和は、ワープロの手をとめて、サインした。
書き終ると、美和は書類にサインし、封筒に入れて麻沙代に渡した。
「有難うございます」
と、彼女はおしいただいた。
そのあと、みんなは、円山公園に桜を見に行くことになっていたが、美和は眠くなったから、三人で行って欲しいといい、ベッドに入った。
三人は、タクシーをチャーターして、円山公園に出かけて行った。
二時間ほど眠って美和は、目をさました。
まだ、ねむかったが、そろそろみんなが帰って来るころだと思ったので起きて顔を洗い、化粧をして、ルームサービスのコーヒーを飲んだ。
苦かったが、砂糖を入れなかったせいだろうと思い、砂糖をとろうとしたそのとき、「うっ」といっ

て、彼女は、椅子からころがり落ちた。胸をかきむしり、のたうちまわったあと、彼女は、誰もいない室内で、こと切れた。

それから、一時間後、三人が帰って来た。鍵は、室内においてあったので、麻沙代がチャイムを鳴らした。荷物を運んできたタクシーの運転手が、戸を叩いたが何の応答もない。とおりかかったルーム係の女性に事情を話してドアをあけてもらったとき、床で長くのびたまま、息絶えている美和の姿が目に入った。

「大変だわ！　警察を呼んで！」

麻沙代が叫び、ルーム係がとんで行った。

パトカーが到着し、死体を検死していたとき、狩矢警部は、テーブルの上にあった遺書を見つけた。

それには、ワープロで、

麻沙代さん、結婚おめでとう。あなたには大変お世話になったので、来月から給料を二百万にし、結婚式の費用をもたせてもらいます。

どうか仲良くして下さい。

あなたが、私が中山を殺したことを黙っていて下さったご厚意に感謝します。

方法は、あなたが指摘した通りです。

このホテルで、彼と同じ死に方をして彼に詫びたいと思います。私は、やっぱり、彼を愛してました。

子供のことだけはよろしくね。

昭和六十二年四月×日

野　上　美　和

麻沙代さんへ

追伸

二郎さん、許して下さい。中山のもとにまいります。さようなら。

と、あった。

本人のサインがあったし、それは、ルームサービスに彼女がしたサインと一致した。
また、ルームサービスのボーイの証言で、その文面は、彼女が書きかけていたものと同じだとわかった。
外出していた野上や麻沙代には、ずっとタクシーの運転手がつきそっていて、アリバイはあった。
死亡時刻も、彼等が出かけてから二時間後で、他殺の疑いはなかった。
事件は、自殺として処理された。

19

東京へ引揚げた野上と麻沙代は、子供が眠ったあと、ダイニングでワインを飲んでいた。
「うまくいったわ。これで、私は、あなたと結婚できるわ。あなたに、彼女と結婚するようにそそのかしたのは、私だけど、二人が仲良くしているのをみるのは辛かったわ」
「僕だって、彼女には、一度裏切られてから愛はなかったから、大変だったんだよ。でも、これだけの財産が手に入るとなると、やっぱり魅力だったよ。でも、うまくあの紙に、ワープロで書き込んだね」
「私の給料をあげることと、結婚式の費用を持つという文章のあと空白がいっぱいあったから、彼女の自殺の動機を書くことが出来たわ。警察でも、彼女の夫が死んだ事件で、彼女を疑っていたから、すんなり通ったんだわ。彼女が殺したのは本当だもの」
「でも怖い女だね。ところで、子供だけど、本当に僕の子供じゃないんだね。それをきいたときにはびっくりしたよ」
野上がいった。麻沙代がうなずいた。
「中山に子供が出来ないというのは嘘だったの。私が、知り合いの医者にたのんで診断書を書いて貰ったのよ。悪いホステスから子供が出来たといっておどかされているから、子供は出来ないという証明書

を書いてやってって。中山は、何も知らずにそれを信用していたわ。でも、どっちの子供だったのかはわからなかったので、子供が生まれてから、私が秘かに別の医者に鑑定して貰ったの。中山の子だったわ」

「それを知りながら、あの子を可愛がるふりをするのは辛かったよ。ところで、今度こそ、僕の本当の子供が君のお腹に出来たんだね？」

「そうよ。この子が、私たちの後つぎになるのよ」

「でも、中山の子供がいるじゃないか」

「フフフ。まかせておいて。一年後には、彼は死ぬわ」

「君も怖い女だね」

「仕方がないわ。そのおかげで、こうして幸せになれたんだから」

「結婚式は、少しのばした方がいいね。疑われると困るから」

「でも、子供が生まれてからでは困るわ。半年後ではどうかしら？」

「お腹が大きすぎるよ。君だってきれいな花嫁姿の写真残したいだろう？　出産してすっきりしたところで、式をあげよう」

「そうね、それがいいわ」

半年後、野上の留守に、病院まで運転して行こうとした麻沙代は、自動車ごと、崖から落ちて死亡した。

もちろん、お腹の子供も死亡した。

事故の原因を警察が調べたが、車が炎上してしまっていたので、わからずじまいだった。

それから一年後、野上は、莫大な財産を持つ事業家として、結婚式をあげた。

相手は、最初の妻で、ミス・着物の女性だった。

「長かったわ。でも、あなたを信じていてよかったわ。早く、子供が欲しいわ。受胎旅行したいわね」

妻は、うっとりと、彼によりそった。

京都見合旅行殺人事件

1

桜田由紀子は、寝る前に、もう一度パンフレットを出して見た。

それは、大手の旅行会社が年末から年始にかけて募集した旅行の案内なのだが、今までと変った企画があった。

京都見合旅行募集

資格　二十歳から三十五歳までの独身男女

人数　男女十人ずつ

日程　十二月三十一日東京発ひかりで、京都へ三泊四日の旅

八坂神社のおけらまいり。平安神宮初詣で。その他、京都の名所旧蹟見学

京風おせち、雑煮、京料理を食べて、独身男女の親睦を深める

費用　九万八千円

九万八千円あれば、シーズン外なら、グアムか韓国あたりへ旅行出来る金額である。

しかし、夏に大きな航空事故があって、航空機を使う海外旅行熱は、少しさめかけていた。

それに、何より独身男女ばかりの見合旅行というのが魅力で、由紀子は行ってみる気になっていた。

由紀子は、二十六歳のＯＬで、結婚にあこがれていた。

国鉄がフルムーン旅行を売り出したように、旅行社も、見合旅行というロマンチックなキャッチフレ

ーズで客を呼び、うまくいけばこの旅行で結ばれた男女の新婚旅行まで引き受けようという狙いだった。

由紀子に、この旅行のことを教えてくれたのは、同じビルの製薬会社に勤めている三原マリである。彼女とは、ビルの近くにある喫茶店や食堂でよく会って友だちになっていた。

「ねえ。この旅行に行かない？　いい男が見つからなくても、もともとだわ。だって、奥さんのある人と恋をしているものにとって、お正月ほどつまらないものはないわ。彼は、家庭に帰ってしまって、こっちは一人ぼっちよ。去年のお正月に、神社に初詣でに行ったら、彼が奥さんと子供連れで来てたのよ。子供と奥さんの写真を撮ったりしていて、あんなショックなことはなかったわ」

マリは、口惜しそうにいった。

彼女は、妻子のある男と不倫の関係にあるのだということを、由紀子はきいて知っていた。

由紀子も、ため息をついた。

「そうね。私も一人ぼっちで退屈だから行くわ。本当に独身の男性が十人も行くのだったら、普通のツアーより、スリルがあって楽しいわ」

由紀子は、目的が出来ると、冬休みが待遠しくなった。

この秋に、大学の同級生が二人、結婚式をあげ、節分にも、一人挙式することになっていて、さすがに、由紀子もあせっていた。

十二月三十一日の朝、九時に東京駅に集ったのは、広告通りの男十人、女十人だった。

マリが、由紀子のそばにやって来て云った。

「意外だったわ。私、大抵の国内ツアーは定員切れになるってきいてたから、取りやめになるか、参加者は少いと思ってたの」

「私もよ、少くとも、男性は少いと思ってたわ」

由紀子も、上気した顔でいった。

「でも、男性全員が独身とは限らないわ。独身女性

が集るときいて、面白半分でやって来た人も多いんじゃないかしら」
「いいわよ、何でも。三泊四日の間楽しければ」
「そうね、どうせ同じツアーなら、家族連れや、おじさん、おばさんと一緒の旅じゃない方がいいものね」
マリが、華やかな笑い声をあげた。

2

九時四十二分、ひかり号は、静かにホームを離れた。
席順は、男女別に、添乗員が、ホームで、くじ引きできめた。
由紀子の席の隣りには、田村次郎という二十七、八歳の男性が座り、その前の席にも、男女二人がきまった。
田村というのは、彫りの深い知的な感じの男だった。やさしそうである。
〈ツイてるわ〉
由紀子は、うれしくて、マリの席を探した。マリは、少し離れた席の窓際で、もう、隣りの男性と話し込んでいる。
荷物を網棚にあげ座り直したときだった。
「あの……、三時間二人っきりというのも、緊張しますから、この席ひっくり返してむき合ってもいいでしょうか？」
と、前の席の女性がいった。少し冷たい感じがするが、きわ立った美しさの女性で、集った時から目立っていた。
「ええ。いいですけど、あなたは？」
田村が、由紀子にきいた。
由紀子は、田村としばらく二人で喋りたいと思っていたが、仕方なくうなずいた。
「では、失礼します」
むき合った男性を見て、由紀子は、思わず笑いそ

うになった。それほど、その男性は、三枚目だった。

目が細くて、だんご鼻で、その上太っている。

〈前の女性が、むきを変えた理由がわかったわ〉

と、思った。しかし、その男は、愛嬌のある感じで、にこにこ笑いながら、

「原田です。よろしゅう」

と、挨拶した。

「石野麻代です」

女性も、自己紹介した。

由紀子たちも、名前を名乗ったが、すぐには話題もない。すると、原田が、

「京都は寒いでしょうねえ」

と、誰にともなくいった。

「いっそ雪が降れば、神社仏閣などきれいでしょうね」

田村が、仕方なくいった。なんとなく白けたムードがただよった。まわりの席では、誰も席をひっくり返さず、楽しそうに話している。

〈四人だとかえって緊張するわ。この女の人って勝手だわ〉

由紀子が思っていると、原田が、バッグから、トランプを出した。

「トランプでもしますか？」

「ええ」

由紀子は、ほっとしていった。

麻代は、面白くもなさそうな顔をしているが反対はしなかった。

それでもトランプをしているうちに、少しずつ、和やかなムードになって来た。

原田の気のいいこともわかって来た。

「原田さん、本当に独身？」

由紀子は、カードを切りながらいった。本当は、田村にききたかったが、彼にはききにくかったので、原田にきいたのだ。

「もちろん独身ですよ。でないと、この年末に旅行

なんかに来ませんよ。ねえ、田村さん」
原田にいわれて田村は、
「そうですよ。第一、結婚してて一人で旅行に出たりしたら、奥さんが怒るんじゃないですか」
と、いった。
「でも、田村さんには、恋人がいるんでしょう？」
今まであんまり喋らなかった麻代が田村にいった。
「え？　どうして」
田村は、びっくりしたように顔をあげた。
由紀子も思わずカードを繰る手をとめた。
「カンでわかるの。それに私、占いもするのよ。田村さん、占ってあげましょうか？」
麻代は、そういうと、由紀子からトランプをとり、原田のトランクの上に並べはじめた。由紀子は、
〈何よ。折角みんなで楽しく遊んでいるのに〉
と思ったが、それでも、田村の占いがどう出るかと気になってのぞき込んだ。
麻代は、もったいをつけて、田村に、過去に死ぬような恋をしたことがあるでしょうだとか、今の恋はやめた方がいい等、いったあと、急に、「あっ」といった。
「どうしたんですか？　何が出てるんですか？」
さすがに、田村が不安そうにいった。
麻代は、しばらく考えてから、
「気をつけないと、死のカードが出てますわ」
と、いった。
「えっ、そんな……。縁起の悪いこと云わないで下さい。折角、楽しい旅行をしようとしているのに」
田村がいった。
由紀子も、本当に嫌なことを云う人だと思った。
「でも、それから逃れる方法はあります」
麻代がいうと、田村は、
「どうしたらいいんですか？　このまま旅行をやめて帰れっていうんじゃないでしょうね？」

と、きいた。
「いいえ。そんなことをすると、かえって危険です。あなたは、乙女座の人と一緒に行動したらいいんです。乙女座が、あなたの災難を代ってくれます」
「どーしたの？　乙女座って。あ、占いやってるの？」
その時、そばを通りかかったのは、目の大きい女性だった。
「私、乙女座よ。それがどうかしたの？」
「この田村さんが、今度の旅行中、乙女座の人と一緒に行動したら、運勢がラッキーになるんだそうです」
麻代が説明するより早く、原田がいった。
〈原田さんというのは、暖かい人だわ。まさか、田村さんの死のカードが、あなたに行くとはいえないのだから〉
由紀子は、心の中で思った。
「わっ、本当？　うれしいわ。私、中村なぎさというんです。本当に乙女座です。ほら、これ見て下さい」
なぎさは、ハンドバッグから免許証を出して見せた。
それには、昭和三十四年八月二十四日生れと書いてあった。
〈二十六歳だわ〉
田村は、その免許証を返すと、
「では、京都へ着いたらよろしくおねがいします」
と、いった。
〈あの女は何も知らないで喜んでいるけど大丈夫なのかしら？〉
由紀子は、そっと麻代を見たが、彼女は、無表情だった。

3

京都に着いたのは、十二時三十三分だった。車中で駅弁が配られ、由紀子たち以外の男女は、三時間の旅ですっかり仲良くなっていた。

一行は、歩いて京都駅近くのホテルへチェックインしてから、自分の部屋に入った。

今度は、女は女同士、男は男同士という風に、二人ずつツインの部屋になり、やはり、くじ引きで、組合わせがきまった。

由紀子の相手は、三十歳すぎの色っぽい女性だった。気もよくついて、やさしい感じなので、由紀子は、ほっとした。

あの麻代という女性だと嫌だなと思っていたが、彼女はマリと同じ部屋だった。

〈マリが可哀そうだわ〉

と思ったが、マリも相当気が強い方なので、負けてはいないかもしれない。

一時半に、再びロビーに集ると、今度は、四人ずつのグループに分れるくじを引いた。

「ついでに、バスの座席のくじも引いて下さい。これも、男女別になっています」

相川という添乗員が叫んだ。

すべてくじ引きというのは公平だし、くじのたびにどきどきするのが楽しかった。

「四人がきまりましたら、今日は、どこへ観光に行っても、その四人がグループになって行動して下さい。毎日朝、その日のグループをくじで決めます。バスの座席は、また、全然別のくじを引いて下さい。なるたけ、色々な人と話す機会を作りたいと思いますから」

男の添乗員は、冬なのに汗をかいていた。

由紀子が引いたくじは、Aだった。グループは、ABCDEの五つに分かれるらしかった。

〈マリと一緒になるといいのに〉

と思ったが、マリが引いたのはBだった。

由紀子とマリは、札を握ったまま、誰が、自分たちと一緒か見つめていた。

田村がBを引いた。
〈がっかりだわ。マリはいいな〉
あとBを引いたのは、三十歳くらいのおとなしそうな男だった。
Aを引いたのは、三十五歳くらいのスポーツマンタイプの男と、あの三枚目の原田だった。
〈ツイてないわ。また、原田さんだわ〉
しかし、もっとツイてないことが、すぐわかった。Aを引いた女性が、あの嫌いな麻代だったからだ。
「Aを引いたあのきれいな人と私、同室なのよ」
マリは、まだ麻代の性格を知らないので、にこにこしながらいった。
「じゃあ、代ってくれない？　私、あの人、ずっと新幹線の中で一緒だったけど、苦手なの」
由紀子がいうと、マリは、あっさり承知した。
「いいわよ。私は誰とでも」
その時、添乗員が、
「AとBの女の人どこですか？」
と、大きい声をあげた。
「はーい」
由紀子とマリは、素早く、くじの札をとりかえると、とんで行った。
添乗員が、名前をよみあげる。
「Aのグループ、
原田安雄さん、
三原マリさん、
吉田のぼるさん、
石野麻代さん」
呼ばれた四人がかたまった。
「次は、Bのグループ、
桜田由紀子さん、
田村次郎さん、
伴信夫さん、
谷百合子さん」
由紀子は、田村の横にとんで行った。

谷百合子という女性は、由紀子と同室のあの色っぽい三十すぎの女性だった。
「あら、ご一緒になりましたわね。よかった」
彼女は、愛想よくいった。
伴というのは、平凡なサラリーマン風の男だった。

4

一行が最初に行ったのは、清水寺と、その近くにある地主神社だった。
バスは、京の陶器の街で有名な五条坂を通り、突きあたりを左へ曲って東大路通り（東山通り）へ入る。そして清水坂をのぼって行く。
やがて、京の人たちに、清水さんとよばれている清水寺の三重の塔と、朱塗りの巨大な仁王門が見えて来た。
清水寺に着くと、みんなは、ぞろぞろとバスから降りた。
由紀子は、ひかりの中から一緒だった田村の横にぴったりとついた。
そこへ、百合子と、伴がやってきた。
四人は、かたまって、清水寺を見て歩いた。そこへ、
「わあ、いい眺め」
といいながら、やって来たのは、乙女座の中村なぎさだった。
「あ、中村さん」
田村は、占いが気になるのか、なぎさに近づいた。なぎさも、田村が目あてのようだった。二人は並んで歩き出した。
清水の舞台から見ると、京都の街が一望のもとに見わたせる。
「今日は、今から年末の大掃除がはじまるので、さっと見たら、早く出て下さーい」
添乗員にせかされて、みんなは、清水寺を出て、

すぐそばの地主神社に行った。
ここは、縁むすびで有名なところである。
「謡曲『田村』『熊野』にうたわれた地主桜の名所としても有名です」
と、添乗員が、説明した。
若い女性が圧倒的に多かった。
由紀子は、さっきからずっと田村と、なぎさが一緒に歩いているのが気になっていた。
伴は、百合子と連れ立って話し込んでいる。一人ぼっちになった由紀子は、仕方なく、誰か一人でいる人を探した。
「あ、いたわ」
そばへ行ってみると、それは、あの三枚目の原田だった。
がっかりしたが、それでも、一人よりはいいと、原田と肩を並べて歩いた。
地主神社がすむと、三年坂を下ることになった。
「この坂は、産寧坂と書くのと、さんねん坂、三年坂、いろいろあるけど、どれが正しいのかしら?」
由紀子がきくと、原田は、説明した。
「この坂が出来たのが、大同三年なので、三年坂とか、さんねん坂というのだという説があります。それから、この坂が、清水の子安の塔にむかう道であることから、安産を祈願する女性が通う坂という意味で、産寧坂と書くのが正しいという人もいます。もう一つ説があるけど、縁起でもないからやめておきましょう」
原田は、なかなか博学だった。
由紀子は、その縁気でもない説というのが気になって、教えて欲しいとせがんだ。
「別に、迷信なんですが、この坂で転ぶと、三年目に死ぬというので、三年坂というんだそうです」
「まあ、怖い! 転ばぬようにしないと」
由紀子が、心配そうにいうと、原田は笑いながら、
「転ばないおまじないがあるんですよ」

といった。
「あら、教えて。お願い」
「京都の人は、転ばぬおまじないに、ひょうたんを買ったといいますから、ひょうたんを買いましょうか」
原田は、あたりを見まわした。
二、三軒先に、うまく、ひょうたんをぶらさげて売っている店があった。
原田はそこへ入って、赤い房のついた小さなひょうたんを二つ買い、一つを由紀子にくれた。
〈顔は悪いけど、いい人なんだわ〉
と、由紀子は思った。
バスは、下の東大路通りに待っていて、集る時間がきまっているので、一緒にきた、みんなは、それぞれペアになって、土産物店に入っている。
〈田村さんと、なぎささんは、どこにいるのだろうか？〉
しかし、見わたしたところに、二人の姿は見えなかった。
三年坂をおりると、坂道の両側の店は、清水焼、和装小物、骨董を扱う店、そして、竹細工や京人形も売っている。
甘酒屋や喫茶店には、女の子が一杯だった。やがて、二人は、二年坂に入った。
「この先が高台寺ですよ」
二年坂にも、同じような店が並んでいた。そこで、由紀子は、田村をみつけることが出来た。
田村は、マリと歩いている。
〈ずっと、なぎさと一緒じゃなかったんだわ〉
由紀子は、ほっとして、マリのそばへ走って行った。

5

バスの停っている東大和通りにおりると、もう半数ぐらいの人数が集っていた。

マリの話では、甘酒屋で休んだとき、田村たちと一緒になり、席が一つずつしかあかなかったので、なぎさは、吉田のぼると同じテーブルになり、先に出ていったという。

「吉田のぼるというのは、ゴルファーなんだって。なぎさという人とは、前にどこかで会ったことがあるらしいわ」

マリがいった。

約束の時間に、ほとんどが集ったが、二人だけがまだだった。

「中村なぎささーん、まだですか。それから、吉田のぼるさんもいらっしゃいませんね」

添乗員が、腕時計を見ながらいった。

二十分ほど待ったとき、吉田のぼるがやっとおりて来た。

「どうしたんですか？」

「すみません。途中で気分が悪くなったものですから」

吉田は、添乗員と言葉をかわすと、みんなにも頭をさげた。

「中村なぎささんはご一緒じゃなかったんですか？」

「え？　中村さんですか？　知りません」

吉田は、あわてて首をふった。

バスの運転手が来て、次の錦市場の駐車場が、早く行かないと年末なので入れなくなると云いに来た。

「それでは皆さん、バスに乗って、錦市場まで行って下さい。私は、もう一度上って、中村さんを探して来ます。ただ、脇道が多いので、何人か一緒に行って下さると有難いんですが……。中村さんがみつかったら、私たちは、タクシーで追いかけますから」

添乗員は、みんなを見まわした。

「私が一緒に行くわ」

声のした方を見て、由紀子は驚いた。あの占いの

得意な麻代だったからだ。
「僕も行きます」
といったのは、田村だった。それをみると、マリが「はあい」と手をあげた。
「私も行きます」
「じゃ、私も」
と、由紀子が手をあげたが、添乗員は、
「女性より、男の人がいいなあ。誰か、男の方行ってくれませんか」
と、呼びかけた。
「じゃ、私が行きましょう」
と、原田がいった。
「では、原田さん、田村さん、女性の方は、石野麻代さんと三原マリさん、それに、私で行って来ます。あとの方は、バスに乗って下さい」
添乗員にいわれて、由紀子は、なんとなくつまらない思いで、バスに乗った。
バスは、祇園から四条通りにまがり、烏丸四条で、烏丸通りに入り、大まわりして、錦市場についた。
錦小路は、四条通りの一すじ北に平行している東西の通りで、一すじ全部が、生鮮食料品を中心にした市場だ。
〈錦小路の名称の由来は、このあたりに、大和錦を織る者が居住していたためという説と、もう一説あります〉
と、旅行社から配られたパンフレットには書いてあった。
少々不機嫌だった由紀子も、市場に入った途端に、すっかり元気になった。
市場は、おせち料理を作るために買物に来た主婦たちで、押すな押すなの大盛況だった。
由紀子は、人込みのうしろから、店をのぞき込んだ。
京都名物の千枚漬けの材料の聖護院かぶら、白い根より青い葉の多い九条ねぎ、柚子、大きな加茂な

す、京菜、金時人参など、京都らしい野菜が並んでいる。

次の店では、湯葉や生麩、かまぼこなどの加工品が売られ、出し昆布が山と積まれている。

三十分ほど見たとき、色っぽい美人の谷百合子が、そばへ来て、

「私、おせちを作るのに買ってかえりたいわ」

と、いった。

「あら、おせちなんか作るんですか？　私なんか一人だから面倒だわ」

由紀子が感心していうと、百合子は、あわてて、

「いや、近所の方へもあげたいので」

と、いった。

〈多分、彼女は、恋人がいるんだわ〉

と、由紀子は思った。

一通り見終って、バスの停っているところへ行くと、添乗員が蒼い顔で立っていた。

6

「皆さん、大変なことがおこりました。実は、二年坂、三年坂から、霊山観音の方へ入る小路のところで、中村なぎささんが、死体で発見されました」

「えっ！」

「ウッソウ」

という声が女たちの間から上った。

「それで、警察を呼んで、今、調べがはじまっています。一緒に行った四人の方は、むこうにいて頂いて、私が、ご報告に帰って来たところです。それで、このあとの金閣寺は、一応とりやめて、ホテルに帰って頂くことになりました」

「中村さんが、亡くなったって、どんな風にですか？　急病ですか」

百合子がきいた。みんなも、添乗員の言葉を待った。

「それが……、首を締められて殺されているのです」

また、「ウッソウ！」というコールが巻きおこった。

「本当です。発見したのは、田村さんですが、すぐに、我々も駆けつけました」

「えっ、田村さんが？」

女性の一人がいった。このツアーの中では、田村は目立つ存在のようだった。

バスに乗ってホテルへ帰って待っていると、一時間ほどして、田村たちが帰って来た。

マリも、麻代も、原田も、さすがに緊張した顔をしていた。

みんながそばへ行って事情をききたがったが、田村は、頭が痛いからといって部屋へ戻り、麻代は、何も云わず、煙草をふかしていた。自然に、マリと原田が交互で喋ることになった。まず、マリが話した。

「私は、原田さんと、霊山観音に上る道から歩いて行き、田村さんと麻代さんは、清水道から登って行ったの。添乗員さんは、一人で、五条坂から上って行ったみたいだわ」

由紀子は、地図を広げた。

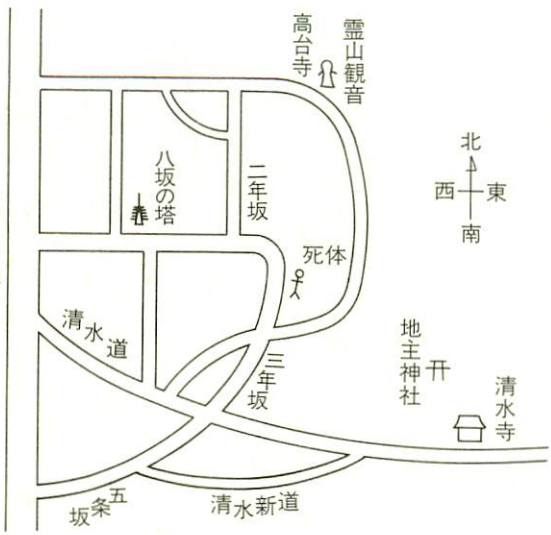
たしかに、三つの道が平行していて、どの道から行っても、二年坂、三年坂のあたりへ出る。一番近いのは、田村と麻代の上って行った清水道である。

「私は、二年坂へ入るところで、原田さんと別れて、二年坂の方へ行き、原田さんは、霊山観音の方へ行ったんです。田村さんたちは、三年坂のあたりで、別れたということです。ね？」

マリは、麻代の方をむいたが、麻代は、黙って煙草を吹かしているだけだった。

「いくら探してもわからないので、はじめの約束通り、三年坂の角で待っていたら、添乗員さんがとんで来て、なぎささんが死んでるって」

そこまでいうと、原田が代った。



「中村さんは、草深いお寺かなんかあるところに、倒れていて、喉には、このホテルの浴衣の紐がまきついていました。私が、麻代さんに呼ばれて行ったときは、田村さんが、ぼんやりと座り込んでいました。そこへ、添乗員さんが来て、驚いて、電話をかけに行く途中で、三原マリさんに会ったということでした」

二人とも警察に話したあとなので、すらすらと話した。

「ホテルの浴衣の紐っていうと、ここから持ち出したのね？」

由紀子は、恐ろしそうにいった。

そこへ、一足遅れて、警察の人を連れた添乗員が戻って来た。

刑事は、三人だった。

「みなさん、自分の部屋へ入って下さい。そして、浴衣の紐がなくなってないか調べてみて下さい」

刑事の一人がいい、あとの刑事が、各部屋に分れ

てついて来た。
〈もし、紐がなくなっていたらどうしよう？　疑われるわ〉
由紀子は、心配になって来た。
由紀子が部屋に入ったとき、もう百合子が入っていたが、彼女は、浴衣の紐を持って言った。
「私のは、あるわ」
彼女は、得々としていった。
〈私のって、どちらが誰のかまだきめてなかったのに〉
由紀子は、いそいで、もう一枚の浴衣をとりあげた。
「ない！　ないわ」
「どうしてかしら？」
百合子が、そばにやって来た。
「本当にないわね。おかしいわ」
そこへ、刑事が入口からのぞいた。
「紐をみせて下さい」
由紀子は、うろたえながら、紐が紛失したことを届けた。
「桜田由紀子さんですね？　ちょっと来て下さい」
由紀子は、刑事が手帳にまでつけ、連れて行かれるのが不服だった。
〈私じゃないのだから、彼女が犯人だわ〉
と、心の中で考えながらいくと、ロビーには、吉田のぼるが来ていた。彼も、紐がないという。
「同室は誰ですか？」
刑事が、吉田にきいた。そのとき、丁度、原田がロビーにやって来た。
「えーと、原田さんです」
刑事が、原田に何かきこうとしているところへ、もう一人の刑事が、麻代とマリを連れて来た。
「私たちの浴衣の紐も一つありません」
「えっ、一体、どういうことなんだ。三本もないというのは」
若い刑事が、悲鳴のような声をあげた。

「多分、一本だけなくなったのでは、疑われるので、犯人が、あと二本、隠したんでしょう」
原田が、ゆっくりといった。
「すると、この三室の中に、犯人がいるということですか？」
狩矢と名乗った捜査一課の警部がきいた。
「それはわかりませんよ。犯人は、自分の部屋の紐は使わず、他の部屋のを使った。
しかし、そうすると、その人物が疑われたり、部屋に入ることが出来た人がわかって困るから、混乱させるため、適当に三本とったのでしょう」
原田が、落着いて答えた。

7

由紀子は、そのあと、マリとロビーで話し込んでいた。自分の部屋には、百合子がいるので戻るのが嫌だったのだ。
「本当にひどいわ。『私のはありますけど』だって。おかげで油をしぼられてしまったわ」
と、由紀子がいうと、マリも、
「私の場合は、私が先に入って、紐を調べたら一本しかないので、あわてていたら、あの麻代という女が入って来てすまして云うの。『私は、今日、あなたより先に部屋を出て行ったし、今は、あとから入って来たから、紐を持ち出すことは出来なかったわ』だって。よそごとみたいに言うのよ。いくら先に出て行ったって、あとに紐があったかどうか調べてないもの。持って行ったかも知れないわ」
と、やりきれないようにいった。
由紀子は、大きくうなずいた。
「私、あの人、虫が好かないの。私、あの人が犯人じゃないかと思ってるの」
「えっ、どうして？」
「だって、彼女は、中村なぎささんが死ぬって知ってたもの。彼女の占いでは田村さんに死のカードが

出たけど、田村さんが、乙女座の女性と一緒にいると、死のカードが乙女座の方へ移るっていったのよ。そしたら途中からきいたなぎささんが乙女座だって名乗りをあげたわ」

由紀子が、ひかりの中でのことを話した。

「あら、そうなの。私も乙女座なのよ。九月一日だから。大丈夫かしら？」

マリが、びっくりしていった。

「大丈夫よ。もう、田村さんの代りに、彼女が死んでしまったもの」

「ああよかった」

マリは、大きくため息をついた。

「ねえ、お茶を飲まない？　立ってるの足が疲れるわ」

由紀子がいい、二人は、ロビーの隅の喫茶コーナーに座った。

「やっぱり、犯人は、あの麻代という人かしら？　外にはない？」

由紀子がいった。

「あやしい人は、いるわ。たとえば、吉田のぼるとかいう人は、甘酒屋さんから彼女と二人で歩いて行ったし、集合場所には、二十分も遅れてやって来たわ。それにちょっときいたところでは、二人は、前からの知り合いだったみたいだし」

マリがあたりを見まわしながらいった。

「吉田というのは、ゴルファーの人ね。紐もなくなったといってたわ」

由紀子がいった。

「ねえ、原田という人はどうかしら？　あの人、とっても力が強そうだわ。なぎささんに云い寄って断わられたので殺しちゃったんじゃないかしら？」

マリがいうと、由紀子は、首をふった。

「あの人とは、私、ずっと一緒だったわ。彼女を殺すことは出来ないわ。それより、私、田村さんの方があやしいと思うわ。なぎささんと、最初ずっと一緒だったし、途中からまた会ったのかも知れない

わ。なぎささんは田村さんに好意を持っていたから、どこかで待ち合わせたのかもしれないわ」

由紀子は、折角いいと思った田村が、自分を置いてなぎさと仲良く行ってしまったのが、今だにシャクだった。

「あーら、私は田村さんじゃないと思うわ。私、途中で一緒になった時、彼は、一人で歩いてたもの」

「その時は、もう殺したあとだったのかもよ」

「えっ、そうかしら？」

二人は、コーヒーを飲みながら考え込んだ。

各部屋をまわって、きき込みを続けていたらしい狩矢警部が、由紀子とマリのところへやって来た。

警部は、二人が、地主神社からあと、どんな道順で、誰と一緒だったかをきき、地図に書き込んだ。

「それから、みなさんにおききしているんですが、あなた方の推理をきかせてくれませんか？　一緒に行動していた人のカンというのは、刑事より確かなことがあるんですよ」

警部は、おだてるようにいった。

〈この手で、みんなの口を開かせているんだわ〉

と思いながらも、由紀子も、悪い気はせず、今、二人で話していた推理を話した。

「なるほどねえ」

警部は、感心したようにいってから、新幹線の中の占いのことを、ノートにかきとめた。警部が行こうとすると、マリが呼びとめた。

「私たち、これからどうしたらいいんでしょうか？　折角、京都に来たのに、ずっと、このホテルにとじ込められてしまうんでしょうか？」

「いいえ。そういうわけにもいかないと思いますから、スケジュール通り、やって頂きます。それは、旅行社と話し合いをつけました」

「よかったわ。じゃあ、お食事にも、おけらまいりにも行けるんですね」

「もちろんです」

8

そのあと、由紀子たちは、市内の中心地にある料理屋で夕食をとった。

大広間で、両側に並んで一人ずつお膳で、料理が出た。はじめのうちは、沈んでいた人たちも、お酒が入り、料理が半分ほど運ばれて来た時には、すっかり宴会気分になっていた。

なんといっても、中村なぎさは、今回知り合ったばかりの他人なのである。

席は、例の通り、くじできめられたが、それぞれ仲良くなった相手の前に座り込んで話をしている。

「もう、大体、組合わせが出来上ったみたいね」

由紀子が、そばへやって来たマリにいった。

添乗員の相川だけが、さすがに酒も飲まず、じっと考え込んでいる。

田村の前には、百合子が、べったりと腰を下して話しているし、吉田のぼるは、麻代のところで、さしつさされつしている。

原田は一人でぽつんと飲んでいた。

伴というサラリーマンが、由紀子たちの前へやって来た。

「さっき、警察の人同士が喋っているのをきいたんですが、今日殺された中村なぎさという人と、吉田のぼるというあのゴルファーは、同じ高校を出てるんだそうですよ。それで、吉田さんには、随分、時間をかけて話をきいていたみたいですよ」

「へえ。そうなんですか？　だから、二人で出て行ったのね」

マリがいった。

「二人で出て行ったって、どこをですか？」

伴がきく。

「三年坂の甘酒屋さんをですわ。それからあと、吉田さんも、なぎささんも、見ていないわ。吉田さんは、二十分も遅れたこと、なんていっているのかし

ら？」
「あの人は、なぎささんが、お手洗いに行ったので待っている内に、急に気分が悪くなって倒れてしまい、気がついたとき、時計を見たら、集合時間を過ぎていたので、あわてておりて来たといってましたよ」
「おかしいわ。あの大きな軀の人が気分がわるくて倒れていたなんて」
マリが、吉田の方を見ながらいった。
吉田は、麻代と熱心に話していたが、やがて、麻代が、ハンドバッグから、トランプを出して並べはじめた。
「行ってみましょう。私も、占って貰いたいわ」
マリがいったので、由紀子も立って行った。伴もついてくる。
「何を占ってるんですか？」
マリがいうと、麻代は、口に手をあてて、「しっ」といった。
「僕の来年の運勢を占って貰ってるんです」
吉田がいった。
マリと由紀子は、顔を見合わせた。
〈吉田さんは、自分が犯人なので、それがトランプであたるかどうかためしているんだわ〉
由紀子はそう思った。
しばらくカードを繰っていた麻代が、おごそかにいった。
「あなたは、嘘をついているわ」
「えっ」
まわりにいたものも、しんとして、吉田の顔を見た。
「どんな嘘をついているんですか？　僕が」
吉田は、腹立たしそうにいった。
「あなたは、独身じゃないわ。妻も子供もあるわ」
「そんな……」
「本当だわ。それから、あなたは、妻以外の人と恋愛しています」

「嘘だ！　そんないいかげんな」
「本当かどうか、あなたの住所を書いて下さい。東京へ帰って調べればわかることだわ」
「つまらないことは言わないようにしようよ。僕は、独身だし、今、つき合っている女性はないよ。インチキだ」
そういうと、吉田は、立って行ってしまった。
「やっぱり、その占い当るのね。怖いみたい」
いつの間に来たのか、百合子が感心したようにいった。
「じゃ、僕のこと見て下さい」
突然、原田がいった。
みんながびっくりしたように原田を見た。
「私、一度に一人しか見ないの、疲れるから」
麻代が、ニベもなくいった。
「そんなこといわないで見て下さい。一万円出します」
原田は、本当に一万円出した。
「私は、お金では占いません。でも、そんなにおっしゃるのなら、十分ほど休んでから見ますわ」
「おねがいします」
原田が、頭をさげた。
由紀子は、内心不思議だった。原田は、三枚目の顔をしているが、博学で、落着いていて、占いを真剣に信じるようには見えなかったのである。
〈彼は、何か目的があって、占って欲しいといっているのではないだろうか？〉
十分して、原田の占いがはじまった。
新幹線で占った通りに、なぎさが死に、吉田が独身でないというのもあたったようなので、全員が、麻代の手元をみつめている。
「えーと、あなたは、本当に、独身です」
麻代がいうと、まわりから歓声があがった。その容貌から、独身だろうとみんな思っていたからだった。
「職業は、学校の先生か、研究所につとめていると

いうような知的な職業です」
原田がうなずいた。
〈ここまでだったら、私だってあたるわ〉
由紀子は、心の中で呟いた。
「あなたは、……何か悩んでいますね」
〈誰だって悩みごとはあるわ。馬鹿みたい〉
「何を悩んでいますか？」
原田が、笑いながらいった。
「あなたは、何かを知っているんですね？　それを云った方がいいかどうか迷っています」
その途端に、原田の顔が蒼ざめた。
「で、云った方がいいんですか？」
原田が真剣な顔できいた。
「黙っておく方がいいでしょう。それから……」
その時、どこかへ行っていた添乗員が、入って来て、大きな声でいった。
「さあ、そろそろ、ホテルに帰りましょう。タクシーが来ましたので、四人ずつ乗って下さい」
そこで、占いはおわりになった。
原田が考え込んでいる。
マリが、麻代のところへ行ってトランプを片づけるのを手伝った。
「本当にすごいわ。明日でも、ゆっくり、私のこと占って欲しいな」
しかし、麻代は、返事をしなかった。
由紀子も、来年結婚できるかどうかきいてみたかったが、麻代の態度が尊大なので、やめにした。

9

ホテルに戻ると、ロビーで添乗員がみんなを集めて云った。一日中、大きな声を出していたので、声がかれていた。
「これからあとは、自由に過して下さい。部屋で、紅白歌合戦を見て眠ってしまわれてもいいし、そのあと、おけらまいりにいかれても結構です。おけら

まいりに行かれる方は、私が、八坂神社までお送りしますので、十二時に、ここに集って下さい。明朝は、ホテルで、雑煮とおせち料理の朝食がつきます。そのあと、集合は、九時です。では」

由紀子は、百合子と一緒に、フロントで、キーを受けとり、自分たちの部屋に入った。

「紅白見る？　どうする？」

百合子がきいてきた。

「私、どっちでもいいわ」

「じゃあ、かけていいのね。私、楽しみにしてるの」

百合子が、テレビをつけると、丁度、入場行進のところだった。

由紀子も、二人で話をするより、テレビがある方が気を使わなくていいので、好都合だった。

百合子は、自分のあまり好きでない歌手になると、持ってきたみかんを出したり、お茶を入れながら、由紀子に話しかける。

「ねえ。あの人の占いってすごいと思わない？」

「ええ。でも、原田さんって、何を知っているのかしら？」

「私、多分、あの人、犯人がわかったんだと思うの。何か見たんだわ」

百合子が、自信ありげにいった。

「でも、原田さんて、私とずっと一緒に、坂をおりたのよ。その時、なぎささんのことは何も気がつかなかったわ」

「だから――、あとで探しに行った時じゃないかと思うの。私たちが、錦市場へ行ったあと、田村さん、原田さん、麻代さん、それからあのマリさんの四人と、添乗員が、上に探しに行ったでしょう？　あの時、何かわかったんじゃない？　犯人が忘れたものを拾うとかして」

百合子も、なかなかカンが鋭い。

「そうね。でも、それだったら、どうして警察にいわないのかしら？」

「その人が殺したかどうかはっきり云い切れないからじゃないの。まだ、こうして旅をしないといけないのに気まずくなると困ると思ったのよ。それで、さりげなく、占いにことよせて、犯人の反応を見たんだと思うわ」
「なるほど。じゃ、犯人は誰？」
由紀子は、勢い込んできいた。
「そんなのわかるわけないじゃないのォ。ひょっとしたら……」
「ひょっとしたら誰なの？」
「よくわからないけど、あの麻代という人じゃないかしら？　だから、原田さんは、強引に占って欲しいといったのよ。そしたら、麻代さんは、知っていることを云わない方がいいと口どめしたんだわ」
「正解よ、きっと。私も、あの人があやしいと思ったわ。でも……」
「でも、何？」
「マリがあぶないわ。同室だから」
「ちょっと云っておいてあげたらいいんじゃない。つまらないことを云わないようにって」
「そうね、じゃ、ちょっと、マリの部屋へ行ってくるわ」
由紀子は、外へ出た。
二人の部屋へ行って、何といって、マリを呼び出そうかと思っていると、マリは、ロビーにいた。
ロビーには、大きなテレビがあって、グループの人も、五、六人見ていた。
「あら、マリ。ここにいたの？」
「ええ。あの人が、紅白を見ないっていうから、仕方なくここに来たの。ここの方が、みんなで見られて楽しいわ」
「そうね。ちょっとマリ、こっちへ来てくれる？」
由紀子は、マリをロビーの隅へ連れて行って、百合子の推理を話した。
「えっ、あの人が？　そんなの怖いわ」
案の定、マリは、ふるえ出した。

「大丈夫よ。何も気がつかぬふりをしていたら。あなたのことだから、犯人がわかった！　なんていうと危いわよ」
「ねえ、ゆっこ、今晩あなたの部屋にとめて。おねがい！　あの人は、おけらまいりに行かないと思うから、私、おけらまいりに行って朝まで歩いていたことにするわ」
「私、おけらまいりに行きたいけど」
「じゃあ、私も行くわ。怖いわ」
由紀子が、ロビーのテレビの方を見ると、原田がいた。
原田は、由紀子をみると、手をあげたので、二人は、そばへ行った。
「ねえ、原田さん、さっきの占いだけど、私たちの推理では、原田さんが、誰が犯人か知っているんじゃないかっていうことになったの」
由紀子が、小声でいうと、原田は、えっというような顔をした。
「そんなことないですよ。あのときは、ずっとあなたと一緒だったじゃないですか」
「百合子さんの話では、あとで、添乗員さんたちと探しに行ったとき、何かを発見したんじゃないかと」
「……」
原田は、黙り込んだ。
「何を発見したんですか？」
マリが、追及する。
「何も見てないし、発見もしてません。それより、百合子さんといえば、あの人も、あとから探しに来てたみたいですよ。僕たち五人だけかと思ったら、あの人が、二年坂の脇道から出て来たのでびっくりしましたよ」
「えっ、本当ですか？　でも、あの人は、私たちと一緒に錦市場に行った筈ですわ。私が市場で、伊勢えびなんかを見ているとき、肩を叩かれて、そのあと、集合場所まで行きましたから」

「そうですか。でも、見たのは確かですよ」
原田は、はっきりといった。すると、マリが、
「わかったわ。あの人は、一旦、あなたたちと錦市場まで行って、すぐ、タクシーで引きかえして来たのよ。私たちは、歩いて上って行ったので、三年坂や二年坂のところまでは十分位かかったけど、タクシーで上まで上ってしまったら、錦市場からだと十分ぐらいで戻れるわ。そして、そのあと、十分ぐらいあのあたりにいて、また、通りかかったタクシーで帰れば、あなたたちが錦市場でぶらぶらしている間に戻れるわ」
「本当ね。でも、あの人、何のために行ったのかしら？　私たちには、そんなこと、全然いわなかったけど」
由紀子は、恐ろしくなった。
「犯人は、『現場に戻る』っていうじゃない」
マリが、由紀子の背中をぽんと叩いた。
「きゃあ、やめて！」
由紀子が、大きな声を出したので、テレビを見ていた人たちがふり返った。
その中に、田村と吉田の姿もあった。

10

十二時に、ロビーに集ったのは、八人だった。添乗員を入れて男四人、女四人である。
由紀子は、旅行中の日記をつけていたので、メモ帳に、八人の名前を書きつけた。

男性
　添乗員
　原田
　吉田
　田村
女性
　百合子

麻代
マリ
私（由紀子）

八人は、四人ずつタクシーに分乗して、祇園の八坂神社に向った。

タクシーをおりると、雪がひらひらと舞いおりて来た。

すでに、八坂神社のまわりは、何千人という人出だった。

おけらまいりというのは、この境内で焚かれるおけら火を、一メートルほどの長さに切った縄の先に移して貰い、消えないように、ふりまわしながら帰るという祭りである。

昔は、その火をかまどにつけて、お正月のお雑煮を煮たという。

「ホテルに火のついた縄なんて持って帰れないわ。どうしよう」

百合子がいった。

「でも、そういう行事なんだから、やっぱりやって見たいな。写真もとりたいし」

といったのはマリである。

結局、みんなは、縄を買い、おけら火をつけて貰うための長い列に並んだ。

列は、何列もあって、どの列が早くすすむのかわからなかった。

由紀子と同じ列に並んだのは、田村だった。由紀子は、田村が、わざわざ由紀子の列に来てくれたのでうれしかった。

さすが京都だけあって、日本髪に結った人や、着物姿の参詣客が多い。

「あ、舞妓さん」

という声がしたのでみると、三人の舞妓が、火のついた縄をまわしながらおりて来た。テレビカメラが来ていて、その前では、有名タレントが喋っていた。

「いやあ、今日は、たまたま京都でロケがあったも

ので、来てみたんですよ。いえ、これから火を貰いに行くところです」
タレントがいうと、そこへ、さっきの舞妓が戻って来た。
「やあ、舞妓さんもいますね。京都のお正月という感じがしますね」
〈偶然来たようにいっているけど、今はやりのヤラセだわ〉
由紀子がそう思ったとき、麻代に添乗員がついて引き返してくるのが見えた。
「どうされたんですか？」
田村がきく。添乗員は、
「気分が悪くなったから、ホテルに帰りたいといわれるので……」
というと、麻代が顔をあげていった。
「気分が悪いんじゃないわ。気色が悪いって云ったのよ。今、霊感がして、不吉な予感がしたから、ここにいたくないの」
添乗員が苦笑して、
「とにかく、タクシーがつかまるところまで付き添って行って来ます。自由に見て帰って下さい」
といって、走って行った。
「不吉な予感てなにかしら？」
不安な思いで由紀子がいった。
「まさか、また、人が死ぬんじゃないだろうなあ。イヤだよ、そんなの」
田村が、おそろしそうにあたりを見まわした。
隣りの列では、百合子が、吉田と話し込んでいる。
少し前の方に、マリが一人で並んでいた。
「原田さんはどうしたのかしら？」
由紀子がのび上るようにしていると、田村が、列の外を指した。
「あそこにいますよ。あの人は、縄に火はつけないのかな」
と、いった。

彼は、手に縄を持っていたが、列にはつかず、すたすたと、社殿の方へ上っていった。

折角列に並んで来たのに、いざ火をつけて貰おうと思うと、大きな篝火の前は、大混雑で、人が群がっていた。神主さんが、一人一人火をつけてくれるのだが、あまりにあちこちから縄が突き出されるので、困り果てていた。

由紀子も、一度は、あきらめて帰ろうと思ったくらいである。

だから十五分くらい待ってやっと火がついたときには、さすがにうれしくてたまらなかった。

あちこちで、「きゃっ」「やめてっ」と声がするのは、人々のふりまわす火が、着物姿の娘の袖にあたるからだった。

〈大変だわ。折角の晴着が穴だらけになってしまう〉

最初は、着物を着た人を羨ましく思っていた由紀子も、この騒ぎを見ては、洋服でよかったと胸を撫でおろした。

グループの男女は、みんなバラバラになってしまったらしく、誰もみつからなかった。

へさあ、この御利益で、来年、いや、今年こそは、すてきな人と出会って、結婚しなくては〉

由紀子は、そう思って勢いよく火縄をふりまわしながら、坂をおりた。

通りに立っていくら手をふっても、タクシーはとまらない。どの車も人が乗っていることもあるが、空車でも、火のついた縄を持って乗られるのは困るのだろう。

やっとそう気がついた時、一台のタクシーが、とまってくれた。

「お客さん、すんまへんが、火は消してくれはりませんか。そやないと乗って頂けません」

仕方なく、由紀子は、縄の火を消して、車に乗り込んだ。

なにか、火が消えるのと同時に、結婚運も消えた

ようで、しょんぼりしていると、運転手がなぐさめた。
「どうせ、火ィは家へ帰ったら、みんな消さはりますのや。火をつけて貰うた瞬間に、おはらいができたわけですさかい、大丈夫どすわ」
「本当？　だったらいいけど」
運転手は、それでも、由紀子ががっかりしているので、おけらの説明をはじめた。
「おけらというのは、キク科の草の名前なんどすわ。根は、薬になるし、お正月の屠蘇の原料にもなります。おけらを燃やすと、湿気がとれ、邪気と悪臭をとるというので、昔は、梅雨の時に、宮中で焚くならわしがあったといいます。その縄は、吉兆縄とゆうて、心の正しい人が持つと、ええ運勢が来るといういわれがありますねン」
「あら、これ、吉兆縄というの？　じゃ、心の正しくない人が持ったらどうなるのかしら？」
由紀子は、少し機嫌を直していった。
「さあ……、泥縄になるのと違いまっか」
運転手は、自分でいって笑い出した。

11

由紀子が帰ったとき、ロビーにいたのは、マリと、添乗員だった。
マリは、火のついた吉兆縄をふりまわして楽しんでいる。
「あら、いいわね。私、タクシーの運転手さんに断わられてしまったわ。消してから乗って下さいって」
「ほんと？　私たちは、何もいわれなかったわ。ねえ、添乗員さん。あ、そうだわ、添乗員さんが、旅行社のマークをつけていたためかも知れないわ」
添乗員は、にこにこしていた。
「何かいいことあったの？」
由紀子がいうと、マリは、

「東京へ帰ってからデートすることにしたの。うちの近くなんだって」
と、いった。
「そう。いいわね。じゃ、私は、部屋に帰ります。あの人、もう戻ったかしら？」
「誰？　ああ、百合子さん？　まだよ」
「マリはどうするの？　私の部屋に来て泊るといってたでしょう？」
由紀子がきくと、マリは、
「今、添乗員さんが、一つ部屋をとって下さったの。一つのツアーで一人ぐらいは、同室は嫌だという人がいるから、余分なお部屋が一つはあるんですって。私、そこで眠るから、ゆっこも来ない？」
「いいわ。私、邪魔になるといけないから」
「邪魔なんかにならないわ」
マリは、ひきとめたが、由紀子はふり切って、自分に割りあてられた部屋へ行った。
由紀子は、なんとなく腹立たしかった。理由は、自分でもわかっていた。
この旅行で、みんなボーイフレンドや、ガールフレンドが出来て楽しくやっているのに、自分だけが、誰とも仲良くなれないからである。
マリだけは、自分と同じだと思っていたのに、マリも、添乗員と親しくなっている。
〈原田さんに電話をかけてみようか？　あの人なら、一人ぼっちに違いない〉
館内電話をかけてみたが、誰も出なかった。
〈お風呂にでも入ろうか。百合子さんの帰って来ない前に〉
と思い、お湯を入れているところへ、百合子が帰って来た。
「あー、面白かったわ。吉田さんて、意外にいい人なのよ。私、犯人かも知れないと思ったといったら、むこうも、私が、犯人じゃないかと思ったって」
百合子は、上機嫌だった。

〈この人は、錦市場から、二年坂の方に戻って行ったのに、そのことを内密にしている。怪しいわ〉

と思ったが、もし、犯人だった場合、感づいたことを悟られない方がいいと思って、由紀子は黙っていた。

「お風呂先に入っていい？」

「いいわよ。私、紅白の間に入ったから」

「あら、そうなの」

「だって、あなたいなくなってしまうんだもの」

「ごめんなさい」

風呂から上ると、由紀子は、風邪薬を三錠のんでベッドに入った。

ドアを激しく叩く音で目が覚めたのは、朝方の五時半だった。

反射的に腕時計を見てから起き上ると、隣りのベッドの百合子が、ドアのところへ駈け出して行った。

「どなたですか？　こんな時間に」

「すみません、添乗員の相川です。ちょっとあけて下さい」

それは、確かに添乗員の声だった。

百合子がドアをあけた。

「すみません。すぐに服にきがえて、ロビーに集って下さい。原田さんが殺されたのです」

「えっ！」

「ほんと？」

二人は、思わず叫んだ。

「とにかく、詳しいことは、あとで話します。ロビーに集って下さい」

そういうと、相川は、走り去った。

「原田さんが死んだって、どうしてかしら？」

由紀子が服をかぶりながらいうと、百合子は、

「わかってるじゃない。あの人は、犯人を知ってたのよ。だから殺されたんだわ」

と、平然としていった。

「犯人って誰なのかしら？」

由紀子は、ファスナーをあげながらいった。
「きっと、あの麻代という女よ。原田さんに口どめしたけど、心配だから殺したんだわ。怖い！」
二人は、あわただしく服を着て、ロビーに行った。もうほとんどの人が集っていた。
一番最後に、麻代がやって来た。
添乗員は、みんなが揃ったのを確かめると、事件の報告をした。

12

「えーと、さっき、警察の方から連絡がありまして、私どもの旅行社のバッジをつけた人が、八坂神社から抜ける坂道の草むらの中で亡くなっていると連絡がありました。ポケットに宿泊するホテルの名前をかいたものが入っていたということでした。それで、急いでとんで行ってみましたところ、原田さんの首に、縄が巻きついて亡くなっていました。死亡時刻は、一時前後だそうです。原田さんの首に巻きついていた縄には、一旦燃えて、そのあと消えたあとがあることから、おけら火の縄だと警察の方がいっておられます。そこで、おけらまいりに行かれた方に、警察の方がお話をききたいといっておられます」
そういうと、柱の横から、あの狩矢警部が出て来た。
「まず、おけらまいりに行かれた方は、一歩前に出てください」
狩矢は、みんなの顔を見まわした。
その時、百合子が大きな声でいった。
「おけらまいりに行った人の中に、犯人がいると思うのは単純ですわ。おけらまいりに行かないといって部屋にいる人の方があやしいわ。だって行動が自由ですもの。それに、途中で帰った人もいるし」
百合子は、麻代の方を見た。
「別に、おけらまいりに行った人があやしいといっ

ているわけではありません。二グループにわけて、行った人には、道順や、誰と一緒に行動したかということをきき、ホテルにいたという人は、外に出なかったかなどをききたいと思っているのです。では、よろしく」

麻代が、ちらっと百合子の方を睨んだのがみえた。

狩矢警部が、おけらまいりに行ったグループに、一緒に来た橋口警部補が、ホテルに残った人に話をきくことになった。

〈困ったわ。私は列に並んでいるときにはぐれてしまって、誰とも一緒にいなかったから〉

由紀子は、心配になって来た。

自然に、おどおどしてしまって、自分の番になったとき、狩矢警部の顔をろくに見られなかった。それでも、警部は、疑っている様子もなく、簡単に事情聴取を終った。それは、他の人に対しても同じだった。マリは、縄に火をつけてもらったところから、ずっと、添乗員と一緒で、火をつけたまま、一緒にホテルに帰って来たといった。

添乗員の話も、それを裏づけしていた。

「私は、途中で帰るといい出された、石野麻代さんを送って、下の通りまで出て、タクシーを停めてお乗せしてから、神官が、おけら火をつけているところへ行きました。そこで、三原マリさんが火をつけて貰っているのが見えたので一緒に帰って来ました。私の方は、列に並んでいなかったので、火をつけて貰うことは出来ませんでした。原田さんは、一度も見ませんでした」

〈マリと添乗員は、犯人じゃないわ。となると、途中で帰った麻代さんと百合子さんがあやしい。いや、もう一人の男性吉田のぼるはどうしていたのだろうか？〉

まるで、由紀子の心をよんだように、狩矢が、吉田にきいた。

「あなたは、どうなさったんですか？」

「私は、原田さんとはじめのうち一緒だったんですが、篝火の近くになってから、原田さんとはぐれたんです。歩いていると、百合子さんがうしろから追いついてきたので、火をつけたあと、一緒に帰って来ました。火をつけた縄は、タクシーに乗るとき捨ててしまいました」

「私の縄は、火のつきが悪くて、すぐに消えてしまったので、途中で捨てました」

百合子がいった。

〈二人だけ、縄を持って帰っていない。その縄で、原田を殺したのではないだろうか〉

由紀子は、百合子をじっとみつめた。

「原田さんは、自分の縄を持っていたのかしら？」

麻代が狩矢にきいた。

「ええ、持っていましたよ。火がついて半分ほど灰になったのを」

「すると、彼の首に巻きついていた縄は、犯人の縄の可能性がありますね」

麻代が、百合子の方をみながらいった。

さっきのお返しのつもりらしい。

「それでは、あなたのことをききましょう。麻代さんは、添乗員さんがタクシーに乗せたあと、まっすぐ、ホテルに戻ったんですか？」

狩矢が、椅子に座りなおしていった。

「ええ。まっすぐ帰りましたわ。帰ったとき、フロントの方としばらく話しましたから、覚えているんじゃないかしら。帰った時間は、十二時三十五分くらいです。タクシーに乗ったときが、三十分近かったからどこへも寄ってません。それに私、縄は買わずに帰ってきましたから原田さんとは関係ありません」

「でも、一旦ホテルに帰ってからまた出たんじゃないのォ」

百合子が、麻代にいう。

「私は、十二時四十五分ぐらいまでフロントの人と話をしていて、そのあと部屋に入ったのだけど、そ

れから出て行ったとしたら、八坂神社に着くのは、一時前になるわ。それから、縄を買って、火をつけて貰うために並んで、やっと火をつけて貰ってから、原田さんを探して殺して帰ってくるというと、二時近くなるわ。私は、同室のマリさんが一時半頃帰って来たときに部屋にいたんですもの。それに、あの混乱の中で、原田さんをさがすなんて出来ないわ。それよりは、一緒に行った人の方が、ずっと原田さんを殺す可能性は高いわ」

麻代は、冷静にいった。

13

しばらく沈黙が流れた。麻代は眼をつぶって考えていたが、

「もう一つお知らせすることがありますわ。私、昨日の宴会のとき、原田さんとお話していて、相談を受けたの。彼の推理では、中村なぎささんは、あとで五人が探しに行ったとき、殺されたんじゃないかというの」

「えっ、そんな……。じゃ、なぎささんは、集合時間も無視して、じっと上で待っていたというんですか？」

由紀子がいった。

「ええ。そして、犯人は、彼女のいる場所を知っていたから、まっすぐに彼女のところに行って、話をしながら、突然、首をしめたんじゃないかって。なぜかというと、彼は医者で、死体を見たときの感じが、死んだ直後のように思えたというの」

「では、彼女が待っていたのは男性だったというわけですか？」

狩矢が、口をはさんだ。

「いえ、女かも知れないって。というのは、彼女に全然抵抗したあとがないのは、クロロホルムか何かをかがされて倒れていたからではないかと思われるんですって。でないと、たとえ相手が好きな男で

も、死ぬまぎわには抵抗する筈だって」
「では、麻代さん、あなたと、マリさん、そして添乗員さんと田村さんの誰かが、犯人というわけね？」
百合子が、勝ちほこったようにいった。するとマリが、たまりかねたように、
「私も、原田さんから話をきいたわ。由紀子も知っているけど、原田さんは、あのとき百合子さんの姿を見たといってるのよ。あなたは、何のために、秘かに、錦市場から引き返したの？」
狩矢は、興味深そうに、女たちのやりとりを眺めている。百合子は、どきっとしたようだったが、すぐに、
「私？　ああ、私も心配だから見に行ったのよ。でも、何もみつからなかったから、すぐに引き返してしまったの」
と、いいわけした。
狩矢が、顔をあげた。
「原田さんの推理は、あたっているかもしれません。我々も、同じことを考えました。現場へ行って中村さんをのぞき込んだとき、かすかに揮発性の匂いがしましたから。つまり、中村なぎささんは、みんなが、三年坂や二年坂を歩いているとき、犯人と会って、クロロホルムをかがされて、あの場に倒れた。なぜ、そのとき締め殺さなかったかというと、近くにグループの人がいたからでしょう。そうしておいて、あとから、探しに行ったとき、まっすぐ、そこへ行って、彼女を締め殺し、そしらぬ顔をしていたのです」
〈よかったわ、私は、錦市場に行っていて。探しに行ってたら、疑われたかもしれない〉
由紀子は、ほっとした。
しかし、麻代は、いじ悪だった。
「でも、百合子さんの例でもわかる通り、本当の犯人は、捜索隊に加わらず、一旦、錦市場まで行って、秘かに戻って来たかもしれませんわ。だから、

犯人は、限定できないと思います」
吉田が、不快そうな顔をした。
吉田は、そこで、
「今、みなさんの話をきいていて思い当ったのですが、僕が倒れたのも、犯人に、クロロホルムをかがされたからではないでしょうか。どこも悪くない僕が、あんなに急に、ぶっ倒れるなんておかしいのです。幸い僕は、しばらくして気がついたので、おりて行きましたが、僕だけ遅れて行ったので、みんなから疑われました。犯人の目的は、僕を疑わしく思わせるためと、もう一つ、多分、そのとき、僕がそばにいて邪魔だったんだと思います」
由紀子は、なるほどというようにうなずいたが、百合子は、黙っていなかった。
「私は、あなたも怪しいと思うわ。何故かっていうと、犯人は、中村なぎささんにクロロホルムをかがせたとき、失敗して、自分も、それを吸って、ぶったおれたんじゃないかと思うの。それで、わざと、あとの捜索には加わらず、一旦、錦市場へ行って引き返したのかも知れないわ」
「いい加減にして下さい」
吉田は、怒りで顔を赤くした。
「とにかく、私は、原田さんを殺す必要はないわ。彼は、私に、そのことをみんなに云った方がいいかどうか相談し、私は、それじゃあ、占いにことよせて、みんなの反応をみましょうといったんですもの。彼は、私を信頼していたし、殺さなくても、彼を黙らせておくことが出来たんですもの」
麻代が煙草をふかしながらいった。
「それはないと思うわ。原田さんは、あなたを一番あやしいと思ってたのかもしれないわ。だから、あなたに相談するようにみせかけて、反応を見てたのかもしれないじゃないの」
百合子がいった。
みんな黙り込んだ。
しばらくしてマリが、ぽつんといった。

「でも、中村なぎささんを殺した動機は何なのかしら？　それがわかれば、犯人がわかるんじゃないの。アリバイとか、なんとかいっても、今の話じゃ、みんなが犯人になってもおかしくないでしょう？　警部さん」

「そうですね、動機がわかりませんね。推理小説などでは、原田さんの方を殺すのが、目的で、その動機を悟られないため、何の関係もない人物を最初殺すというのがありますが、今度の場合は、原田さんは、中村なぎささん殺害の犯人に感づいたため殺されたと考える方が自然ですからね」

狩矢はそういってから、

「えーと、田村さん、あなたが、中村さんの死体を最初に発見したんですね？」

といった。

今まで、何も喋らなかった田村が、あわてたようにいった。

「僕です。でも、僕が犯人だったら、なるべく人に発見させるようにしますよ。僕が発見したときには、彼女は、本当に死んでました」

そのとき、あとのグループの調べを終った橋口がそばにやって来た。狩矢は、

「では、今日は、このくらいでやめておきましょう。もう一ねむりして下さい」

といって、立ち上った。

14

朝はすぐにやって来た。

みんなは眼をこすりながら、ホテルの食堂に集った。

添乗員が、立ってみんなに挨拶した。

「おめでとうございます、と申しあげたいところですが、私どものツアーは、二人の方が亡くなって、おめでたくなくなってしまいました。残念なことです。本来なら、すぐに旅行をとりやめて、東京に帰

るべきですが、今からでは切符もとれませんし、京都府警の方でも、捜査のため、皆さんに留って欲しいといっておられますので、とりあえず、元旦の今日一日は、このホテルにいることにします。昨日お知らせしましたので、亡くなった中村なぎささんのお父さんが、東京からもうすぐ車で着かれると思います。原田さんの方は、連絡先が自宅になっておりましたが、お宅には誰もおられず、まだ、連絡がついておりません。とにかく、食事がすんだら、このホテルから出ないようにして頂きたいと思います」

さすがに、二人もツアーの仲間が死んだので、朝食は、お通夜のように静かだった。

お正月らしく、朝食には、おせち料理と、京風の白味噌の雑煮がついていた。

食事が終ったあと、由紀子は、マリと、ホテルの中の店を見たりして時間をつぶしていた。

「私、彼に西陣織りのネクタイを買うわ。彼は今頃何をしてるかしら？」

マリが、ガラスケースをのぞきながらいった。

そこへ、田村と吉田が通りかかった。

二人は、笑いながら喋っていたが、二人に気づくとそばへやって来た。

「何を喋っていたんですか？」

マリがきくと、田村が、説明した。

「吉田さんに、妻子がいるのにどうして旅行に来たのかときいたら、奥さんたちは、スキー旅行にいってしまったというんですよ」

「僕は、スキーが出来ませんからね。家で、ごろごろしていようと思っていたら、この旅行が目についたのでやって来たんです」

「バレてしまったら、もうこのツアーの女性とはデートできませんね」

マリがいうと、吉田は、笑いながら、

「いや、添乗員にきいたら、人妻の人も参加してるそうですよ。名前は教えてくれませんでしたけど。申し込みに来たとき、ハンドバッグを忘れて行った

のであけてみたらパスポートがあって、ミセスと書いてあったそうです」
「へえ。ご主人はどうしてるんでしょうね？」
マリがいうと、吉田は、
「外国旅行にでも行ってるんじゃないですか」
といった。
男性二人が来たので、マリは、ネクタイを買うのをやめて、歩き出した。
男二人が行ってしまうと、マリが、
「ミセスの人って、どの人かしら？」
と、いった。
「百合子さんじゃないかなあ」
「そうね、百合子さんか、麻代さんのような気がするわ」
三十分ほどして、中村なぎさの父親が狩矢警部と一緒にやって来た。
中学校の校長をしているという厳格そうな人だった。
彼は、興奮して、ツアーの一人一人に、どうして娘は死んだのか教えて欲しいときいてまわった。
「あの子には、きまった人がいて、その人が海外赴任から帰ったら六月には、結婚することになっていたのです。それなのに……」
と、涙を流していうのをきいて、由紀子たちはびっくりした。
「それなのにどうして、こんな見合旅行のツアーに参加されたのですか？」
狩矢警部も、意外そうにきいた。
「家内にきくと、お友だちのご主人が、このツアーに参加していて、どうも彼女と一緒に行くらしいので、どの人が彼女か調べて欲しいといわれたんだそうです。あの子は、気がいいので、引受けたのですが、それがこんなことになるとは……」
父親は、ハンカチで、涙をぬぐった。
「そのお友だちの名前は、何というんですか？」
「わからないのです。あの子は、誰にでも好かれて

いて、友だちも多かったので」
「そうですか……」
狩矢が、ため息をついた。
「まさか、あなたの彼が来ているわけじゃないんでしょう？」
由紀子は、マリを突っついて小声でいった。
「何いってるの。私の彼の名前は、杉原よ。知っているでしょう？」
「ああ、そうだったわね」
それでは、誰だろうと、由紀子は、あたりを見まわした。
この中に、不倫の男女がいて、二人は、そしらぬ顔で、独身といってこのツアーに参加している。彼等は相手を探すのではなく、大っぴらに、浮気旅行をするためである。旅行の主旨が、結婚相手を探すことだから、二人がペアになって、親しくしても、誰もおかしく思わない。
〈男が妻がいるのに、愛人と旅行して、そのことをなぎさにかぎつけられたので殺したのだろうか。それとも愛人の方が……〉
と、由紀子は考えた。
〈田村なのか吉田なのか、伴なのか、それとも別の男なのだろうか……〉

15

由紀子は、ふと、添乗員に目をとめた。
〈彼かもしれない。彼が、自分の行くツアーに、彼女をさそったのではないだろうか？〉
しばらくすると、中村なぎさの父親は狩矢警部たちと、娘の死体に対面するため出て行った。
「可哀そうね、なぎさという人。自分に関係ないことで殺されてしまって」
由紀子がいうと、マリは、
「私、あの添乗員が不倫をしている夫のような気がするわ。他の人ならとにかく、添乗員が、自分のツ

アーに愛人を呼んでいて、そのことが知れたら、一番困るはずよ。会社もクビになると思うわ。だから、キスでもしている現場を見られて殺したんじゃないかしら。ゆっこ、どう思う？」

といった。彼女も、添乗員が盲点であることに気づいたのだ。

「私も同じことを考えたわ。あの人は、誰とあるいていても、どこへ行っても、誰もおかしく思わないもの」

由紀子は、添乗員の方をみながらいった。

そう思ってみるせいか、添乗員の相川は、蒼い顔をしてうつむいていた。

由紀子は、マリと、ロビーの中央に腰かけた。

みると、麻代と田村、吉田と百合子がお茶を飲みながら話し込んでいる。

それを見ていたマリが、

「私たち、思い違いしてるんじゃないかしら？　吉田さんは、妻子があるといったわね。なぎささんが、マークしていたのはあの人かもしれないわ。そして恋人が、あの百合子という人だわ。もうなぎささんも死んでしまったから、大っぴらに楽しくやってるのよ。打あわせもあるだろうし。あの親しさは普通じゃないわ」

そういわれれば、そんな気もしてきた。

「そうね。なぎささんと、甘酒屋を出て行ったのは、彼だったわね。彼は、そのときのクロロホルムで、自分も気を失ってしまった。それで、そのときは疑われると困るから、彼女を殺さずに、おりて来たのよ。そして、彼は、錦市場に行ってアリバイをつくり、代りに百合子さんが行って殺して来たのかもしれないわ」

「そうね。一体、二人は、何を話しているのかな。邪魔してみない？」

マリは、そういうと、つかつかと、二人のテーブルへすすんだ。由紀子も続いた。

「何を話してるんですか？」

マリは、明るくいった。
「ああ。犯人の推理ですよ」
吉田が笑いながらいった。
「えっ、誰が犯人ですか？」
由紀子は、二人の顔を見た。
「あそこにいる二人よ」
百合子が、田村と麻代を指した。
「あの田村さんにはきっと妻がいて、愛人は麻代さんだわ。だって、新幹線の中で、麻代さんが占いをして、田村さんに乙女座の人と一緒にいるといいといったのでしょう？　それは、麻代さんから田村さんへの伝言だったのよ。二人は、自分たちを探っている女がいることを知っていたけど、誰かわからなかった。だけど、あの麻代という人が、ホームかどこかで話していて、なぎさという人がその探偵だと気がついたので、田村さんに知らせたのよ。乙女座に気をつけろって」
「あ、そうか。そういう意味だったのね」
由紀子が感心したようにいった。
「それから、麻代さんが、原田さんの占いをしたとき、原田さんは、何かを知っているけど、云わない方がいいといったでしょ。あれも、田村さんに、事件のことで、原田さんが何か気づいているから気をつけようと、注意したのだと思うわ。だから、あの二人が、恋人同士なのだわ」
「えらい！　きっと正解よ。でも、殺したのは、あの気の弱そうな田村さんじゃなくて、麻代さんの方ね」
マリが、ぱちんと手を叩いた。
「マリって、すぐに考えを変えちゃうんだから」
由紀子は、苦笑した。
「それにしても、本当に、あの二人は、美男美女の組合わせだね。奥さんも美人かな」
吉田が、二人を見ながらいった。
二人は、視線に気づいたのか、立ち上って分れた。

「ねえ、いつまでこうして時間つぶしてるのかしら。初詣でに行きたいわ」
百合子が、いった。
「添乗員の人が、警察と交渉してましたよ。初詣でだけは許可して欲しいって」
吉田がいった時だった。マリの手さげ袋の中で、ベルが鳴った。
「あ、眼覚まし時計だわ」
マリは、袋へ手を入れると、ベルをとめ、大きな目覚まし時計をとり出した。
「この時計あってるかしら？　昨日、おけらまいりに行くとき遅れないように、ベルが鳴るようにしておいたんだけど」
由紀子は、腕時計をみた。
「十一時四十五分よ」
「よかった。じゃああってるわ」
マリは、時計をしまい込んだ。
「もう昼ですね。食事はどうなるんだろう？」
吉田が呟いた。

16

結局、ホテルで食事をとり、平安神宮には、バスで行って、下にはおりず、そのまま帰ってくることになった。
平安神宮は、着物姿の女性や、観光客で一杯だった。外人の姿もみえる。
バスの中は、狩矢警部や橋口警部補も乗り込んでいて、厳重な警戒態勢だった。
旅行社からも、応援の社員がやって来ていた。
「私、おりておみくじ引きたいなあ」
と、百合子がいったが、橋口警部補の一睨みにあって、それは実現しなかった。
由紀子は、往復のバスの中で、じっと事件のことを考えていた。
自分が、妻のある男性とこのツアーに参加してい

たら、一体どうするかと考えてみた。

〈ただ、彼の姿をみているだけではつまらない。夜は、同じ部屋に泊りたいと思うのではないだろうか〉

しかし、部屋割りはくじで、それも同性同士である。

〈となると、あらかじめ別に、部屋を一つとっておく筈だわ。そして、何とか口実をつけて、夜は、その部屋に集合するに違いないわ〉

このツアーの中に、誰か、個人で一部屋とった人物がいるのだ。その人物は、一人旅のような顔をしてフロントで鍵を受けとり、決して、ツアーで割りあてられた部屋のカギを受けとらないだろう。二つものカギを受けとったら、フロントがおかしく思うからである。いつも同室の相手にキーを受けとらせに行き、自分は、その人が部屋をあけてから入って行く。そして、夜は、相手がねむり込んでから出て、自分の部屋に行く。

もう一つは、二人は、ツアーの間、なにか連絡をとっているということである。別にとった部屋番号を教える必要もあるし、今度のように、自分たちの身辺をさぐっているものがいたことを知ったり、それを殺してしまったりしたら、必ず、連絡し合う筈である。

〈それは、どうしてするか……〉

一番いい方法は、さりげなく近づいて、連絡するという方法だ。

「部屋は、817号だからね」

とか、

「中村なぎさという女性が、二人の関係を探っているから、注意！」

という風にである。

〈でも、突発的なことがおこった時の連絡方法もある筈だわ〉

由紀子は、バスの中をみまわして、麻代をさがした。彼女は、田村の隣りに座って一生懸命話してい

る。

〈彼女なら、占いにことよせて、連絡することが出来るわ〉

彼女は、昨夜、マリが別の部屋で泊ったので、一人で行動できた筈である。

〈女の方は、彼女だとして、相手の男は、誰だろう？〉

彼女は、男性の中で、田村と一番親しくしている。ロビーでもそうだったし、今も隣りにいる。新幹線でも、これは、くじだったから偶然だけど、一緒だった。

〈でも、不倫の男女がいて、それをさぐりに来た女性が殺されたと、今度の殺人の動機がわかっている時に、問題の二人は、一緒にいるだろうか？　いや、なるべく離れていようとするはずである〉

となると、田村、麻代の組合わせは、本当のペアではない。その点、吉田と百合子も同じだ。今も、二人は隣りに座って話し込んでいるのだ。

マリは、添乗員と話している。伴は、由紀子の隣りだった。

由紀子は、今の組合わせは、絶対ありえないのだと判断し、伴にみえないように手帳にかきつけた。

次に、このツアーに人妻が一人いることがわかっている。ところが、中村なぎさの父親は、妻のある男性と恋愛関係にある独身の女性をさがしていると いった。

〈人妻は、除外されるわ〉

平安神宮について、みんなが、窓から写真をとったり、添乗員に、えはがきをたのんだりしていると き、由紀子は、狩矢警部のところに行った。彼は、最後部に座っていた。

由紀子は、彼に、ツアーの中で、ホテルの部屋を別にとっている人の名前が知りたいといった。

「それともう一つ、ツアーの中で、一人、人妻の女の人がいるはずなんです。その人は犯人でないと思いますので、除外するため添乗員さんにきいて下さ

い」

狩矢警部は、何かききたそうな顔をしていたが、他の人たちが、席に戻って来たので、うなずいただけで、何もきかなかった。

狩矢は、バスがホテルに帰りついたとき、ツアー全員の記念写真をとるように添乗員にいい、自分も、ポラロイドカメラでとった。

〈全員の写真をとって、フロントにみせ、部屋番号を照合して、別に一部屋とった人を探し出すつもりなんだわ〉

由紀子は、狩矢の行動力に満足して、ホテルに入った。

フロントのそばに立って見ていると、キーを受けとったのは、吉田、伴、百合子、マリの順だった。そして、あとの人たちも、次々に受けとって行く。

〈受けとらなかったのは、麻代と田村さんだわ。でも、吉田さんは、原田さんと同室で、彼は死んだから、もう別の部屋は必要ないのだわ〉

田村は、伴と同室で、彼は、伴に連れ立ってエレベーターのところに行った。

麻代は、マリが部屋に上るかどうかきいたが首をふっている。

吉田と百合子が麻代のそばへ来て、三人は、しばらく話してから、一緒にエレベーターの前へ行った。由紀子もあとに続いた。

17

しばらくして、狩矢警部が、由紀子の部屋へやって来た。

彼は、由紀子を外へ連れ出した。

「さっきのことわかりましたよ。あの中で、部屋をとったのは、田村です」

「えっ」

「そして、人妻は、麻代という女性です。彼女は、夫が海外勤務のエリート社員です」

麻代が、人妻とは思いもかけなかった由紀子は、びっくりしてぼんやりしていた。

〈では、彼女は事件に関係ないのだろうか？〉

すると、狩矢は、

「田村というのは、偽名かもしれませんね。彼は、杉原という名で、ホテルの一室を予約しています」

「えっ、杉原？　では」

由紀子は、信じられない思いだった。

「何か知っているんですか？」

「いいえ」

由紀子は、マリの恋人が杉原という名だとはいえなかった。それでも、狩矢には察しがついたようだった。

狩矢が、去ったあと、由紀子は、すぐに部屋に戻る気がしなかった。

それで、スカイラウンジへ行って、お茶を飲みながら考えた。

〈そういえば、マリの袋で、目覚まし時計が鳴ったが、あれは、ポケットベルの音だったわ〉

由紀子は、上司がいつもポケットベルを持っていたので、その構造はよく知っていた。

〈田村さんとマリは、ポケットベルで連絡をとっていたのだわ。そして、まわりに人がいるとき、鳴ったときに、ごまかすため、袋に大きな目覚まし時計を入れておいたんだわ〉

と、思った。

あの袋には、ポケットベルが入っていて、彼女は、それをとめたあと、鳴ってもいない目覚まし時計をとり出したのだ。

〈でも、東京で使っていたポケットベルが、京都で通じる筈はないわ。どうしたのかしら……〉

ラウンジからおりて、由紀子は、マリの部屋に入った。

「マリさんはお風呂よ」

麻代が、そういうと、入れちがいに出て行った。

バスルームで、シャワーの音がしている。

由紀子は、そっと、マリの手さげ袋をあけた。中には、目覚ましと一緒に、ポケットベルが入っていた。たばこのような大きさである。

とりあげると、それには、番号が、書いてあった。七桁の数字である。

その数字は、ポケットベルの呼出番号だとわかった。由紀子は、黙って部屋を出た。

夕食のため、みんなが食堂のロビーに集ったとき、田村がいないのを見すまして、由紀子は、少しはなれた公衆電話から、七桁の番号をまわして見た。

マリの手さげ袋から、ベルが鳴った。

マリは、はっとすると、公衆電話のところにやって来た。由紀子は、横にかくれた。

マリは、あわただしく電話をまわしている。

「三原マリさん。ポケットベルをわたして下さい」

由紀子がおどろいて顔をあげると、いつの間に来たのか、狩矢が立っていた。

マリがかけ出した。そこへ、橋口警部補に連れられて田村がやって来た。

「マリ、もう駄目だよ、僕たち」

田村は、美しい顔を蒼白にして、マリの眼をみつめた。

マリは田村にかけよると、彼にしがみつき、わっと泣き声をあげた。

田村は、杉原といって、上級職試験に受かって官庁につとめるキャリア公務員だった。彼には、上司の紹介で貰った代議士の娘の妻がいる。

その妻は、病気で、嫉妬深かった。

杉原は、ふとしたことからマリと知り合い、愛し合うようになった。十二月に、妻は、病院に入院し、杉原は、マリと旅行しようと考えた。

しかし、妻のことを考えると、二人だけの旅行は、駄目だと思い、ツアーを探した。マリは、京都に行きたがっていたが、年末に京都というと、この

見合旅行しかなかった。

「いいじゃないの。これだったら、かえって、奥さんが知っても、誰と行ったかわからないわ。みんな独身だから、誰が恋人かわからないし」

と、マリがいい、二人は、別々に申し込んだ。マリが由紀子を誘ったのは、いざという時、自分は、由紀子と二人で行ったと見せかけるためだった。

ところが、出発する五日前、杉原の家のお手伝いが、奥さんが、カルチャーセンターで知り合ったお友だちにたのんで、同じツアーに行かせるようにしていると教えてくれた。そのお手伝いは、夫人が嫌いで、杉原に同情していたからである。

二人は、旅行をやめようかと相談した。

「これじゃ、ツアーの間中、ろくに連絡も、話もできないよ」

杉原がいった。でもマリは、どうしても、彼と旅行したかった。それで、いい方法を考え出した。

京都には、共稼ぎの彼女の友人夫婦がいて、お正月には、海外旅行に行くことになっていた。それで、その友人宅のポケットベルと電話を借りることにしたのである。

そのポケットベルは、ホテルのフロントにあずけておいて貰った。

一方が、連絡したいと思うと、友人宅の留守番電話にかけて、伝言する。すると、もう一人の方のポケットベルが鳴り、友人宅へ電話すると伝言がきけるというシステムである。二人は、そのスリリングな遊びが気にいってしまった。

中村なぎさが、お目つけ役と知ったのは、行きの新幹線で、たまたま、マリが、彼女のメモ帳を見たためである。それには、田村と名乗っている杉原の実名が書かれ、彼の行動が、分きざみで記されていた。

杉原夫人は、ガンで、あと少したつと、死ぬことがわかっていたから、どうしても、それまで、二人の関係が知れないようにしたかった。知れると、彼

の職業まで失うかもしれないのである。杉原を失いたくないマリは、いざという時は、彼女を殺そうと決心した。

そして、決定的なときが来た。二人が、連れをまいて、脇道へ入り、キスをしているところを、なぎさに見られたのである。マリは彼女を説得するようにみせかけて歩き出し、クロロホルムをかがせて、その場からのがれた。

人の足音がしたからである。やって来たのは吉田で、彼はおどろいてかがみこみ、クロロホルムをかいで気を失った。

クロロホルムは、ホテルで同室に割りあてられた相手が寝なかったような場合に、部屋をぬけ出すことができないので、その時には一滴たらして眠らせてしまおうと思い、あらかじめ持ってきたのである。彼女は製薬会社に勤めていたから、入手方法は簡単であった。

原田を殺したのは、マリが彼と連れ立って霊山観音道を歩いているとき、ポケットベルが鳴ってしまい、目覚まし時計だとごまかしても、彼が納得しなかったからである。

原田と別れたあと、現場へ行ったマリは、なぎさを殺した。しかし、原田にさとられ、連絡がうまくいかなかったので、杉原も現場に来てしまったのだった。

おけらまつりのときには、マリは、縄を二本買い求めると、すぐに、列からぬけ、自分で、ライターで、一本に火をつけ、一本をハンドバッグにしまって、歩き出し、脇道へ入って行った。原田と待合わせていたからである。

原田は、ポケットベルのことは気がついたが、それが、殺人と関係あるとは思っていなかった。彼は、むしろ、百合子があやしいと思っていたのである。それで、マリの誘いに喜んで応じ、クロロホルムをかがされて、抵抗力を失ったところを、締め殺されたのである。

マリは、原田の縄にも火をつけ、そばへおいた。そしてハンドバッグから出した縄に火をつけてまわしながら、途中で一緒になった添乗員とホテルへ帰ったのである。

事件が解決したあと、由紀子は、麻代たちと新幹線に乗った。

むなしい気分だった。

ふと、麻代に、なぜ、乙女座の女が死ぬといったのかときいてみた。麻代は、

「私の夫が浮気している女が、乙女座なので、乙女座の女は、みんな死ねばいいと思ったの」

と、いった。

京都婚前旅行殺人事件

1

チャイムが鳴り、あと五分で、京都に着くと、車内放送があった。

「行きましょうか？」

と、愛子が、腰を浮かしかけると、黒木は、窓の外を見ながら、

「まだ、大丈夫ですよ。もう一つ、小さなトンネルを抜けないと、京都駅じゃないから」

と、いった。

愛子は、素直に、座席に座り直した。

黒木の云った通り、ひかり号が、短いトンネルを抜けたとたんに、特徴のある京都タワーが見えて来た。

「そのトランク、持ちましょう」

といいながら、黒木は、立ち上った。

愛子は、彼の言葉に甘えて、ルイ・ヴィトンのトランクを彼に渡した。

二人は、通路を通り、デッキに向かった。

ドアについている小さな窓に、顔を押しつけるようにして、愛子は、京都の街をみつめた。

憧れの京都に来たという感慨だけではなく、今度の旅行が、自分の将来をきめる大切なものだからだった。

黒木とは、三ヵ月前に、友人のマリ子の紹介で知り合った。

結婚して、すでに子供が一人いるマリ子は、いつも、「早く結婚しなさいよ。あまり、選んでないで」とか、「女も二十五を過ぎると、むつかしくなるわよ」と、いっていた。そのマリ子が、

「絶対の推奨株よ。三十歳で、T大出で、身長百七十五センチ、東洋火災の係長で、出世コース……」

と、紹介してくれたので、会ったのである。

愛子は、二十七歳になっていたから、マリ子からすすめられなくても結婚はしたかった。しかし、ここ一、二年見合いをしても、これという気のすむ相手もあらわれず、仕事に熱中していたのだった。

黒木とは、ホテルのロビーで会った。第一印象は、悪くはなかった。

きらきらするような華やかさはないが、誠実な感じのする男だった。T大卒も、東洋火災の係長というのも嘘ではなかった。

「黒木さんはね、プレイボーイではないけど、真面目でやさしい人よ」

と、マリ子がいったが、そんな感じがする男だった。

二十歳の頃は、ハンサムで、ちょっと不良っぽい男がいいわなどと友だち同士で喋ったりしていたが、本当に結婚するとなったら、そんな男と一緒では、不安で仕方がないだろうと思うようになっていた。

黒木は、愛子が気に入ったようだった。

デートして三日目に、彼はプロポーズして来た。その次に会ったときに、愛子は、イエスの返事をした。

一週間に一度くらいの割で、二人はデートを重ね、三ヵ月ほどたった時に、マリ子が、電話して来た。

「黒木さんと会ったら、一緒に旅行したいなあといってたわ。あなたを京都へ連れて行きたいって。やっぱり見合いだから、もう一歩踏み込んであなたを知りたいんじゃない？」

「婚前旅行ってこと？　でも、そんな……」

といったが、内心では、行ってみたいという気もしていた。

確かに、三ヵ月つき合っても、見合いのせいか、食事をして、お茶を飲んでという同じパターンの繰り返しで、欲求不満が残っていた。欲求不満といってもセックスのことではなく、

〈もう少し長時間一緒にいて、どんな人なのか本当の彼を知りたい〉

という気がしていた。

それは彼も同じ思いだったのだろう。

〈二、三日一緒にいたら、もっと、彼も本音をさらけ出してくれるのではないだろうか？〉

ただ、一緒に旅行するとなると、当然、セックスが伴ってくる。

愛子も二十七歳になって、処女ということはなかった。大学生の時に初体験をすまし、勤めてからも、短期間だが、軀の関係を持った男もいる。しかし、婚前旅行に行くとなると、やはり、決心と勇気がいった。それで、

「とにかく、考えてみるわ」

と、電話を切った。

考えてみると、結婚前に、そういう意味での合性を確かめてみるのもいいことかもしれなかった。

離婚の多くは、性の不一致だといわれている。彼と結婚してから、うまくいかないことがわかって離婚になるのは嫌だった。

初体験の男は、女を扱い慣れた男だったが、次の男は、稚拙なテクニックで、長つづきしなかった。

〈彼の方も、そのことが気になっているのかも知れない〉

ただ、心配は、うまくいっても、軀を知ってしまった彼が、興味をなくして、結婚をやめることだった。それだと弄ばれただけということになる。しかし、彼は、真剣に結婚を考えている様子で、結婚式の式場のことや、仲人を誰にたのむかなど、具体的なことを話している。時期も、秋か遅くても節分にといっているから、最初から弄ぶつもりはないと思えた。

〈カケだわ。これ以上いい話がすぐ来るとも思えないから、京都へ行こう。それで駄目だったら、この話はなかったものとあきらめよう〉

ようやく決心がついた日、もう一度、マリ子から電話がかかって来た。愛子が行くことにしたというと、マリ子は、ほっとしたようにいった。

「その方がいいわ。もし断わったら、彼もプライドを傷つけられて、話が冷えてしまうかも知れないと思ってたの」

結局、二泊三日で、京都に行くことがきまった。ただ、出来れば、彼自身の口から云って欲しかったという気はしていた。

自分からは云い出しにくくて、マリ子に頼んだのだろうが、少し残念だった。

2

京都駅のホームに降り、並んで、中央階段を下りながら、愛子が、

「私、京都ははじめてなんです。一度行きたいと思いながら」

と、いうと、黒木も、

「僕も、京都ははじめてなんだ」

と、いった。

愛子は、おやっと思った。

新幹線の中で、立ち上ろうとした愛子に、黒木は、もう一つトンネルを抜けてからでいいといったのを思い出したからである。

「どうしたの？」

黒木がいった。

「いいえ別に。憧れの京都に来たので、少し興奮してるんです」

「僕も同じだな。君と一緒に来れたし……」

黒木は、うれしそうな顔をしている。

二人は、駅前からタクシーに乗り、都ホテルに向った。

春の陽光がふりそそぎ、京都は春の盛りの感じだった。修学旅行の生徒や、外人観光客の姿も多かった。

高台にある都ホテルに着くと、桜が満開だった。ロビーには、観光客が多かった。

ホテルの宿泊カードには、黒木が記入した。それを横から見守りながら、愛子は、新婚旅行のようだと思った。

ボーイに案内されて七階の部屋に入る。

ブルーの絨毯が敷かれたきれいな部屋である。

ベッドが二つ並んでいる。

なにげなく、そっちを見て、はっと顔をあからめたとき、突然、黒木が愛子を抱きしめ、キスをした。

夜になったらと覚悟はしていたのだが、こんなに急にとは思っていなかったので、愛子は、驚いてしまった。

黒木は、何か焦っているみたいに、しゃにむに顔を寄せて来た。

プライドの高い、どちらかというと遠慮がちな態度を見せていた黒木が、今は、びっくりするほど熱っぽくなっていた。なかなか、愛子を放さない。

〈こんなに情熱的な人だったのか？〉

愛子は、やはりうれしくて、黒木の胸に、顔をうずめていった。

「早く、君を僕のものにしたいんだ。いいだろう？」

黒木は、思いつめたようにささやいた。

言葉遣いも、いつもとは違っていた。

抱かれたまま、じっとみつめられて、愛子は、かすかにうなずいた。

心の底では、夜、もっとムードが高まってからにして欲しかったが、彼が夜を待てないほど自分を愛しているのだと思うと、反対できなかった。

部屋の中は、カーテンが閉まって、うす暗かった。

愛子は、抱きかかえられるようにしてベッドへ

行った。
彼の手が、あっという間にファスナーをひきおろし、ワンピースをひきはがす。愛子は反射的に胸を抱きかかえて軀をかたくした。
彼は、それでも強引にブラジャーのホックをはずし、抱きしめた。愛子の上半身は、あらわになってしまった。
「君が好きだ」
黒木がささやき、何度もキスをした。完全に彼がリードしていた。愛子は、眼をつぶって、されるままになっていた。
彼は愛子のすべすべとして張りつめた乳房に唇をつけ、手を下半身に這わせていった。
とうとう、愛子の最後の衣類がとりはらわれ、生まれたままの姿になった。
いつの間にか、彼も裸になり、肌と肌が密着する。彼は、意外にたくましい軀をしていて、胸毛も濃かった。ようやく、愛子も甘い気分になって来た。
軀が足の先から溶けはじめた。それからは、夢のようだった。彼が性急に押し入って来たとき、はじめて、愛子は声をあげた。
交互にバスルームを使い、ルームサービスで、夕食をとる頃になると、愛子の方も、自然に甘えた言葉遣いになっていた。
「ちょっと、散歩に行ってみないか」
と、夕食のあとで、黒木がいった。
ホテルを出て、坂をおりて行くと、京都の繁華街の三条河原町まで道が続いている。
とりとめのないことを話しながら、二人は四条河原町まで出た。
「何か、君に買ってあげたいな」
黒木は、ショウウインドウをのぞきながら、小声で、愛子にいう。
〈婚約指輪だろうか？〉
愛子は、胸がときめいた。しかし、期待していた

と思われるのは嫌なので、
「私のお誕生日は、十月よ」
と、いった。
「そんなんじゃなくて、今日の記念にさ」
「いやン」
愛子は、恥ずかしくて軀をくねらせた。
「指輪は東京で、ちゃんとしたものを買うとして、ちょっとしたアクセサリーなんかどう？」
「いいんですか？　本当に」
愛子の声ははずんでいた。
黒木は、時計宝石店と書かれた店をみつけて、愛子をひっぱって行った。

3

指輪、ネックレス、ブレスレット、ブローチなど、金や宝石で作られたアクセサリーが美しい光を放っていた。
愛子は、二、三万円のクラスのところを見ていたが、黒木は、十万円くらいの品ものの並んでいる場所へ、愛子を連れていった。
「この中でいいのがあるかな？」
「でも、あちらにも、いいのがありましたわ」
愛子は、遠慮してみせた。彼が見栄をはっているのだったら、と思ったからだ。
彼は、店員に見えないように、内ポケットから、封筒を出した。
「何か買ってあげようと思って、貯金おろして来たからいいんだよ」
彼は、封筒から、一万円の札を抜き出して、十万円のネックレスを買ってくれた。
愛子はその場で、ネックレスを首につけた。
「うん、よく似合うよ」
愛子はうれしかった。金額よりも、彼がわざわざお金をおろしてまで買ってくれたことがうれしかったのだ。

〈彼とは、うまくやっていけそうだわ〉
二人は店を出ると、手をつなぎ合って、河原町通りを歩いた。
「明日は、どこへ行こうかな？　みんなが行く観光コースがいいかな。例えば、清水寺を見て、二年坂から三年坂を歩いて、八坂神社へ出るというコースもあるし、嵯峨なんかもいいね」
黒木は、楽しそうにいった。
〈やっぱり、旅行に来てよかったわ〉
愛子は、心の中で呟いた。
「どこでもいいですわ」
「そんなこと云わずに、行きたいところがあったら、いってくれないかな？」
黒木は、ニコニコしながら、愛子の顔をのぞき込んだ。
「そういわれても、私、京都の地理がよくわからないの」
「都ホテルから、廻るとすると、どのコースが一番能率的かな？」
彼は、二、三のコースをいった。
愛子は、また、変な気がした。黒木も、京都ははじめてのはずである。それなのに、地図も見ずに、京都の地理が、すらすら出てくるのである。
でも、その小さな疑問は、広がってはいかなかった。愛し合った時の甘く激しい感触がまだ、残っていたし、素敵なネックレスが彼女の胸で光っていたからである。
「そうだ。車でまわってみよう」
それが、結論のように、黒木はいった。
翌日、ホテルにたのんで、車を呼んでもらって、二人は、観光に出かけた。
「少し、贅沢なんじゃないかしら？　バスでもよかったのよ」
乗る前に、愛子は、気を遣っていったが、彼は、にこにこしながら、
「折角二人で来たんだから、車ぐらいいいじゃない

か」
と、いった。
愛子は、心がはずんだ。
行先は、車の運転手に任せることにした。四十五、六歳の運転手は、慣れた様子で、名所旧蹟の説明をしてくれた。
清水寺のあと、下に待っててもらって、三年坂を歩いた。坂の両側に並ぶ土産もの店で、愛子は、ネックレスのお返しに西陣織のネクタイを買い、記念に、清水焼きの揃いの湯呑みを買った。
縁むすびの神社という地主神社では、二人は、おみくじを引いた。
愛子も、黒木も、中吉だった。
愛子は、大吉でないのが不満だったが、彼は、
「おみくじは、大吉より中吉の方がいいというよ。大吉には、その先がないから」
と、笑いながらいった。
愛子は、そこに書かれた「願いごとかなう」という文字を見ていた。
〈彼とうまく結婚していけるということだわ〉
と、思ったからである。
車で、五時間かけて、観光コースを廻り、その間に、手桶弁当という名物の食事もとって、ホテルに帰ったのは、午後三時に近かった。
「明日は、嵯峨にでも行こうか？　直指庵、祇王寺、二尊院などいいと思うよ」
黒木は、ホテルに入りながら、愛子にいった。彼は、はじめに会った頃より、ずっと積極的になっていた。
「直指庵には、ノートがおいてあってね。若い女性たちが、京都に来た思い出や、考えていることを書きつけるんだよ。僕たちも明日、何か書いて来ようか？」
「いいわ。書きましょう」
「朝早く出るといいな。人が多いだろうけど……」
急に、はずんだ黒木の声が、とぎれ、足がとまっ

た。
「どうなさったの？」
と愛子がきいたとき、ロビーにいた若いカップルの男のほうが、
「おい。黒木じゃないか」
と、大声でいい、愛子たちの方へ歩いて来た。
眼鏡をかけた大柄な男だった。年齢は、黒木と同じくらいにみえた。
「おい、俺だよ。浜野だよ」
と、相手は、乱暴に、黒木を叩いた。
その時になって、黒木は、やっと、
「ああ、君か」
と、いった。

4

浜野と名乗った男は、ちらりと、愛子に視線をむけてから、
「奥さんか？」
と、いった。
「いや、中村愛子さんだ」
「浜野です。彼とは、大学が一緒でした。僕は勉強しないんで有名だったけど、彼は、秀才でしたよ」
と、男はいった。
ひとりで喋っているという感じだった。
男は、今度は、自分と一緒だった女に向って手招きした。
女が立ち上って近づいて来た。二十五、六歳で、ショッキングピンクの服を着た冷たい感じの女性だった。男の妻という感じではなかった。
〈どんな関係なのだろうか？〉
と、愛子が思ったとき、浜野が、
「今、つき合っている彼女だ。水沢マユミだ」
と、紹介した。
マユミは、一応挨拶したが、あとは、黙っていた。

浜野一人が喋りまくる感じで、
「俺たち、車を借りたんだ。よかったら、明日、一緒にその車でドライブしないか？　大型だから、四人のれるよ」
と、いった。二人が黙っていると、愛子に、
「どうですか？」
と、いった。愛子が、黒木をみると、
「明日、返事するよ」
と、黒木が代っていった。
明らかに、黒木は、当惑した様子だった。
それでもまだ、浜野が何かいいかけるのを、
「ちょっと用があるから」
と、さえぎって、エレベーターの方へ歩き出した。愛子もあわてて、あとに続いた。
エレベーターに乗ると、黒木は、ため息をついた。
「あまり好きじゃないお友だちみたいね」
愛子がいうと、彼は、無言でうなずいた。
「変な人なの？」
「ただ、ちょっとうるさいだけの奴なんだけど、君と二人だけでいたいからね」
黒木は、はじめて愛子の顔を見た。
「それなら、逃げましょうよ」
愛子は、いたずらっぽい顔をした。
エレベーターは、七階についた。
廊下を歩きながら、黒木は、
「逃げるって、どういう風に？」
と、きいた。
「ちがうホテルに行ったらどうかしら？　明日また誘われると思うと、落着かないわ。この時間からでは損かもしれないけど」
「そうだね。他のホテルに移った方がいいかもしれないね」
部屋に入ってから黒木は、しばらく考えていたが、やっと決心がついたように、
「よし、逃げ出そう。君は、この部屋から、電話を

使って、別のホテルをとってくれないか。僕は、下へおりて、時間をはかってから会計をすませてくる」

と、いった。

「わかりました」

愛子は、うなずいた。

彼と一体になって、抜け出すことが楽しかった。

黒木が出て行くと、電話を使って、他のホテルをききあわせた。

京都駅前のグランドホテルがとれた。

帰り仕度をして待ったが、黒木は、なかなか戻って来ない。

電話をかける時間を計って、お茶でも飲んでいるのだろうと思ったが、それにしても遅かった。

〈下へおりてみようか？〉

しかし、行き違いになっては困る。三十分たち一時間しても、黒木は帰らなかった。

〈下で待っているのだろうか？〉

愛子は、不安に思いながら、時計をみつづけた。

5

とうとうロビーにおりて見た。

だが、フロントの会計のところに、黒木はいなかった。

愛子は、会計のところまで行くと、

「712の黒木ですけど、急に発つことになったので、彼が支払いに来たはずなんですが……」

と、きいた。

「黒木様でしたら、ご伝言がございます」

「伝言？」

「はい。黒木さまは、一時間ほど、外出してくるので、連れのものが心配して探しに来たら、部屋で待つようにということでした」

「どこへ行ったのかしら？」

「そこまでは、わかりかねますが」

愛子は、心配になって来た。
「お支払いはどうなっていますか？」
「それは、すんでおります」
愛子は、フロントを離れた。
〈どこへ行ったのかしら？〉
黒木一人で行ったとは思えなかった。
二人で、逃げることにきめたのに、彼女に理由を云わずに外出する筈がない。
誰かに会って、急に外出したのだ。
愛子は、ロビーで会った浜野の顔を思い出した。
〈あの男かしら？〉
随分、強引な感じだったので、彼に連れ出されたのかもしれないと思った。
仕方なく、愛子は、部屋に戻った。
最初は、椅子に座って、じっと待っていたが、時間がたつにつれて、疲れて来たので、服を着たままの恰好で、ベッドにねころがった。彼の靴音がしたら、とびおきるつもりだった。
彼は、なかなか帰って来ない。時間がたつにつれて、いつの間にか、眠ってしまった。気のはる人との旅行で気をつかっていたらしい。
何かが遠くで鳴っている音で眼がさめ、はっとして枕元の電話に手をのばしたが、電話の音ではなかった。
ドアのチャイムの音だった。
「はい、今あけます」
愛子は、あわてて髪を手で直しながら、ドアをあけた。
五、六人の人が、かたまって立っていた。
その中から、突然、
「この女よ！」
と、甲高い女の声がした。
愛子は、何が何だかわからず、叫んだ女を見た。
〈あの浜野と一緒にいた女だわ〉
愛子は、すっかり眼がさめて、彼女をみつめた。
「どうしたんですか？」

中年の男が、叫んだ女性に向って、
「間違いありませんか？」
と、きいた。
「間違いないわ。この女よ」
今度は、愛子を指して女性がいった。
「一体、何なんですか？　失礼だわ」
愛子は、さすがに腹が立って来た。
中年の男性は、ポケットから、黒い手帳を出して、愛子に見せた。
「え？」
すぐには、それが、警察手帳だとは、わからなかった。その男は、
「京都府警の狩矢といいます」
と、いった。
一緒に来たのは、フロント係や、ルームサービス係だった。狩矢は、ドアの外で、
「お話があるんですが、ロビーに来ていただけますか？　それとも中に入ってもいいでしょうか？」
と、いった。
ロビーでは目立つので、部屋に入って貰うことにした。
スイートルームなので、ベッドは、視界に入らないようになっている。
愛子は、狩矢と女をソファに座らせてからきいた。

6

「どういうことなんでしょうか？」
「この近くに、蹴上の浄水場があるのをご存知ですか？」
狩矢は、愛子から目を離さずにいった。
「名前だけは、きいたことがありますわ」
「ここから、歩いて二十分ほどの場所です。インクラインとして有名ですが、その上の方で、男の人の死体がみつかりました。後頭部を強打して……」

「えっ」
愛子の顔色がかわった。
〈それが黒木なのだろうか？〉
いくら待っても帰って来ないので、事故にでも会ったのではないかと心配していたからである。
もう、窓の外は暗くなっている。
「調べたところ、浜野浩二さんとわかりました」
〈あっ、あの男だわ〉
愛子は、驚いて、そばの女を見た。彼女が興奮していた理由がやっとわかった。
死んでいたのが、黒木でなくて、浜野だったことは、ほっとしたが、そのあと急に不安になってきた。
〈浜野さんが死んだことと、黒木はどんな関係があるのだろう？〉
そのとき、狩矢が、膝を乗り出した。
「失礼ですが、あなたとご一緒だった黒木さんは、今、どこにいるんですか？」
「外出しているので、わかりません」
すると、狩矢と一緒にいた女性が、突然立ち上って、バスルームを開けてのぞき込んだり、作りつけの洋服ダンスを調べたりしはじめた。
愛子は、むっとして、
「何をなさるの？」
と、つめ寄った。
「どこかへ隠れてるんじゃないかと思って」
女は、愛子をにらみつけた。
「まあ、待って下さい。ゆっくり話をしましょう」
狩矢が、困惑した顔で間に入り、女をなだめてソファに座らせた。
「この水沢マユミさんは、黒木さんが、浜野さんを殺したんじゃないかというんです」
「そんな！」
「浜野は、さっきの奴と、ちょっと出て来るっていって出掛けたのよ。さっきのっていうと、あの人しかないわ」

マユミという女性は、また、興奮して大きい声を出した。
「いいかげんなこと云わないで下さい」
「じゃあ、あの男の人を出してよ。どこにいるの！」
マユミの眼は血走っていた。
狩矢が、手で制して、
「黒木さんに会って事情をきけば、本当のことがわかると思うんです。本当に、黒木さんは、どこへ行ったんですか？」
愛子にきいた。
「知りません。私も待ってたんです。フロントの人にきいて頂ければわかります。下へおりて行った彼を待っていたけど帰って来ないので、フロントできくと、一時間ほど出て来るので、部屋で待ってるようにって伝言があったのです。それで、ここで待っていたんです」
「しかし、あなたは、帰り仕度をしているようだし、会計もすんでいますね。何かおかしいですね」
狩矢が、じっと愛子を見た。
「きまってるわ。二人で逃げようとしてたのよ。あの人を殺して」
マユミが、強い口調でいった。
「どうなんですか？　こんな時間にチェックアウトするなんて、変ですよ」
狩矢がきく。
愛子は、素直に話をすることにした。
「あの、二人だけでお話したいんですけど」
愛子は、ちらっと女を見ながらいった。
「では、ロビーへ行きましょう」
狩矢がいい、三人は、部屋を出た。エレベーターでおりる間も、マユミは、愛子をにらんでいた。
一階のロビーに着くと、狩矢は、愛子だけを、隅のソファに連れて行った。

7

「水沢マユミさんには、聞かれては困ることなんですか？」
「はい」
愛子は、うなずいて、今日市内観光からホテルに帰って、ロビーで浜野とマユミに会ったことを話し、黒木が困っているようなので、他のホテルへ移ることにしたのだといった。
「強引に、明日一緒にドライブしようとすすめるので迷惑だったんです。私たち、結婚を前提につき合っているので、二人きりでいたかったんです」
「なるほど」
愛子は、彼が会計に支払いに行き、そのまま外出してしまったことを正直に話した。
狩矢は、うなずいてきいていたが、
「黒木さんは、どうして浜野さんを嫌がっていたのか、あなたに話しましたか？」
と、いった。
「いいえ」
「では、黒木さんが、誰と一緒にホテルを出たか知らないんですね？」
「はい、今いったように、私がここへ降りて来たときには、もう外出してましたから」
「その後、電話か何かかかって来ませんでしたか？」
「はい」
「さっき、結婚を前提に旅行しているといわれましたが、つまり、婚前旅行ですか？」
「本当にまじめなつき合いなんです」
狩矢が、にやっとしたような気がしたので、愛子は、むきになっていった。
単なる男女関係で、いいかげんな女だと思われたくなかったからである。
狩矢は、その見幕に驚いたようだったが、

「ちょっと失礼します」
といって、フロントの方へ歩いて行った。
愛子は彼が行ってしまうと、急に不安になって来た。
殺人事件がおこったことが、現実感を伴って、わかって来た。
そして、黒木が疑われているらしいということもである。
〈彼は、一体、どうしているのだろうか？〉
狩矢が戻って来た。
「フロントできいて、あなたのいっていることが、事実であることはわかりました」
「あたり前ですわ。嘘なんかいってません」
「しかし、もう何時間もたってますよ。黒木さんは、どうして連絡して来ないんでしょうか？」
狩矢は、時計をみながらいった。
「また、お聞きすることがあると思いますので、このホテルを出ないで下さい。今、フロントで、さっきの部屋をとっておきましたから。それから、黒木さんから連絡があったら、すぐ、知らせて下さい」
狩矢は、一階にいた橋口という刑事を、愛子にひきあわせた。
彼は、ここで、黒木を見張っているつもりらしい。
愛子は、部屋に戻った。すごく疲れていた。待つということほど神経の疲れることはない。
〈何故、電話して来ないのだろう？　やっぱり彼が殺したのかしら〉
それだったら、打明けてくれればよかったと思った。
結婚するつもりだった女性を、何がおこったにしてもこうして放ったらかしにする神経が嫌だった。
しかし、考えてみると、彼は、チェックアウトしたあとなので、この部屋に、愛子が一人でいるとは思っていないのかもしれないし、連絡してきたら、ホテルの方で警察に通報すると思っているのかもし

れない。

〈やっぱり、彼が殺したのだろうか？〉

彼が、会計で精算したあと、部屋にもどろうとしたとき、浜野に声をかけられ外に出た。そして、口論になって、浜野を殺してしまったということは考えられる。

愛子の知っている限り、黒木は、人を殺すような人には見えなかった。しかし、愛子だって、彼のことをすべて知っているわけではない。

やっと、今度の旅行で、少しずつわかりかけて来たところなのだ。

もちろん、マリ子から、黒木の学歴とか、つとめ先はきいていたし、デートを重ねている内に、どんな仕事なのかもわかって来た。

しかし、こんな事件にぶつかると、黒木のことは、ほとんど知らなかったのではないかということに気がついた。

今度殺された浜野という友だちのことだって、今回はじめて知ったのだ。

8

ぼんやりしていると、突然、電話が鳴った。愛子は、いそいで受話器をとった。

「お電話です」

と、ホテルの交換がいう。

「もしもし」

「あ、僕だ！」

それは、やっぱり黒木だった。

「今どこにいるんですか？　こっちは大変なの、刑事さんが来たりして。早く戻って来て！」

愛子は、早口でいった。

「出来ないんだ」

「どうして？　あなたが、あの人を殺したの？」

「違うよ」

「じゃあ戻って来て！　私も、このホテルから出ら

れなくて困ってるわ」
「電話じゃ詳しいことは話せないんだ。それに、この電話はきかれてるかも知れないし……」
「私は、どうしたらいいの？」
「また、連絡する。僕を信じていて欲しい。絶対に殺していない。……」
「でも、警察にそのことを云った方が……」
愛子は、いいかけたが、もう電話は、切られてしまっていた。
九時になったので、テレビをつけてみた。
ニュースがはじまって、何番目かに事件のことが出た。
〈東山の蹴上で、観光客の男性が殺される〉
テロップが出て、あの浜野という男の顔写真が映った。
アナウンサーが、事件の説明をしている間、画面は、現場周辺を映し出した。
京都のインクラインというのは、きいたことがあるが、このホテルの近くとは知らなかった。
黒木は、一時間ほどしたら戻ると伝言してホテルを出て行ったが、そのことから、どうしても、黒木が、蹴上に行ったとしか思えない。
「殺された浜野さんは、今日の午後三時に、都ホテルにチェックインしています。連れの女性は、ロビーで出会った浜野さんの友人と、出かけたのではないかといっています。
警察も、この友人に話をききたいといっていますが、この人は、ホテルを出たまま、今になっても、行方がわかりません」
アナウンサーが喋っているのが耳に入って来た。
その口調も、黒木のことを、容疑者扱いしているようだった。
朝になった。
いぜんとして、黒木は、戻って来なかった。

部屋に配達された新聞は、京都の地方紙なので、昨日の事件のことが、大きく載っていた。

新聞を読み終ると、愛子は、部屋にじっとしているのが耐えきれなくなって、ロビーにおりて行った。

一見してマスコミ関係とわかる男たちが、水沢マユミを囲んで、話をきいているのにぶつかった。

彼女が、黒木のことを、昨日の調子で犯人だと訴えたら、記者やレポーターたちは、愛子のところに、話をききに押しかけて来るにちがいなかった。

愛子は、あわててエレベーターで、部屋に戻ると、しっかりカギをかけた。

しばらく待っても、記者たちが押しかけて来る様子はなかった。あの狩矢という警部が、部屋に入れないよう命令しているのかもしれない。

ほっとして、ルームサービスをたのんだ。

食欲はなかったが、今食べておかないと、今日は食べられなくなるかもしれないと思ったからだった。

しばらくすると、ドアのチャイムが鳴ったので、開けると、ルームサービスではなくて、和服姿の三十歳くらいの女性が立っていた。

「愛子さんどすか？」

女は、やわらかな物腰でいった。

「はい、そうですが」

「ちょっとお部屋へ入れとくれやす」

といい、女は、さっさと入って来た。

愛子は、あっけにとられて、

「どなたですか？」

と、きいた。

「花見小路に『和子』という店を出している和子どす」

女は、相変らず、にこやかにいった。

「何のご用ですか？」

9

愛子は、けわしい顔できいた。
「実は、昨夜遅う、黒木さんが来はりましたんどす」
「えっ、彼が？」
「へえ、そうどす。どうしても泊めて欲しいといわはるので、泊めてあげました。いえ、私の家ではなくて、お店へです。もちろん、一人で」
彼女は、にっこりした。
「でも、彼は、京都にははじめて来たといっていたんですけど、お知り合いなんですか？」
「黒木さんが、京都ははじめてやとおいいやしたんどすか？」
彼女は、びっくりしたようにいった。
「ええ」
「そうどすかァ。そんならそうしときまひょ」
彼女は、余裕たっぷりにいってから、
「黒木さんからの伝言を預って来たんどす。自分が行くわけに行かへんといわはって」
と、小さくたたんだ便箋を渡した。
広げてみると、間違いなく、黒木の字だった。

僕は、浜野を殺していない。信じて下さい。ホテルに戻りたいけど、今、警察に捕まると、浜野を殺したことにされてしまいそうで帰れない。
他の場所で会って下さい。事情を説明します。彼女は信頼できますから、一緒にこちらへ来て下さい。

黒木

愛子が、手紙を読み終ったとき、ルームサービスが、注文した食事を運んで来た。それが部屋の中に運ばれる間、和子は、バスルームにかくれていたが、ボーイがいなくなると出て来た。
「一緒に行ってくれはりますか？」
「でも、ロビーにも刑事がいるでしょう？」
「そういえば、いはったようどすけど、何とかなる

のと違いますやろか」
和子は、あっさりといった。
愛子が、迷っていると、
「お食事しはるの待ってますよって」
と、いった。
「食欲がないので、食事はいいのです。でも、彼は、前にも、あなたのところに、飲みに行ってたんですか？」
昨日はじめて会った女性に、こんな大事なことをたのめる筈がないと思いながらも、きいた。
「さあ、どうですやろ？」
彼女は、笑ってはぐらかし、
「行きましょか」
と、ドアの方へ歩き出した。
〈本当に、この女性は、信頼できるのだろうか？〉
と思いながら、部屋を出てエレベーターに乗ると、彼女は、地下のボタンを押した。
地下でおりると、そこは、名店街になっていて、手洗いの横に、駐車場に抜けるドアがあった。
和子は、さっさと歩いて行く。垢抜けした色っぽい軀には、自信があふれているようにみえた。
〈黒木とは、どんな関係なのだろうか？〉
などと考えているうちに、駐車場から地上に出た。愛子が車を持って来てないことを知っている刑事は、ここにはいなかった。
和子は通りへ出ると、タクシーをとめ、
「花見小路へ行って」
と、運転手に云った。
花見小路が、京都のどのへんにあるのか、愛子には、見当がつかなかった。
タクシーは、派手な看板の立ち並ぶ繁華街に入り、中ほどでスピードをゆるめて、とまった。
和子は、タクシーをおりると、近くのビルの二階に、案内した。
クラブや、スナックが、何軒も入っている雑居ビルである。

「和子」と、名前の出ているドアをあけると、奥に、黒木が座っていた。
愛子は、黒木のそばへ行くと、
「説明して下さい」
と、切り口上でいった。
突然、殺人事件に巻き込まれ、水沢マユミという女に怒鳴り込まれた上、水商売の女性があらわれたりして、愛子は、頭が混乱していた。
「僕が殺したんじゃないんだ」
黒木は、蒼ざめた顔でいった。
「本当のことを話して下さい。嘘はつかないで」
愛子は、立ったままでいった。
和子は、黙って外へ出てドアを閉めた。
気をきかしたのだろう。

10

彼女が出て行ったのをみると、愛子は黒木のそばへ行って座った。
「嘘なんかついてないよ」
「京都は、はじめてだといっていたのに、この店や、あの和子という人を知っていたわ」
「それは、確かに嘘をついたけど、他のことは、本当なんだ」
「じゃあ話して」
「君が、他のホテルに移るといったので、僕は下におりて行った。それは覚えているね」
「ええ。そこから先よ」
「会計をすませて、エレベーターに乗ろうとしたら、浜野がおりて来たんだ。そして、話があるから、外へ出ようというんだ」
「断わればいいわ」
「それが断われないんだ」
「どうして？」
「その理由は、あとで話す。とにかく、君に伝言していこうと思った。すると、彼は、先に蹴上の浄水

場のところに行っているから、必ず来るようにといって走って行ったんだ。僕は君への伝言をフロントに頼んだ。きいてくれた？」
「ええ。一時間くらいということだったわ」
「その伝言を頼んでから、急いで、蹴上の上の方にある発電所のところへ行った。とにかく、簡単に話をつけて、君の待っているホテルへ戻ろうと思ったんだ。行ったけど、彼の姿は見えない。あのあたりは、山になっていて、人がいない。随分探したんだ。場所が違ったのかと思って、あのあたりをあちこち行ったけどいない。そのうちに、彼の連れていた女性に会った」
「水沢マユミという人？」
「そうだ。彼女も、探していたようだった。彼女は、僕の顔を見るなり、浜野さんをどうしたのってきくんだ」
「彼女が現場に行ったこと知らなかったわ」
「都合が悪いから黙ってるんだ。僕は、知らない、僕も探してるんだといった。彼女は納得しないような顔をしていたけど、僕と二人になるのが怖いと思ったらしく、ホテルへ走って戻って行った。そのあとで、彼の死体をみつけたんだ」
黒木は、ため息をついた。
「じゃあ、彼女が犯人かもしれないわ」
「そうかもしれない。ところが、僕には、動機があるんだ。それに、僕と彼が、立ち話をしていたのを見た人がいるかもしれない。現場では、彼女に会っている。それで、まずいと思って逃げたんだ」
「逃げたりしたら、よけい疑われるわ」
「仕方ないんだ。僕が現場にいたのは事実だし、彼を殺すだけの動機があると、人は思うかもしれない。そう思って、とりあえず、逃げたんだ」
「動機って何なの？」
「学生時代に、彼の恋人を奪ってしまったことがあるんだ。奪ったというより、僕は、彼女が、彼の恋人だと知らなかったんだ、最初は。彼女が浜野との

関係をカムフラージュするため、僕に慣れなれしくしてたのを好意だと思ってしまって、ある晩、クラブの旅行のときに、強引に、彼女を犯してしまったんだ」

「……」

「しかし、浜野がこれを知って、猛烈に怒って来た。今でも、僕は、その時の彼女の気持がよくわからないのだけど、犯すときに、ひとこと、浜野と結婚するのだといってくれたらよかったのにと思った。また、そのあとでも、そういって、このことは、浜野に内緒にしようといってくれたら、僕はあきらめたんだ。もし、彼女が、本当に、浜野を愛していたのなら、彼に云わなかったらよかったのにと思う。彼がどんなに苦しむかわかるからだ。しかし、彼女はいってしまった。そして、浜野は、僕も彼女も許さなかった。僕と彼との間をさまよったあと、とうとう彼女は、車を暴走させて琵琶湖にとび込んで死んだ。事故だという人もあるし、自殺だという人もいた。事故は、夏休みに、僕や浜野や、彼女やその友達と、二週間、琵琶湖畔に遊びに来ているときだった。昼は、琵琶湖で、ヨットや水泳をし、夜は花見小路で飲んだりした。ここのママは、その時の知り合いだ」

「それで、浜野さんと気まずいのはわかったわ。でも、どうして殺す動機があるの？」

愛子は、それがわからなかった。

「僕が一年前、東京で、ある女性と知り合って恋愛関係になった。そしたら、そのことを知った浜野が、彼女を強引に奪って、そのあと捨てた。僕への復讐のつもりだと思うけど、そのことで、何度かやり合ったのを人にみられている。彼は、お前が好きになった女は、みんな奪ってやると宣言した。僕は、君を奪われたくなかった。それで、話し合いに行って、口論し、彼を殺したと思われるに違いない。彼は、僕との間で、どんなことがあったか、連れの女に話していると思うんだ」

彼が、過去に愛した女性がいたことは、ショックだった。

〈でも、すべて過去のことだわ。私だって何もなかったわけじゃない。それに、今、彼は私を愛してくれている。そして、過去のことも正直に打ちあけてくれているのだ〉

愛子は、顔をあげた。そして、彼にいった。

「このまま逃げましょう。京都にいると、捕まってしまうわ。東京に帰って、どうしたらいいか考えましょうよ」

「でも、東京に帰っても、名前がわかっているから、勤め先や家に手配されたら……」

そのときドアがノックされた。和子だと思ってあけると、二人の男がとび込んで来た。

その一人は、ホテルで会った狩矢だった。

二人は、まっすぐ、黒木に近づくと、

「黒木さんだね。殺人の重要参考人として来てもらいます」

と、きびしい声でいった。

11

嵐が去ったみたいな感じで、愛子は、店内に残された。

一足遅れて入って来た和子が、彼女をなぐさめ、冷たいジュースを出してくれた。

「さあ、元気を出して。あの人は、絶対、人を殺したりしてへんわ。あなたが助けてあげないと」

彼女は、やさしいけどしっかりした性格のようだった。京都の女だからだろう。

愛子は、ジュースを飲むと、礼をいって立ち上った。

「警察に行って来ます」

「そうしてあげて」

愛子は、タクシーで、黒木の連れて行かれた警察署へ向った。

狩矢たちに会おうと思ったのだが、取調べ中ということで待たされた。
三十分ほどして、やっと、狩矢警部と会うことが出来た。
「黒木さんとの婚約は、破棄されたほうがいいんじゃありませんか？」
狩矢は、いきなりいった。
「どうしてですか？　あなたに云われることじゃないわ」
「しかし、彼は、浜野という友人を殺してるんですよ」
「彼が、認めたんですか？」
「いいえ。否認していますが、やがて自供すると思いますよ。浜野さんの連れの女性が、現場で、蒼い顔をした黒木を見ているんです。声をかけたけど、近寄ると、自分も殺されそうなので逃げたといっています。彼も、現場で、彼女に会ったことまでは、認めていますよ」
「その証言した水沢という女性が犯人かもしれませんわ」
愛子は、きっとしていった。
「彼女は、犯人じゃありませんよ」
「どうしてですか？」
「現場付近で凶器が見つかったんですが、それが、コンクリートの大きな塊なんです。重さは、十キロもあるようなものです。水沢という女性は、小柄で、華奢な軀つきです。とうてい、片手でそんな重いものを持って、人間を殺せませんよ」
「両手で持ったらいいでしょう」
「持つだけは持てるでしょうが、それを高くあげて、相手の後頭部を殴り殺すことは出来ませんね」
狩矢は、凶器をみせてくれた。なるほど、大きなコンクリートの塊だった。
「持ってみていいですか？」
「まあ、いいでしょう」
愛子は、そのコンクリートを両手で持ってみた。

確かに、ただ重くて、持ちあげるだけが精一杯で、一撃でなぐって殺すというのはむつかしいと思った。

愛子は、学生時代に、バレーボールや、水泳をして体をきたえている。力もあると思っているが、それでも、これで、男性を殴り殺すというのは無理だった。相手だって、持ち上げるまでに、気がつくだろう。

「本当に、これで殺したんですか？」

愛子は、石塊をおいていった。

「被害者と同じAB型の血液が附着しています」

狩矢警部がいった。

大きな黒いしみのようなものがあった。これが、血痕なのだろう。

「でも、黒木さんが、これで、浜野さんを殺したかどうかはわからないでしょう？　このコンクリートから、彼の指紋がみつかったんですか？」

「いいえ、それはありません。しかし、現に、彼は、死体をみつけたとき、その凶器に気づいてさわったかもしれないといっているんですよ。そして、水沢さんが、彼を現場で見ている」

12

「でも、彼女だって、殺すところを見たわけじゃないんでしょう？」

「それは、そうですが、水沢さんの話では、黒木が、浜野さんを殺す動機があるし、それ以外に、疑わしい人物もいない。警察には状況証拠ということばもあるんですよ」

「物盗りじゃあ……」

「物盗りではないですね。現金も、時計も、何もとられていないのですよ。今までに、あの場所で盗難に会った人もいない。黒木に、どうして、他のホテルへ逃げようとしたのか、浜野がなぜ嫌いなのかと問いつめたところ、二人の関係を喋りましたが、そ

れは、水沢さんの云っているのと同じでした。つまり、黒木と浜野さんは、憎み合っていたんですね」

狩矢が、勝ち誇ったようにいった。

「彼に会わせて下さい」

愛子は、少し低姿勢になっていった。

狩矢は、首をふった。

「自白したら、会わせてあげてもいいですが、否認している現段階では駄目です」

愛子は、黒木に会えないとわかると、警察を出た。

とりあえず、都ホテルに帰って、今日の宿泊費を払い、黒木を紹介してくれた東京のマリ子に電話した。

「テレビのニュースで見てびっくりしたわ」

「私、どうしていいかわからないの。知らない土地だし」

「まだ黒木さんが、犯人ときまったわけじゃないでしょう？」

「ええ。でも、彼には、動機もあるし、現場にも行っているの」

愛子は、事情を説明した。

「黒木さんは、うちの主人が飲みに行って知った人なんだけど、主人も驚いてるわ。犯人のはずがないって」

「殺された人の連れの女性が犯人じゃないかと思うの。水沢マユミという人だけど、その人について調べてくれない？　多分、ホステスか何かだと思うけど」

愛子が頼むと、マリ子は、

「主人に調べてもらうわ。わかったら、電話するわ」

と、すぐに承知した。

じっと待っていても、気が滅入るので、愛子は、ホテルを出て、地図を見ながら、蹴上の浄水場の方へ行ってみた。

インクラインが見えた。レールも、舟もあるが、

今は動いていないようだった。彼女は、レールの上を歩いていった。

観光客も、このあたりには、来ないらしい。警官の姿もなかった。

あがり切ると、小さな公園があり、それを抜けて先へすすむと、発電所の裏側へ出た。

都ホテルの側に大きな設備があるが、そこへの中継をしているもので、疏水の流れが、南禅寺の方から続いている。

浜野が殺された現場は、その疏水の流れのある草むらで、ロープが張られ、制服の警官が一人、ぽつんと立っている。

東京だったら、いや、京都でも、こういう辺鄙なところでなければ、たちまち人がむらがるのだろうが、ここには、人の姿はない。

愛子は、警官にみつからないように、そっと歩いた。

最初、現場を見ておかしいと思ったのは、どうして、こんなところにコンクリートの塊があったのだろうかということだった。

近くには、鉄筋の建物はないし、こわれた建造物もない。コンクリートの大きな塊が落ちていた理由がわからないのだ。

〈犯人が持って来たのだろうか？〉

しかし、普通なら、スパナとか、金槌のような、持ちやすくて殴りやすいものにするだろう。

それだと犯行後、持って帰ることも出来るのだ。

妙な事件だと思いながら、警官にみつかるとまずいので、ホテルに帰って来た。夜になると、マリ子から電話がかかって来た。

「わかったわよ」

彼女は、はずんだ声でいった。

「水沢マユミというのは、主人と黒木さんが、最初に出あったスナックに、前につとめていたホステスなんだって」

「どんな性格なの？」

「彼女には、難病の幼い息子がいて、お金がいるので、お金をかせぐのに必死だったということよ。他の店へ移ったのも、お金のためだったのと、浜野という男にだまされたからなんだって。彼は、マユミさんに惚れ込んでいて、毎月相当のお金を出すからといったのに、自分のものにしてしまうと、ケチで、全然出してくれなかったんだって。それで、随分、腹を立てていたらしいわ」

「そんな彼女が、どうして浜野さんと一緒にいて、彼のために、あれだけ涙を流すのかしら？」

「さあ、どうしてかしら？　男と女の関係って他人からではわからないわね」

13

愛子は、考えた末、水沢マユミの部屋を訪ねることにした。

ノックすると、ドアが細目にあいて、水沢マユミが、顔をのぞかせた。

「何の用？」

二人は、にらみ合った。

「私、あなたが犯人だと思うの」

愛子がいった。

「どうして私が浜野さんを殺すの？　仲良く旅行に来たのに」

「嘘だわ。あなたのことは調べたわ。あなたは、子供のためにお金がいる。お金のためには、どんなことでもするってきいたわ。そのあなたが、浜野さんに弄ばれ、お金もろくにくれないと怒っていたのに、今回、仲良さそうに旅行に来たのには、何か裏があるんだわ。彼があなたを受け取り人にして保険をかけたとか、彼からお金を借りているとか、何か、彼が死んだら得することがあるんだわ。あなたは、旅先で、浜野さんを殺そうと思っていたのよ。そこへ、運悪く、私たちが来たというわけ。あなたは、黒木さんと浜野さんのことをきいて、彼を

犯人にしようとしたんだわ」
「調べてみるといいわ。彼は保険なんかかけていないし、お金を誰にも貸さない人で、有名よ。私は、彼が、しばらくたって会ったとき、突然、いろんな女と遊んだけどやっぱり君がいい、結婚しようといったから、つき合うことにしたのよ。この旅行がすんだら、籍を入れてくれることになってたのに、彼を殺すはずがないわ」
「きっと何かあるのよ」
「ないわ。それに、あんな大きな凶器、私が持てると思うの」
しばらく考えていた愛子は、
「じゃあ、こういう取引きはどう？」
と、いった。
「どういうこと？」
「あなたは、お金が欲しいんでしょう？　だったら、私が貯めたお金、四百五十万円をあなたにあげるわ。だから、彼に有利な証言をしてくれない？」
「どんな風に？」
マユミは、とんでもないとはいわず、興味を示した。
「さあ、どういったらいいかわからないけど、浜野さんと黒木の間はそう険悪なものじゃなかったとか、現場に先に行ったのは、自分の方だとか、もう一人男を見たとか……」
「わかったわ。じゃあ、こう云うわ。私、浜野が出かけたあと、あとを尾けたことにするわ。でも、途中までしか行かずに、黒木さんが来るかどうか見てた。そしたら、彼がのぼってくるのが見えたから、彼に知らせようと上にのぼって行った。やっと探して行ってみると、浜野は、もう死んでいた。そのとき、山の上の方へ走って行く音がした。白い服だった。ぼんやりとしていたけど、下を見ると、黒木さんがのぼってくるのが見えた。だから、あわてて、逃げた。そして、黒木さんが、死体を見て驚いているところへ出て行って、なじった。これが本当で

す。でも、私が疑われると困るから、彼が先にいて、私が、あとから行ったといった……こういったらどうかしら？」

「あなたってすごい！　有難う。そういって、お願い！」

「お金、もう少しくれない？」

「これでせい一杯なの。二十二歳から働いて五年間、毎月五万円ずつためて三百万円、ボーナスを年三十万それに加えて四百五十万、これがすべてよ。結婚の費用にと思ったのだけど、彼が捕まってしまえば結婚どころでないわ。彼を助けてあげたいの」

「いいわ。でも、そう証言したら、私が疑われないかしら？」

彼女は、ちょっと心配そうな顔をした。

「大丈夫よ、あなたは。彼が疑われているのに、わざわざ、自分に不利なことを云いに行くんだし、あの大きな凶器も持てない。お金は、結婚すると思ったから、定期をおろして、普通預金に入れてあるの。彼が釈放されたら、キャッシュカードでひき出してすぐ払うわ」

「じゃあ、一筆書いてよ。四百五十万円借用しましたって」

「いいわ」

愛子は、その場で書いて、判をおした。

「じゃあ、行ってくれる？」

「え？　今から？」

「早い方がいいわ。それに、明日になってあなたの気が変ったら困るわ」

「じゃあ、行ってくるわ。あなたは、ついて来ない方がいいわ。あなたに頼まれたとわかるとまずいから」

「じゃあ、おねがい」

愛子に押し出されるようにして、マユミは出ていった。

14

彼女が、本当に、黒木に有利な証言をしてくれるかどうか心配だったので、愛子は、あとをつけた。

彼女は、ホテルからタクシーに乗ったので、愛子も別のタクシーでつけた。

マユミの車は、まっすぐ、所轄署に入って行く。

〈彼女が話してくれたとして、刑事が信じてくれるのだろうか？　信じたとしたら、こんどは、彼女が逮捕されるのではないか。そしたら、自分の身をかばうため、私にたのまれたといってしまうのではないだろうか？〉

愛子は、心配だったが、運を天にまかせてホテルに帰った。

しかし、意外にうまく、ことははこんだ。

黒木は、二日して釈放されたのである。

マユミも、無事に帰って来た。

愛子は、キャッシュカードで、あらかじめお金を出しておいた。色々な銀行に分けてあったから、目立ちはしなかった。

刑事に見つかるといけないので、近くで買って来た松花堂弁当の中身をぬいたところへお金を入れ、愛子は、わざとロビーで、マユミにお礼をいって、弁当を渡した。

「どうも有難うございました。あなたの証言のおかげで、彼が助かったようで喜んでいます。お弁当を三つ買って来ましたので、一つ召し上って下さい」

それから、あとの二つを持って部屋に入り、黒木と一緒に食べた。

「どうも有難う。君のおかげで助かった」

「いいえ。そんなことよりよかったわ、あなた」

愛子は、うれしくて涙が出そうだった。

「それにしても、犯人は、一体、誰なのかしら？　あなたでもなく、あの女でもないとしたら？」

「僕は、彼女だと思うけどね。彼女は最初、僕を犯

人にしようと思ったのだろうが、なんとなく、良心がとがめて、僕を助ける証言をしたのだと思うな。あの十キロもの凶器も、本当の凶器ではないのじゃないかという気がして来たよ。彼女には出来ないという証拠に。でも、彼女を犯人にするわけにはいかないしね。一応、助けてくれた形になっているんだから」

愛子は、四百五十万円のことを、云いそびれてしまった。

新聞には、犯人と疑われたが、ちがうことがわかったので釈放されたと出た。

「よかった。これで、仕事を失わないですむよ」

彼は、会社へ電話をかけた。

「みんな喜んでくれてよかったよ。だけど、あの女、浜野に保険でもかけてたんじゃないかな。どう考えてもおかしいな」

「いいじゃありませんか。早く東京へ帰りましょう」

二人は、新幹線に乗って東京へ帰った。

友人のマリ子は、喜んでむかえてくれた。

「よかったわ。お式はいつ？」

「秋ぐらいがいいな」

黒木が、愛子の顔を見ていった。

数日が過ぎた。

ある日、ふと、愛子は、妙なことに気がついた。

彼は、釈放されたとき、

「有難う。君のおかげで助かった」

といった。そのときは、興奮してきのがしていたが、今考えるとおかしい。彼は、愛子が四百五十万円出して、彼女に証言をたのんだことは知らない筈である。

〈一体、誰からきいたのだろうか？〉

まさか、あの女が云うはずはなかった。いったとしたら……。

〈二人がグルということはないだろうか？〉

と考えて、愕然（がくぜん）とした。

しかも、二人は面識がある。二人がグルだったと考えれば、話が合ってくるのだ。

黒木には、浜野を殺したい動機があり、水沢マユミにも、動機があった。

だから、京都で殺すことにして、同じ日ではまずいので、一日早く旅行に出かけた。愛子を手なずけるための一日でもある。

翌日、マユミが、浜野を誘い出した。多分、黒木が京都に行ったと告げたのかもしれない。そして、黒木と時間を打合わせて、ロビーで会うようにする。

ひょっとすると、浜野の方が、黒木を追いかけて脅迫していたのかもしれない。

黒木は、困ったふりをし、愛子にホテルを変るように電話させたあと、伝言をのこして、先に、現場に行く。途中で、浜野に電話して、呼び出す。金を渡すといったのかもしれない。

そして、彼を別の凶器で殺し、共犯の彼女のために、十キロの凶器でもう一度殴り、そこへ残して逃げる。

ホテルの女に連絡すると、女は、現場に行き、死体を発見して、さわぐ。

そうして、最後は、女が証言するのだ。彼女は、愛子がたのまなくても、そうする筋がきになっていたのではないだろうか？

女は、自分に不利な証言をわざわざしに行ったということと、大きな凶器がネックになって、つかまらない。ひょっとしたら、もう一つくらい、彼女は、安全策を考えておいたのかもしれない。

〈例えば、死体は防禦姿勢で頭に手をやったところを打たれていたと新聞にかいてあったが、あれは、被害者の腕時計がこわれ、ある時間を指していたのかも知れない。その時間は、少し早めてあって、女も、黒木も、その時間には、人に見られるようにしてアリバイを作っていたのではないか〉

愛子は、不安になって来た。

とうとう愛子は、日曜日にもう一度、京都に行ってみることにした。

京都に行っても何もわからないだろうが、休みだと誘ってくる黒木に会いたくなかった。

それで、同窓会があると嘘をいって京都に行った。

この前の現場を見たが、もう何もなく、刑事もいなかった。

愛子は、もっと上までのぼって行った。そして、急に立ち止った。

浄水場の修理で、凶器のようなコンクリートがごろごろしているのだ。

〈警察は、多分ここから落ちて来た石の一つだと思ったのだわ〉

なにげなく、そのあたりを散歩して愛子は、石のかげに、千円札が小さく折りたたまれて落ちているのを発見した。

それは、風車のような形に折ってある。

愛子ははっとした。それは、愛子のお金だったからである。彼女は、コイン入れに、千円札を一枚だけ小さく折って入れておくクセがある。電話をかけにいって小銭がたりなくなったとき、両替できるし、お守りでもあった。

それを、新幹線の中で、ビールを彼が買いに行くとき、もし、おつりがなかったらと思って渡したおぼえがある。

彼は、使わなかったから返すといったが、愛子が持っていてといったので、彼がポケットに入れたのだ。

〈彼は、ここまで来ているのだ。多分、凶器をとりに。すると、あの女の話も、彼の話も嘘ということになる〉

彼一人が殺したのなら、わざわざ、大きな凶器をとりにくる筈がない。彼は、もう少し小さな凶器で浜野を一撃し、そのあと、ここから大きなコンクリートを持って行って、もう一度、頭をなぐったの

だ。死んだ人をなぐるのは楽だ。

〈それとも、はじめにここへ来て、大きな凶器を現場まで運んでおいてから、浜野をよび出し、小さな石でなぐって昏倒させたあと、もう一度、大きな方で、なぐりなおしたのかもしれない〉

どっちにしろ、彼の云っていることは嘘で、彼は、あの女性と組んで、邪魔な浜野を殺したのに違いなかった。

帰りの新幹線の中で、ふと、黒木の動機は、別のことではないかと気がついた。

彼は、大学のとき、浜野の恋人を奪い、その女性が事故死したといった。あるていど本当のことをいわないと警察でバレるから、半分は本当だろうが、その女性は、自殺や事故ではなく、彼が殺したのではないだろうか。

それを、浜野に感づかれて、脅迫をうけていたのかもしれない。

15

東京に帰ると、愛子は、まっすぐ、マリ子のところへ行った。

この推理を話して、婚約をことわり、相談するためだった

マリ子は、気持よくむかえてくれた。

「一緒に食事して行かない？　今日、主人も、子供も留守なの。おばあちゃんのところへ行って」

「ありがとう」

食事をすませてから、ゆっくり話すつもりだった。

「冷たいもの出すわね」

彼女がジュースをコップに入れたとき、セールスが来て、彼女は、玄関に行った。

「氷はどこかしら？」

愛子が冷蔵庫をあけたとき、冷凍庫のところに、

ビニールに包んで冷やしたものがあった。
〈キャッシュカードだわ。こんなところに隠すなんて〉
とりあげてみると、十枚ほどのカードがある。名前は、きいたことのないものだった。

ウジノ　ハマコ

〈偽名で貯金してるのかしら？〉
食事がはじまったとき、隣りの人が、九州へ旅行したと土産ものを持って来た。その応待をしているときに、電話のベルが鳴った。
愛子が出ると、女の声で、
「そろそろ、あのカードでお金出して」
といった。何かわからず、
「はい？」
というと、電話が切れた。
マリ子がとんで来て、
「何だったの？」
ときいた。
「間違い電話よ」
「あそう。じゃ、食べましょう。でもテレビ見ていい？　続きもので、ずっと見てるの」
「いいわよ」
マリ子は、テレビをつけて画面に熱中しだした。
愛子の頭は、めまぐるしく動いた。
〈ウジノハマコ……浜野浩二のアナグラムだわ。さっきの電話は、間違いなく水沢マユミだった。すると……〉
黒木、マリ子、水沢マユミの三人がグルだったのだ。
水沢マユミの動機がわかったと思った。
彼女は、浜野が、偽名で貯金している金を、彼の死後、全部自分のものにするのが目的だったのだ。
黒木は彼に脅迫されていた。そして、マリ子は……。

マリ子も、浮気か何かで浜野に脅迫されていたのだろう。黒木とは夫が知り合ったといったのは嘘で、マリ子が知り合ったのにちがいない。

黒木が犯行後逃亡したのは、注意を自分にひきつけておくためで、その間に、死体からぬきとった十枚のカードを、水沢マユミが東京のマリ子に郵送したのだ。

マリ子→黒木
マリ子→水沢マユミ

が知り合いで、水沢マユミと黒木は知り合いでないことが、この計画を有利にしていた。そして二人をつなぐ、マリ子は、東京にいて、完全なアリバイがある。

〈主謀者はマリ子だわ。私に黒木を紹介したのも彼女だし、水沢マユミはお金で買収できるといったのも、彼女だわ〉

突然、マリ子が笑った。

愛子は、びくっとした。しかし、マリ子は、画面をみて笑ったのだった。

「ねえ、黒木さんに電話していい？」

愛子は、はずかしそうにいった。

「いいわよ。あっちの部屋よ」

愛子は、電話のところに行くと、ゆっくりと110番をまわした。

初出

愛人旅行殺人事件（「小説現代」昭61・3）
京都受胎旅行殺人事件（「小説現代」昭61・6）
京都見合旅行殺人事件（「小説現代」昭61・1）
京都婚前旅行殺人事件（「小説現代」昭61・7）

愛人旅行殺人事件

昭和六一年十月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六四〇円

著者―山村美紗

©1986 MISA YAMAMURA Printed in Japan

発行者―野間惟道



発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京(〇三)―九四五―一一一一(大代表)

印刷所―凸版印刷株式会社　製本所―大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181271-8 (0) (文二)

書下ろし名探偵「陳展望」の推理
香港から来た男 伴野 朗 620円

●乱歩賞SPECIAL 日本と中国を結ぶ連続殺人
さらば、黄河 伴野 朗 680円

●乱歩賞SPECIAL 満月が招く殺人の誘惑
月霊の嚆き 鳥井加南子 680円

書下ろし新社会派推理
殺人オンライン 長井 彬 620円

●乱歩賞SPECIAL 瀬戸の陶芸殺人事件
死の轆轤 長井 彬 680円

書下ろし歴史旅情ミステリー
函館五稜郭の闇 長井 彬 640円

書下ろし伝奇ロマン
天草は血染めの刃 南里征典 680円

書下ろしヴィーナスの熱い罠
鍾乳洞美女殺人事件 南里征典 680円

リーダーの条件を描く歴史長編
秀吉覇権への道 南條範夫 640円

書下ろし乱歩賞受賞第一作
喪失荒野 中津文彦 620円

書下ろし三四郎記者事件帖
特ダネ記者殺人事件 中津文彦 640円

●乱歩賞SPECIAL 奥羽八百年黄金伝説
伊達騒動殺人事件 中津文彦 680円

長編青春サスペンス・ロマン
国境の女 夏樹静子 580円

推理傑作集
女の銃 夏樹静子 640円

長編国際情報小説
チェンマイの首 中村敦夫 660円

書下ろし冒険幻代史
ハルマゲドン黒書 中島 渉 640円

書下ろし冒険幻代史
ハルマゲドン黒書 2 夜の果ての闇 中島 渉 640円

書下ろし長編推理
陽の翳る街 仁木悦子 620円

長編鉄道推理
特急さくら殺人事件 西村京太郎 580円

長編鉄道推理
四国連絡特急殺人事件 西村京太郎 680円

長編鉄道推理
寝台特急あかつき殺人事件 西村京太郎 600円

長編野球ミステリー
日本シリーズ殺人事件 西村京太郎 680円

鉄道推理
L特急踊り子号殺人事件 西村京太郎 620円

長編鉄道推理
寝台特急「北陸」殺人事件 西村京太郎 640円

●乱歩賞SPECIAL 新トラベルミステリー
オホーツク殺人ルート 西村京太郎 680円

鉄道推理
行楽特急ロマンスカー殺人事件 西村京太郎 640円

長編 新トラベルミステリー
南紀殺人ルート 西村京太郎 680円

鉄道推理
特急「おき3号」殺人事件 西村京太郎 680円

長編医学ハードロマン
癌病船 西村寿行 580円

動物小説代表作
捜神鬼 西村寿行 600円

NOVELS

長編国際冒険ロマン
碧い鯱
西村寿行 680円

生命賛歌ハードロマン長編
鬼狂い（ものぐるい）
西村寿行 640円

長編国際冒険ロマン
緋の鯱
西村寿行 680円

長編クライム・ロマン
地鳴りの家
西村　望 600円

性の遍歴を描く長編
背徳ごっこ
野坂昭如 680円

お多加師匠推理帖
三味線殺人事件
野坂昭如 640円

書下ろし経済小説
偽装取引
広瀬仁紀 620円

書下ろし企業情報小説
議決・社長解任
広瀬仁紀 660円

書下ろし経済小説
銀行疑獄
広瀬仁紀 620円

書下ろし経済小説
社長追放
広瀬仁紀 640円

●乱歩賞SPECIAL　革命の父のミイラの秘密
暗号のレーニン
藤本　泉 680円

書下ろし歴史海洋冒険小説
大海盗
藤岡　諭 660円

長編本格推理
殺人行おくのほそ道［上］［下］
松本清張 各580円

長編サスペンス
湖底の光芒
松本清張 660円

長編サスペンス
塗られた本
松本清張 660円

長編時代推理
異変街道［上］［下］
松本清張 各680円

書下ろし浮世絵は殺しの暗号
歌麿殺人事件
水野泰治 640円

書下ろし本格推理　暗号と「私の正体」
暗殺幻葬曲
水野泰治 640円

書下ろし　流氷ロケ殺人行
知床岬殺人事件
皆川博子 620円

書下ろし古典に隠された暗号文
光源氏殺人事件
皆川博子 660円

書下ろし時代劇バイオレンス
復讐鬼
峰隆一郎 680円

書下ろし歴史バイオレンス
讐鬼の剣
峰隆一郎 680円

長編本格推理
神より借りた砂漠
森村誠一 620円

長編本格推理
垂直の死海
森村誠一 640円

長編本格推理
捜査線上のアリア
森村誠一 640円

●乱歩賞SPECIAL　前代未聞の殺人プロジェクト
螺旋状の垂訓
森村誠一 680円

長編サラリーマン推理
社ちょと奴
森村誠一 660円

大手企業脅迫殺人事件
社賊
森村誠一 640円

長編本格推理　「行先不明列車」
銀河鉄道殺人事件
森村誠一 640円

傑作ミステリー
暗渠の牧場
森村誠一 680円

書下ろし将棋ミステリー
女流棋士殺人事件　本岡　類　640円

書下ろし　タイトル戦で八人が死ぬ
飛車角歩殺人事件　本岡　類　620円

書下ろし本格推理
南海航路（さんぷらわあ）殺人事件　本岡　類　660円

書下ろし怪奇ミステリー
闇のなかの巡礼　森　真沙子　660円

書下ろし五月香ロケーションPART①　センチメンタル　エニユオ
感傷戦士　森　雅裕　640円

書下ろし本格トリック推理
陸奥こけし殺人事件　山村正夫　680円

異色推理　疑惑の遺体メモ
死体化粧人　山村正夫　660円

長編本格推理
ガラスの棺　山村美紗　660円

傑作ミステリー
三十三間堂の矢殺人事件　山村美紗　640円

名探偵・令嬢キャサリンの推理
ヘアデザイナー殺人事件　山村美紗　640円

長編本格推理　白猫怪死の謎
京都紫野殺人事件　山村美紗　660円

長編本格推理　嫁死した花嫁
京都新婚旅行殺人事件　山村美紗　640円

ミステリー傑作集
愛人旅行殺人事件　山村美紗　640円

国際経済情報小説
マネー危機　安田二郎　640円

金融情報小説
兜町最前線　安田二郎　660円

長編時代伝奇ロマン
闇の太守　山田正紀　640円

実録マージャン小説
伝説の雀鬼　柳史郎　680円

伝奇スーパーアクション
黄金宮　夢枕獏　640円

ユーモアミステリー
奇想天外殺人事件　横田順彌　680円

長編新探偵小説
敗北への凱旋　連城三紀彦　620円

長編ベスト警大量殺人事件
逆転法廷　和久峻三　680円

弟殺し法廷推理
断罪　和久峻三　660円

●乱歩賞SPECIAL　赤かぶ検事奮戦記
午前三時の訪問者　和久峻三　680円

赤かぶ検事奮戦記
アリバイは両刃の剣　和久峻三　660円

長編法廷推理
悪の扉［上］［下］　和久峻三　各660円

現代悪女ミステリー
死刑台の女　和久峻三　640円

長編推理　銀行オンラインジャック
一億分の一秒の侵入者　和久峻三　680円

長編法廷推理
失踪宣告　和久峻三　680円